

---

# 気持ちの力タチ

華泥棒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気持ちの力タチ

### 【NZコード】

N9461A

### 【作者名】

華泥棒

### 【あらすじ】

私達9人グループはいつも一緒にいる。9人のうち5人は女子で4人は男子だ。高校生になつた私達はみんな同じ高校。高校生になつて恋人でもない異性とずっと仲良くするのはおかしいのかもしれない。だけど私達9人の関係は続くと思つてた。9人の中の誰かに恋人ができるも9人の友達関係はずつと続くんだ···・···・と、根拠もないくせに信じてた。

## プロローグ

『気持ちは常に変化するもので

どんなに私があがいても 気持ちは一瞬もせず、また死んだりする

つこやつさまで好きだったのに

今までもつらめきつていたり

仲が良くて、ずっと一緒にいたいって思つてたのに

『この人と喋つてるとイライラする』

とか思つてしまつたり

常に気持ちは変化する

『いいであつた』

『いいであるべきだ』

色々考えるのに

気持ちはそれに見向きもしない

それなりに

『どうひきを選びばよい?』

『どうじでこんな事になつたの?』

そう問い合わせても 返事はしない

1人ぼっちの自問自答

まるで自分が自分じゃなくなつてくれみたい

## 第1話 変化への1歩

「スカートがチェック スカートがチェック」

4月 入学式。

桜ヶ丘高校を受験 合格 した春田<sup>カスカベ</sup>部<sup>リソ</sup>燐です。

中学のスカートは無地の紺で地味だつたけど高校からはチェックなのです！！

ご機嫌スキップをしてると頭をたたかれる。

「いつたい！！」

「つるせえバカ キャーキャー騒ぐんじやねーよ」

低血圧だから朝は不機嫌な幼馴染 島村<sup>シマムラ</sup> 飛鳥<sup>アスカ</sup>が鼻で笑いながら言う。

小学生の時は私のほうが大きかったのに中学生になつてからすぐに身長を抜かれた。

ちなみに私が158cm 飛鳥が164cm。

「飛鳥 暴力はよくないんじゃねーのー？可愛い可愛い燐にセー！」

整った顔の少年 沖野<sup>オキノ</sup> 克哉<sup>カツヤ</sup>が私に抱きつく。

「こちらは身長165cmで整った容姿のため女子からモテる。

本人は本人で女好きだからまんざらではなさそう。

しかし社交的で明るい性格 スポーツ万能のため男子からも人気有。（そして余計女子にモテる）

「克哉？朝からセクハラ行為なの？」

微笑を浮かべたロングヘアの大人しげな美少女（身長155cm）  
は桜塚夢乃中学校では学年1位の成績を誇る秀才。

将来の夢は医者らしい。

「そーだそーだ！朝から暑つ苦しいだよお前は！！」

「こちらの女の子にしては乱暴な口調のショートカットの女の子は神崎奈央。（カンザキナオ）身長は163cm

「いっそ骨の一本折つてあげよつかなあ・・・」

今ため息まじりに言つたボニー・テールの女の子は松坂明美。（マツザカアケミ）家が柔道・空手・合氣道すべてを教える道場のため本人もすべてやつている。

そのためその辺の男子より強い。

身長も結構高い168cm

「おう そんな事したら慰謝料沙汰になるだろ？抑えときな

この背の低い男の子は身長157cm 岡崎 新一。（オカザキ  
シンイチ）

お金が大好きでかなりのケチ。

「あのねー そういえばねー チラロチョコの新作が出てねー 名前忘れ  
たけど美味しかったのー 今度みんなにもあげるー」

こちらの口りな雰囲気の身長146cmと小柄な少女は江田 華穂。  
(ヒウダ カホ)

好きなものは甘いお菓子とアイス。

「俺バス 甘いの嫌いだつつってんだろ?」

綺麗な女顔なのに男の子の藤井 要。（フジイ カナメ）

身長は169cm<sup>びみょー</sup>

これが私の大好きな8人。

ちなみに私の名前は春日部燐。

私達はいつも一緒の9人グループ。

小学校からのつきあいの人もいれば中学からの人もいる

だけど むかしつつからの友達に仲良しな私達は同じ高校を受

験してみんな合格！

夢乃はもっと選択肢があったけど・・・1人で行きたくないしみんなのレベルに合わせてくれた。

ザアアア・・・ツ

高校の運動場にたくさんある桜が狂ったように花びらを散らせた。

## 第2話 茶髪蒼瞳の少年

「ねえねえ クラスわけの発表つてビームにあるのー？」

「あー・・・ゲタ箱じやねえの？」

飛鳥がキヨロキヨロしながら囁つ。

ああ よれ見してたり・・・

ドンッ！

「痛ツ」

「一・?」

案の定誰かにぶつかつてしましました

「す、すこません・・・」

飛鳥が不機嫌そうな顔から驚いた顔になる。

「・・・気をつけて」

そう冷たく言い放つて飛鳥がぶつかった少年が顔をあげる。

「・・・？」

整った容姿 地毛だらうか？髪は茶色。

ああ、よく見たら田も青い。

声変わり・・・しただらうけど少し高い声

愛想笑いもなしに少年はどこかへ行ってしまった。

『誰だつけ?』

すぐにはう思った。

知り合いなはずなのに・・・

小学校中学校でもあんな綺麗な人いなかつたはずだし・・・

うーん・・・?

「燐?どつかしたの?」

夢乃が私の肩をたたいてよひやへハツと我に返る。

「う ひひと・・・なんでもない」

誰だつたんだろ・・・

結局、ゲタ箱の壁に貼られてるクラス表を見上げる。

「やつたーー私等9人同じクラスーー」

思わず大きな声で言つて飛び跳ねる。

「うるせえな 恥ずかしい奴め」

そう言つて私の頭を軽くたたいた新一、軽く伸びして自分の名前を確認する。

みんなが同じクラスでよかつた・・・

ホツとして周りを見回したとき すぐに田川についた茶髪。

さつきの人だ・・・

茶色い髪に青い目はあつてないようであつてた。

青い目を動かすことなくクラスを確認すると、こちらを見た。

「ーー」

急に目があつて次の反応に困る。

「こちらをジッと見つめてもう一度クラスを確認した。」

それから首をかしげて人ごみの外へ。

「？？？」

こんなバカっぽい奴等と同じクラスかとか思ったのかな でも顔じや名前わからんないし……？

『新入生の皆は自分のクラスの教室へ移動してください』

放送がかかりそれを合図に人々がばらけていく。

「私等は・・・1・3かあ」

全4クラスの3組

2組の子と4組の子と仲良くなれるって感じかなあ・・・

「燐？どうかしたか？」

奈央が私の頭を撫でた。

「あ、ううん 3組ってどこかな～って思つて…」

「ああ、それならうちの秋兄が教えてくれたよ。」

明美がくすりと笑う。

秋兄っていうのは明美の家の道場に通つてる高校・・・確か3年だ  
かの男の人。

身長が170後半あるとかでそこそこ強いみたい。（柔道専門らし  
いけど）

「せういえぱ秋さんもこの高校だつたねー」

そんな話をしながら教室へ入った。

### 第3話 夢乃の事情

すでに教室には何人か生徒がいて、グループで話していた。

不意に1人 机に座つてボーッとしてる人を見つける。

男子の制服に茶髪 サツキの人かな？

近くにいる女子グループのほとんどが顔を赤くしてそちらを見ている。

そういうえば綺麗な顔してたつけ・・・

恋愛関連のことを経験したことのない私には縁のない世界だと思った。

告白されたこともしたことも 好きな人ができたことすらない。

『男子』が『男子』とはわかつっていても『恋愛対象』に見れるかどうかはまた別で

まして身近にいる飛鳥とかだつて整つた顔立ちだ。（ただ克哉がずば抜けてカッコイイけど）

だから・・・なんていえばいいんだろ？ 『恋』といつもののがよくわからない。

「・・・ふうん 今年は1年生・・・男子の方が多いんだ」

夢乃が後ろの壁に貼られた出席番号順の名前表を見る。

実は夢乃是男が嫌い。

『こわい』わけじゃない『嫌い』ならしい。

理由は・・・あんまり大きな声ではいえないんだけどね

夢乃が小学生の時に両親が離婚したのです。

理由は父親の不倫。

父親は結局不倫相手の女人を選び、夢乃と母親を残しその女人と結婚してしまったのでした。

夢乃の養育費は毎月払っている点では関心。

それから夢乃是男が嫌いになつた。

ありがち と思う人はいるかもしけないけど夢乃是飛鳥達4人の男子としか喋つたりしない。

他はシカトだつたりやけに冷たかつたり・・・・・

それでも美少女なため男は次々寄つて来る。

実際 今だつて教室の中の男子は夢乃を見ている。

『もつたいない』と思う反面

恋人と親友に揺れる夢乃を見たくないから安心する気持ちもある。

いずれにしても夢乃が決めることで 私がとやかく言う筋合いはない  
わかつてはいるけどそれはとても寂しい」とで 私はなんとなく横  
で不機嫌な顔をした夢乃の横顔を眺めた。

## 第4話 みんなの恋愛事情

そういうえば視線を集めているのは夢乃だけじゃない。

奈央の横で笑ってる明美

明美も美少女・・・とういうか・・・カッコイイ系の美少女。

明美が男だつたら好きになつてたかもしれない っていう女子を何人か知ってる。

確かに明美は男前。

スポール万能 その辺の男子よりも強い・・・

筋肉のためスタイルのいい明美は男子の視線を集めている。

今もまだ不機嫌そうな飛鳥もそこそこモテる。

優しいし頭もそこそこのいいスポーツもできる。

顔だつて整つてる。

まあ、飛鳥が視線を集めるとは思つてない。（中の上程度だし）

飛鳥は昔（小学生）華穂のことが好きだつたらしい。

今ではも「華穂の」ことはなんとも思ひてないらしい。

女子の視線を集めてるのはもちろん克哉に決まつてゐる。

整つた綺麗な容姿は一緒に歩くと女子が見事にほほ全員振り返つていぐ。

小さい女の子なんて緊張して話すのがいやつて言つ子すりこるんだ。

高校でどうなることやら心配・・・。

そりそり 克哉は夢乃の事が好きなんだつた。

ただ 克哉つて夢乃以外の女の子が好きなもんだから夢乃は特別扱いされてることに気づいてない。（克哉つて私にも抱きつくし）

克哉は勘がいいから中学生の頃も同級生の恋愛事情をすべて把握できていた。敵には回せないタイプつてやつかなあ・・・

ちなみに奈央は『男で生まれたかった』つていう意識が高い。

小学校から一緒だけ中学にあがつてきた時誰よりもスカートを嫌がつたのは奈央だった。

しばらくトロジャージはつてたつけ・・・

ジャージを脱いだと思つたらブルマとかもはないでパンツ丸見え  
状態のまま屋上で寝転がつてたりした。

高校ではやめてほしーなあ・・・

明美はスタイルいいからモテるし男子の注目を集める。

だけど明美は『男は強くあるべきだ』と常に考えている。

だから皆由されたらまずは攻撃。

それからいつも同じセリフ！

「私に殴り合いで勝つたらつきあつてあげるけど?」

初めの攻撃がかならず『明美の本気 + 不意打ち』だからダメージが  
大きい。

そのため毎回男子は戦うことなく退散してしまつのだつた。

新一はとこつとこれまた恋愛にさうぱ興味なし!!

人の恋愛の話には口出すくせに自分はなんにもなし。

本人に聞けば必ずこつこつ。

「え？ だつて彼女とかできたらクリスマスとか誕生日とかの行事のたびに金使うじゃん めんどくせーっての。『デート代とかこっちもちじやなきや怒るんだろー？』

ああそりですかこの金の上者めー！

華穂・・・は 可愛いからナニヤニモトるけど喋つてみると中身も口リだから『妹』つて感じ。

相手も男の子の事は『お兄けやん』とかになつてゐるから恋愛関係まつたくなし。

前に好きな人が『いた』とは聞いたことがあるけど・・・過去形だしなあ

要は恋愛話聞いたことないなあ・・・

女顔女顔つて昔イジメられてたらしいしなあ・・・

あれだけ綺麗な女の顔だとおかまつぽいってのもあるしね。

しつかり者つてこともあつて私等の保護者つて思つてしまつ時がるくらいだし。

まあ、それぞれみんなあるつてことかなあ・・・

「こんなかからこの友達関係は崩れないで続きやつと思つてしまつ。

これからも ずっと・・・ずっと・・・

誰かが恋人をつくつても 誰かが結婚しても 出産を経験したとしても・・・悪い場合は離婚を経験しても・・・

この関係だけは変わらずに続くと思つてた。

## 第5話 燐の事情・飛鳥視点

俺 飛鳥の目の前にいる俺より田線が下の女 これが春日部燐だ。

俺と燐は小学生の時から一緒だった。

ちなみに知り合ったキッカケってのが俺の体育館シユーズをアイツが間違えて持つていつたのがキッカケだ。

男の視線を感じる。

視線を集めているのは夢乃・・・と 燐もだ。

本人は自覚ないらしいが夢乃と燐は美少女顔だ。

まあ、俺はそういうのよくわかんないけど夢乃の方が可愛いだとか男子が前に言ってた。

ただ夢乃は男が嫌いだから恋愛関係の話はない。

燐はとくと 男子を男子と見てない気が俺はする。

俺とも普通に手つなぐし・・・（中学生の頃の話）

まあ、それはそれで可愛いというか・・・なんていうか いいとは思つけど。

本人は自覚なしでグループの中での美少女は夢乃ぐらいだと思つて

いるけど自分も入ってるぞと俺は言いたい。

明るい性格で顔も美少女 頭はまあ・・・中の下なんだけど

それでも性格 顔 その辺を見れば男は寄つて来る。

男と意識してないわけだから告白とかされてもおかしくないんだが  
それを俺達4人が阻止してる。

別に恋愛感情があるとか そういうわけではないけど・・・

なんとなくこのグループの5人は『大切』なんだ。

恋愛対象じゃないけどただ大切で守りたい 自分達のそばにおいて  
おきたい。

だからうちのグループの5人の中で告白された事があるのは明美く  
らい。

明美は強いから告白されても大丈夫だという意識が4人の中である。  
まあ、それは女である明美には失礼かもしれないから黙つておくん  
だけど。

結局燐は恋愛的なものを意識してないっていうのがおおきい。

ただ・・・俺等もいつまで守ってるんだ?

そろそろ高校生

結局俺等は男と女 実際は恋愛対象のはず。

だから いつまでも守つてるわけにはいかない

「・・・燐」

「んー?何?」

微笑を浮かべてこちらを見上げる燐。

「・・・なんでもないよ

まあ いいか・・・

そばにいたいからいる そばこおくためには男を寄せ付けるわけにはいかない

この理由は どこが間違ってるか?

## 第6話 少年の正体

ガラツ

ドアの開く音。

入ってきたのは中年のおじさん・・・じゃない 先生。

「あー、みんなそろってるかー？」

答える人は1人もいなくてみんな黙つたまま席に着く。

「誰も座つてない席はないから全員だな・・・」

その後入学式があり終わったら教科書の入った袋を配られ 下校。

「あー疲れた！！」

飛鳥がため息をついて背伸びをする。

正門をくぐると夢乃もため息。

他のみんなを見てもため息をついてたり疲れた顔をしてた。

「・・・まったく 男ばつかでいやになる・・・」

夢乃是またため息。

「あのやー」

肩を軽く3回たたかれた。

後ろから聞きなれない声。

男子の声。

遠慮がちで 気弱そうな・・・

振り返るとあの茶髪＆青瞳の少年。

「・・・何か用？」

飛鳥がその人を睨みつける。

いつもこいつ。

私達女子に話しかけてくる男子は全員睨みつける。

「もしかして・・・燐？」

「へ？」

「俺 覚えてない？カノンだよ！！」

カノン・・・？

茶髪に青い目・・・？

カノン・・・

「こんな知り合い……………？？」

「オイ なんなんだよお前？」

今度は新一が強気に言ひ。

「ちょっと 新一！えーと…………？」

「幼稚園一緒にさー小学校にあがる時俺が引っ越しちゃったんだよ  
！！！」

幼稚園・・・

不意に美しい青い瞳から大粒の涙をこぼす少年が浮かんだ。

「カノンちゃん！？」

「ちゃん・・・ね アハハッ」

「そうだ！いたよ！－こんな子！－

「うだうだ！－なんで覚えてなかつたんだろ？－？」

「高校生になると同時に帰ってきたんだよ－ よかつた！また会えて」

「アハハ！そりいえば廉次とかとはまだ連絡とつてるよ？」

「そつかー今度みんなで集まりたいなー！」

につこりと微笑むカノン。

幼稚園の頃を一瞬思い出して安心した。

## 第7話 僕が・・・ヤキモチ？（飛鳥視点）

「・・・・・」

なんなんだ？

声かけてきた男と親しげに喋つてゐる燐。

なんか 涙くムカついてきた。

廉次つて誰だよ？

・・・俺だつて 小学校からつきあいだけど・・・

つて なんなんだよ

アイツとはつあつていいわるー。

誰と どんな男と 燐がどうなうつと・・・俺には関係ないはずなのに

口出しそうる権利なんて ないはずなのに

わかってるのに

・・・なんだ俺

黒い気持ちが渦を巻いていく。

「あ、ゴメンね！紹介するねーこの人私の幼稚園での幼馴染のカノン！」

「初めましてー」

「初めましてー」

「ハーフかなんか？」

なんだよ

みんな 何普通に仲良くなろうとしてんだよ？

なんでそんな友好的なんだよー！！

「あ、家 母親が日本人で茶髪なんですけど父親がアメリカ人で青い目してんだ。遺伝ってやつでー」

「へー綺麗な目だねー」

「ありがとう」

イライライライラ・・・・・・・・

俺1人取り残される。

俺1人 会話に入つてない。

入れない 入りたくない 入らない

すつげー・・・ムカつく・・・

殴りてえ・・・・・・・・・・・

「・・・飛鳥?どつしたの?」

心配そうに燐が俺の顔を見上げる。

「・・・・・・・別に なんでもねえよ」

ムカムカする気持ちが抑えられなくて 機嫌の悪そうな顔しかできない。

「『めんねカノン』コイツ低血圧なもんだから不機嫌なのー!」

バカ そんなんじゃねー!

カノンって奴は俺をジーッと見る。

「・・・・へえ?」

そいつ言つてにっこり笑つたそいつは本ッ当にムカついた。

なんとかなんてわからぬけど

ソイツがいる間ずっとイラライライライラしてて

ずっとそいつのこと殴りたくて

燐に近寄つて欲しくない なんて

俺が思う権利なのに そんな風に憚つてしまつた。

・・・・あれ？

もしかして俺『ヤキモチ』ついてもつ 姦いでる・・・のか？

## 第8話 飛鳥の気持ち

カノンとはメアドを交換してわかれだ。

元の9人に戻つても飛鳥だけ不機嫌。

「ねー飛鳥? どうかしたの?」

新しい飛鳥の制服 少しかたいシャツをひっぱる。

「別になんでもねえっつってんじやん 離せよ」

・・・いつもは離せなんていわないのに 別になんでもないわけないじやん

「おー飛鳥 なんなんだよわからへー」

新一がため息まじりに飛鳥に言ひへ。

「だからなんでもなこいつてんだるー」

「なんでもない顔かよそれ。」

「そつだそつだ 新一もつと言つてやれー」

夢乃達も呆れたよつにため息をつべ。

「・・・アイツ ムカつく」

「アイツ？カノンって奴の事か？」

カノンがムカつく？なんでも

「・・・なんか ムカつく」

飛鳥はそれだけ言って頭をかく。

それから妙に早歩きになつて先頭に立つ。

それに走つてついていく。

歩幅が違うから飛鳥が早歩きだとこいつちは走らなきやいけない。

なかなか追いつけなくて 飛鳥の後姿からじや何を考えてるのかなんてわからなかつた。

顔が見えれば 少しはわかるんだけどなあ・・・

小学校から一緒に 朝顔を見ただけで機嫌がいいか悪いかわかってしまう。

ああ、あの人の事嫌いなんだな とか・・・

「・・・飛鳥！待つてよ！」

「・・・」

飛鳥は返事もしないでスタスタと早歩き。

息が切れてきて後ろを見るとみんなはほつといて後ろの方で喋ってる。

「ツ 飛鳥！－なんなの！？はつきり言えばいいじゃん！－」

「つむせえな！言いたくねえから言わないんだり！？」

そう言つてこっちを向いた飛鳥の顔は真っ赤だつた。

「？？？」

なんで怒るの？

なんで顔赤いの？

せっかく顔が見れたのに 疑問が増えただけだつた。

飛鳥のこんな顔 初めて見たんだもん

「けつけど・・・カノンはいい人だよ！？優しかったし・・・それに・・・」

「うむせえー聞きたくねえよーー」

飛鳥はそういうと家と方向が違つのに曲がり角を曲がって走つていつてしまつた。

向こうが走つてしまつたらこつちは追いつけない。

歩幅も 元々の速さも 体力も 全部飛鳥が上。

「・・・変なの」

飛鳥の後姿はすぐに見えなくなってしまった。

## 第9話 キッカケ 見えなかつたモノ

「…………」

イライラする

燐 心配してたよな……って アイツが悪いんだよ……！

なんでカノンってのかばうんだよ！

アイツのいいトコなんて聞いたかねーよ！ 教えんじゃねえーー口に出すな……！

・・・って

「・・・わけわつかんねー俺・・・」

何で燐に怒つてんだよ

何で二つちの道に来てんだよ 家回こいつじゃんか  
ここまでイライラしたことあつたっけ？

何でイライラすんだろ？

覚えがない

「あー！ わつかんねえーー！」

思わず怒鳴ると、さばにいた親子がじみを覗く。

ハツとしてまたため息をつぐ。

ポンッ

「あ？」

肩をたたかれてふりむくと、さばは「ヤーヤーヤ」笑う新一。

ビuffersら俺を追ってきたらしー。少し汗をかいてる。

「・・・なんだよ新一」

「いやーお前もわっかりやすい奴だなーってさー」

何がわかりやすいんだよ？

またイライラが来る。

「はあ？意味わかんねえ」

「燐にあたるなよ お前がムカついてんのはカノンだろ？」

「・・・燐もムカつぐ」

「へ？」

「カノンって奴のいいトコ俺に教えやがって 知りたくねーよ か  
ばうんじゅねーよ

こんな事新一に言つたつてしまふがないかもしれない

口に出してからやうと恥ずかしくなる。

「ぐつ別に俺はつ

「アハハハハツ！－！」

新一が狂つたように大笑いする。

わつきの親子は早歩きで俺等を追い抜く。

「なんだよお前！－－アハハツ　わつこつ」とか－－」

「は？ わつこつ」とつて　びつこつことだよ？－－」

「自覚ねえのがお前らしけどバッカだな－」

「なんなんだよ－早く説明しろよ－－！」

「お前さー燐に惚れてんじゃねーの？」

・・・・あ？

「なんだそれ　バッカじやねーの？　んなわけねえじやん

燐だろ？

そりや可愛いし　性格だつて・・・

けど 今さらそんなことあるわけないだろ

「いや、俺も今気づいたけど 考えてみれば一致するよな？4人の女に近寄る男を俺も睨むけど お前つて燐の時異常に反応するしな！！」

「は？そりゃ 仲いいんだし・・・当たり前じゃねえの？」

「バー力 友達だからってだけで守るかよ。だったら明美達も同じようなだろ？」

言われてみて頭の中でビデオみたいにまき戻しする。

以前ゲーセンに9人で行った時夢乃がナンパされても男を追い払ったのは新一。

その前に明美が痴漢された時なんて俺はみんなが痴漢した奴を警察につきだすのを見てるだけだった。

確かに 燐の時が一番反応するけど・・・

「今まで燐が俺等以外の男と仲良く・・・ってことがなかなか、なかつたからな。気づくキッカケがなかったってことか

「な・・・ッ！？けど燐だぞ！？」

「うんうん わかつてゐよ。けど 少し考えてみた方がいいと思つぞ？俺は」

考えるつて・・・何をだよ?

俺が燐を好き?

んなわけあるかよ・・・

意味 わかんねー・・・

「カノンに嫉妬するのはいいけど 燐を怒らせない程度にな。」

「・・・別に 嫉妬なんて・・・」

「ハイハイ 早く氣づくこったなー」

新一が妙に「機嫌に歩き出す。

・・・なんなんだ

## 第10話 1人ぼっちの家

「まったく 飛鳥なんだつたんだろ?」

家に帰つて自分の部屋に入る。

自分の部屋・・・つていつも全部自分の部屋みたいなものなんだ  
けどね。

私は一人暮らしをしている。

母親と父親は海外に暮らしてるんだ。

父親が仕事で海外に単身赴任したと思ったら母親はすぐに私よりも  
父親を選び海外へ行つてしまつた。

結果私はこのマンションの広い部屋で1人ぼっちになつてしまつた。

毎月通帳に生活費が入つてくる。

それは高校1年生の女の子が暮らすにはじゅうぶんな金額。

とはいえる 女子高生つていつたら・・・流行がビッグとかでお金使つ  
ちゃうイメージがある。

そういうないようにはしておかなくては。

ベッドに寝転んで白く広い天井を眺める。

飛鳥 どうしたんだろうなあ・・・

何か言いたげな顔してたし 怒つてた。

私 何か悪いことしたっけ?

カノンの事・・・とか 聞きたくないだとか

意味わかんないよ・・・

明日気まずい・・・かも

飛鳥とは 仲良くしてたいのになあ・・・・・・・

「あー！..飛鳥のバーカ！..」

チャララー

携帯からの着信音。

「うん・・・?」

誰だろ?

グループの9人には全員同じ曲を設定してるから誰から来るのかわからぬ。

わけようつて何度も思つたけど・・・誰にはなんの曲があつのかわからぬ。

結局9人共青春物の曲を設定してゐる。

携帯を見ると夢乃からだつた。

「夢乃お・・・?」

なんだろ?

話したい事なら一緒に帰つたんだから話せたはずなのになあ・・・

体はもう寝る準備を始めていたみたいで なんだか見にくい。

メールを開いた。

## 第1-1話 夢乃と飛鳥からのメール

田をこすつて画面を見る。

『飛鳥の事だけど 新一が追いかけたんだから大丈夫だと思うよ。』

夢乃からのメールはいつもこいつ。

いつも 私の心配や不安を見透かすような内容を送ってくる。

それを読んで 悲しくなったり 嬉しくなったり 安心したりする。

だから夢乃が好き。

『うん ありがとう!』

返信するとまたすぐ返事が来た。

『気にあることないと思うけど・・・・飛鳥はカノン君の事が嫌いなんじゃなくて、燐と仲良くしてたのが気に入らなかつたのか もよ?』

・・・へ?

どういう意味?

私とカノンが仲良くしてたから機嫌が悪かったの?

なんで？

「？？？」

『どういう意味？なんで私がカノンと仲良くしたら飛鳥が機嫌悪くするの？』

そうメールを送ったけど　夢乃からの返事はなかつた。

しばらくして　意識が遠のいてまた着信音。

「んん・・・」

手を伸ばし　携帯を持つ。

また田をこすってメールを見ると夢乃。

『返事送れて、ゴメン　自分で気づいたほうがいいと思う。飛鳥は素直じゃないから・・・意味がわからんかったらそのつちわかるから気にしないでいいと思つよ』

「？？？」

やつぱりわからんかった。

そのつちわかる？

そのつちって　いつ？

明日？来月？来年？大学生になつたら？大人になつたら？お年寄り

になつたら？

・・・私が その意味を理解するまで みんなは私の側に いく  
れるの・・・?

飛鳥 全部教えてくれればいいのに・・・

チャラリー

「・・・」

また着信。

見ると今度は飛鳥。

思わず飛び起きてメールを見る。

『さつきは急に怒ってゴメン。ちょっとイライラしてたから・・・  
本当になんにもないから。意味なくイライラして・・・ 本当ゴ  
メン』

「・・・・・」

なんとなく ホッと胸が言つた気がした。

よかつた

飛鳥からメールが来なかつたら 明日私学校行きたくなくなつてた  
かもしない。

『うへん 謝りなくていいよ。また明日ね（>\_>）／＼』

『

寝ようと思つたけど やめて夕飯を作りにキッチンへ向かった。

送信して携帯をベッドに置く。

## 第1-2話 飛鳥の夢 不安

夕飯食べて お風呂に入つて ちょっと勉強して・・・

それから寝た。

久しぶりに夢を見た。

飛鳥が出てきた。

飛鳥はなんとかわからないけど怒つて 耳まで真っ赤にして怒つ  
てて

私にはそれがどうしても理解出来なかつた。

『どうしたの?』と私が聞くと飛鳥は私を睨みつけて 私に背を向  
けた。

そして ビニカへ歩き出す。

まつて 飛鳥

お願い 待つてよ

どうして

探しでも 飛鳥は見つからなくて

「…………」

突然目が覚める。

・・・よかつた 夢で。

「…………飛鳥？」

やつぱり いつかはよなうしなくちゃいけないの？

制服を着て 朝ごはん食べて・・・

「行つてきます！」

誰もいない家へ言つ。

ガチャーンッ

鍵を閉めてエレベーターに乗る。

変な夢だつたなあ・・・

飛鳥 何かあつたのかな？

誰かの夢を見るのは よく

・その人の事を寝る前考えてたから

・その人と同じにおいのものがあつたから

・その人が自分に会いたいって思つてたから

・この後本当にそれが起つるから

つて 小さく頃聞いた。

確かに飛鳥の事考えてた。

においは・・・ないなあ

向ひが会いたい？ どうだらう

・・・起る の？

飛鳥 離れていつちやうのかな？

ボーッと考へてるとガタンッといづ音。

ああ 1階についてたんだ

マンションを出て学校へ。

『トントー』

「へ？」

背中に何かがあたる。

それを拾うとケシ「！」。

「？？？」

後ろを見ると飛鳥。

「あ・・・すか・・・」

「おはよ 何ボーッとしてんだよ？」

「なんでもないッ」

飛鳥は『変な奴』と言つて私の横に並ぶ。

「・・・ねえ 飛鳥」

飛鳥を見る。

飛鳥は不思議そうな顔で私を見る。

・・・聞いて また変な奴つて思われるだろ? なあ

「飛鳥 どつか行つちやつたり・・・しないよね?」

「はあ？」

マヌケな声

ああ 飛鳥が珍しく朝元気だったのに・・・不機嫌なつらやうのかな?

「何 どうかしたか?」

「・・・」

なんとなく泣き声になつて下を向く。

「・・・燐?」

「やだよ 飛鳥がいなくなつちゃうなんて」

チラリと飛鳥を見ると少し顔が赤くなつてた。

何照れてんの?イツ。

「何言つてんだよ 僕がいなくなるわけねえじゃん?」

「・・・本当に?」

「なんなんだよ 朝から辛氣臭え事言つなよなー!」

「・・・飛鳥 大好きだよ 」

にっこり笑つて言つと飛鳥は顔を真つ赤にした。

変なの 熱でもあんの?

鼻歌を歌いながらスキップをして飛鳥を追い抜いた。

飛鳥 いなくなつたら ダメだよ

ずっとそばにいてよ・・・?

## 第1-3話 燐への気持ち？（飛鳥視点）

「・・・」

やばい 僕今絶対に顔真っ赤だ・・・

簡単に 好きとか言つてくんじゃねえよ

そりや そういう意味じゃねえってわかつてんけど・・・

ああ バカだ俺

なんで嬉しいんだろ

なんで顔赤くしてんだろう

こんな 好きって言葉意識してんのは俺だけのはずなのに・・・

あれ？

本当に俺 燐の事・・・・・?

教室に入り席に座る。

それからかゆくもない頭をぐしゃぐしゃとかく。

何考えてるんだ！！

んなわけねえだろ！！

新一に催眠術でもかけられたのかよ！？

燐のこと好きなわけない好きなわけないありえない！！

一  
·  
·  
·  
八  
丁  
」

ため息をついて荷物を机の中に入れた。

おはよー飛鳥

声のする方を向くと克哉。

「克哉おせよ」

「やっぱ不機嫌だな  
アハハツ」

「お前は朝から元気だな・・・」

俺だって今日は目覚めスッキリで気分よかつたさ

うん、この高校の女子おもしれーぞ。さつき階段でナンパされた。

「ナンパ…?」

「おう 何組の子ー?名前教えて カツコイイねー! だよ」

「ふーん」

だから”機嫌なのか

女好きの理由がわからない

「ま、可愛かつたからメアド教えたけどね」

「・・・お前って バカだよなー」

「バカ？何言つてるんだ！青春してるんだよー」

何が青春だよバーカ

中学生の時克哉は2度ほどドロドロな関係を繰り広げている。

確かあれば2年の1学期 このバカ3股かけてやがった。

それを3人共に知られて女がギヤーギヤーわめいて・・・

ありや聞いてるこっちがこわかった。

燐たちにはあんなってほしくないもんだ。

2度目は3年の2学期。

また浮気がバレたらしい。女が4人ほど教室で口論していた。

結局は克哉が悪いことになつてさんざん怒られてたけどな。

「お前女をなんだと思つてんだよ・・・」

「いーじゅん だつて女の子って可愛いし楽しいんだよねー」

「・・・よくもまあ燐達に手出せないよな」

「出したら怒るけどな。」

「ああ、俺実際夢乃狙いだから。」

・・・・・あ?

「ゆめぐり」

『夢乃ー!?』 とこおひとして口をふさがれる。

「言つなよー本人は気づいてないし 気づかれたらヤベホじゅん?..」

確かに・・・

夢乃はトラウマがあつて男とかかわりたがらない。

俺等4人は別として・・・。

「どつどつすんだよ? アイツ男嫌いだし・・・」

「あーまあね」

「お前みたいな女好きもつての他なんじゅ・・・」

「失礼な 確かに俺は女の子が好きだけ」アイツと両思いになれば女遊びはしない！」

「・・・両思いになんなくてもすんなよ 信頼ねえじやん」

「アハハツ まあいいじゃんいいじゃん

よくねえよ・・・

人事ながら心配になる。

・・・心配 するのはいいけど・・・

じゃあ 僕は？

燐の方を見る。

登校してきた明美と喋っていた。

なんの話をしているのか 聞こえなかつたが笑っている。

「・・・ツー」

ハツと我に返り克哉のほづを向く。

・・・何 考えてんだ俺は

変だ・・・・・ 新一があんなこと言つからだ！――――



## 第1-4話 タイミング（飛鳥視点）

キーンゴーンカーンゴーン・・・

チャイムが鳴り響く。

みんなまだ席には着かない。

しばらくして先生が入ってきて慌てて座る。

先生がプリントを配りながら話をする。

俺は燐の事が気になつてどうしても話が頭に入らなかつた。

ああ 僕は漫画でありがちな初恋でもしてんのか？

なわけねえだろ

初恋でもなければ今恋 자체してねえって。

1時間目は担任による数学だった。

中学校の復習だから難しくない。

それでもやつぱり頭に入らなくて黒板に書かれた字をノートに写して終わりにしてしまった。

「・・・・」

2時間目・・・は 理科か。

入学式に見たハゲた先生を思い出す。

確かあの人だつたつけ・・・理科つて。

チャイムが鳴り休み時間。

尿意を感じて教室を出る。

学校のトイレは臭かつた。

春休みの間掃除してなかつたんだう。

とはいえ我慢してもしょうがないので中に入る。

できるだけ息を吸わば苦しくなつたら口から吸う。

ジャーツ

水を流しすぐに出る。

体においがこびりつかないといいんだけど・・・。

「ああ、君ー何組だい？」

「へ? 3組ですけど・・・?」

見ると理科のハゲた先生。

「 いやつか　じゃあこの荷物理科室まで運んでくれないかい? 」の子  
と一緒に

「 は? 」

見るといつこには何用か本を両手に持つて立っている燐。

ああ　いやなタイミングで出てしまつたらしく。

おかしい

漫画で定番な」とばかり。

まったく・・・俺は運がいいのか悪いのか。

俺は燐の倍ほどの本を両手に持つた。

おい 先生

よくもアンタこれを教室まで運ぼうとか思つたもんだ。

「 いやー授業で使おうと思つたんだけどね　いらなくなつてしまつ  
てー 」

・・・自分で運べよな

「 じゃあ頼むよー理科室の場所はわかるかい? 」

「・・・わかります

ああ わかるとも。

入学準備の説明会の時に集まつたのが理科室だつた。

ああ 知つておきたくなかったな

「んじや燐 行くぞ」

「う うん!」

燐がよろよろしながらひつこつとくる。

あれ 何用だ?

まあ、見た目からして重そつなのはわかる。

まして燐は力がない。

それは小学生の頃からの体育の授業でわかつてゐる。

これは 僕が少し持つてやる・・・べきか?

とはいえ俺だつてかなり重い。

「ちよつ飛鳥 待つてよ!」

燐がかなり後ろからついてくる。

不意に階段で足を止める。

あんなこよろよひしてゐるのに階段を何事もなくおつれるとま思えない。

しかた・・・ないか。

「燐 少し本かせ。持つか?」

思い切つてそういうと燐は嬉しそうな顔をした。

「ありがとー!」

「・・・別に」

ハア・・・

ため息をついて燐から1部の本を預かった。

## 第1-5話 理科室で（飛鳥視点）

わざわざと理科室に行つて教室に戻ればいいんだ。

何事もなく・・・。

「ホラ燐 理科室ついたぞ」

「あ、うん！」

少し持つてやつたのにそれでも燐は重そうこの辺の歩いてる。

もつと持つてくれつて言つてるつもりか？いや、そこまで賢い奴じ  
やない。

どちりかといえど・・・

ガラッ

理科室のドアを開けて ある事実に気がつく。

この教室の中で 僕と燐は2人きりだ。

「・・・・・」

思わず本を1冊落とす。

「え？ 飛鳥？」

「あ・・・いや なんでもない」

キヨロリと辺りを見回すと大きな棚があつて張り紙。

『資料（主に本）入れ』

『じー寧なことだ。ここに入れればいいらしい。

棚のそばまで行き開けるとすっからかん。

全部持つてきたのかよ！？

ため息をついて本を机へ並べる。

すぐ後ろで飛鳥が本を机の上に置く音がした。

棚は理科室の一番奥。

燐 なんでドアを開めるんだよバカ！

口に出せば意識することがバレバレだから言わない。

「・・・燐 先に教室戻つてろよ」

「え？ でも 一人じゃ教室の場所わからんないし・・・

なんだよそれ！！」

そういう方向音痴だった……

ため息をついてまた本を片付けにかかる。

もうひん一番上の段から。

一番上の段はきっと燐には届かない。

俺の持つて来た分を棚に収めた棚から離れると入れ替わりで燐が来る。

「おい燐 気をつけないと……」

遅すぎた。

「…………」

「…………」

バサバサバサバサツ――――

燐は棚に頭を打った。

そしてそのいきおいで上の本を落としてしまった。

「…………」

俺の頭や肩から本が落ちる。

自画自賛してもいいだろ？

さすが俺。

「燐 大丈夫か？」

とつやに燐を抱きしめるかたちになつて本から守つた。

「う・・・ん 飛鳥大丈夫？」

燐が俺の胸の中で震い。

やつ 胸の中。

「・・・・・――――」

かああつと顔が赤くなるのを感じる。

どんだけ俺は定番を達成していく！？

しかも燐相手に！――

いきおいで座り込んでしまつたらしく燐のスカートがめくれている。

いや、もう下にはこじるんだが。

変なことを考えそつになつて慌てて燐から離れる。

「やつ 早く片付けのー！」

「？ うん飛鳥何怒つてるの？」

「お前のデジで戻れでんだよ。」

「だって ぶつかっちゃったんだもん！」

クソ  
情けない

顔はきつとまだ赤い。

そして  
みつともない」とに体に燐を抱きしめた柔らかい感触が残  
つてる。

心臓がやかましい。

「・・・・・ツツ」

何燐相手にドキドキしてんだよ俺！――――――

## 第16話 飛鳥の怒り

飛鳥がかばってくれたおかげでどこも痛くない。

飛鳥 顔が見れないけど大丈夫かなあ？

本が落ちてくる時 抱きしめて守ってくれた。

私を自分の方に引き寄せた時 ぐいって・・・

わ 何私赤くなつてんの！？

だつて 飛鳥すうじい力強くて・・・なんかドキッとしたんだもん・・・

なんかまだドキドキしてる。

飛鳥の胸の中は凄くあつたかくて 安心できた。

男子 なんだよね

なんか今さら納得。

私とか 夢乃とか・・・明美とか・・・。

それから新一や克哉

みんな同じだと思ってたのに

小学校の頃も あんまり背だって変わらなかつたのに

中学生になつて いきなり抜かれて

いつの間にか全部抜かされてた。

なんか・・・今さら 気づいた気がするなあ

本を全部片付けて私達は教室へ戻つた。

教室へ戻ると新一達がニヤニヤしてた。

「？？？」

なんで笑つてるのかわからないままで席に着く。

「ああ、2人共ありがとう。」

先生がにっこりと笑う。

授業中なのに もうきの飛鳥の事が頭から離れない。

ずっと胸がドキドキしてる。

飛鳥の事 ズット変なのって思つてたけど・・・

今度は 私が変な人になっちゃつたみたい・・・

## キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴つて休み時間。

わっとみんながつるわくなる。

話した事もない女子や男子が私の両腕をつかんでひっぱってきた。

「えー？ ちょっと なんなの！？」

先生のいない黒板の前に立たされる。

隣には飛鳥。

「え？ え？ え？ 何？」

飛鳥はため息をついていた。

不意に飛鳥の顔を見るとすつごに不機嫌。

「今までになじくら」 怒つてる・・・

「理科室で2人で何してたのー？」

「ずいぶん帰つてくるの遅かつたじゃん！」

「2人共授業中ボーッとしてたしーーー！」

喋った事もない 顔も 名前もわからない人達が笑いながら言つ。

新一や華穂達もくすくすと笑つてゐる。

な・・・・・つつ！？

顔が真っ赤になるのがわかる。

「燐ちゃん顔赤いよー！」

「ーーー」

急に腹が立つてきた。

なんでこの人達にこんな事言われなきやいけないのーーー？

「2人共つきあつてるのーー？」

飛鳥と私がー？そんなわけないじゃんーーー！

全然知らない人が・・・変な事勝手に言わないでよーーー！

かといって 怒鳴るわけにもいかない。

隣のクラスの子達まで集まつてきてる。

否定も肯定もできず 顔が赤いのもおさまらなくて

急に泣きたくなつた。

「燐！」

夢乃達の声が聞こえた。

ドンツツツ！……！

1番前の 誰かの席を飛鳥が蹴る。

『ガチャンッ ガンッ』

派手な音をたてて机と椅子が倒れ 中身がなだれる。

「あー！俺の机！！何すんだよーー！」

「ふざけんなよテメエ等ーーー！」

飛鳥のひどく怒った大きな声。

ずいぶん 久しぶりに聞いた。

うつむ 以前聞いた時よりずっと迫力があつて・・・

「ある事ないことギヤーギヤー言つてんじゃねえよーー！バカ犬みて  
えに吠えてんじゃねえーー！ふざけんなーーーー！」

「あ 飛鳥 落ち着いて・・・」

「燐も何か言えよーー！」

「……次言つてみるよ 女だつと容赦しねえぞ」

飛鳥はみんなを睨みつけると私の手をひいて教室を出た。

廊下にたまごでた人達はせんと道をあける。

「あ  
飛鳥！なんなの！？ねえ！」

なんで そんなに怒ってるの?

人気のない階段の踊り場

「お前も否定しろよな！！黙つてんじゃねえよ！」

「だつだつて・・・なんて言えばいいのかわからなかつたんだもん！」

「顔赤くして泣きそうな顔しながらかわれて当然じゃねえか！！」

「そつそりや・・・・・せうだけど・・・・」

そんな風に怒られたら 何にもいえないよ・・・

「少しお間俺に近づくな」

やつらで飛鳥は階段をかけ上がりついた。

「…………何ぞ」

なんでそんなことやつらの？

近づくな なんて

離れていかないでよ

お願いだから どこかに行かないでよ

おいてかないで

「…………やつ」

泣きそうになるのを堪える。

なんで こんなに心臓が痛いの？

死んでしまひやつ

痛い・・・苦しい

運動もしないのに 息が切れる。

立つてられなくなつてしまがみこむ。

「……ツツ 飛鳥」

私の事 嫌いになったの？

もう 私と関わりたくないの？

離れていいっちゃうの・・・？

いなくなっちゃうの？ねえ・・・

「春日部さん？」

担任の先生が下から上がってきた。

「どうした？ 気分でも悪いのか？」

「・・・・・・先生 保健室・・・行つていいですか？」

「え？ うん・・・大丈夫か？ ついでにこうか？」

「・・・1人で行けます」

立ち上がり階段を下りる。

教室には 戻りたくなかつた。

## 第17話 飛鳥と燐 カノン（新一観点）

高みの見物をしていた俺は2人の状態をほぼ理解したつもりだった。

飛鳥は完璧燐の事好きになつたね。これは。

カノンが来たことで気づくキッカケになつて・・・

まあ、俺の言葉が気になつてたつてのもある氣もするけど。

燐・・・は微妙だなあの子。

恋愛経験ないしねえ・・・

まあ、飛鳥の事意識してはいるだろうね。

理科室で何があつたかは・・・まあ、大体予想がつくけど。

今度飛鳥から聞くかなあ

まあ、思い切つたことはしてないでしょ。

飛鳥何気に賢いから・・・キスとかはないね。うん。

不意に笑いがこみ上げる。

からかうみんなもバカだよ。あれはやりすぎだね。

まあ、飛鳥はキレたように見えてあれは照れ隠しだね。

ガラツ

飛鳥が教室に戻つてくる。

ただでさえ『気まずい』ムードだった教室の中がさらに『気まずい』ムードへとレベルアップする。

俺はそれを見てまた笑いそうになる。

「あーすか」

俺が手をふると飛鳥はすつゝ不機嫌な顔でこちらに来た。

「『』気分はいかが？」

「最悪だね」

「燐の事 自覚した？」

「……つぬせえよ

あらま 素直じゃなこいつた。

うーん・・・どうなるかなあ

「燐は？」

「・・・泣きそうな顔してた」

ああ、それでもまだ不機嫌なのか。

飛鳥は大体怒つたら少し機嫌をよくする。

それなのに セツナギよりもセツナギ不機嫌。

「で? どんな気分だつた?」

「・・・なんか 情けなかつた。あれ泣きそつだつたの俺のせいかなあ」

クラスの連中は興味津々に俺等の会話を聞いてる。

「どうだらうね?」

「・・・ツツ あーめんどうせえんだよ」

「うん お前つて鈍感だし素直じやないもんな」

「・・・うむせえよ」

ハアーツと飛鳥が大きくため息をついた。

授業が始まつても燐は教室に戻つてこなかつた。

「・・・先生 春日部さんはどうしたんですか?」

国語の女の先生に言ひ。

クラスのみんなも氣になつてたらしく俺のほうを見た。

そしてすぐに先生のほうを向き返事を待っていた。

「ああ、春日部さん……あの子ねえ 気分が悪いって言って保健室で休んでるわよ?」

・・・ふうん

飛鳥がシャーペンを落とす。

「大丈夫かしらねえ? 戻つてこないのかしら……」

授業開始からすでに20分。

「先生 僕……様子見に行つてもいいですか?」

立ち上がったのはカノン。

しまった アイツを忘れてた!!

飛鳥がカノンを睨む。

「そうねえ……すぐに戻つてくれるのよ?」

「ハイ ジゃあ行つてきます」

カノンはにっこりと先生に微笑む。

「オイ 待てよ!俺が行く!..」

飛鳥が立ち上がる。

「俺が見に行くよ 先に言つたの俺だし 早いもん勝ちっことで

」

「~~~~~っ

カノンの余裕の笑みに比べて飛鳥はかなりイラついてる。

んー・・・カノンねえ・・・

飛鳥が燐への気持ちに気づくいい機会だと思つたけど・・・・・・・

三角関係・・・ってことにならなきゃいいんだけどなあ

## 第1-8 保健室で

保健室のベッドに横になる。

教室で 飛鳥・・・どひゅうだろ

でも 飛鳥が悪いんだよーあんな一方的に怒るからーそれに・・・

『少し・・・』

何さ それ。

離れていかないって 言つたくせん

ねえ 飛鳥・・・。

男女の友情って 本当はないの?

今になつて思つ。

本当は・・・・・

結局は男と女なの?

ねえ 飛鳥・・・・

飛鳥と離れるのが こんなに苦しいつたり 困りやう。

ねえ・・・

ずっとずっと一緒にいたい・・・離れてほしくない・・・

それは 私のわがまま・・・なの?

寂しつて 思つたら わがままかなあ?

そんなことを考えるとこの二つの間にか眠りこついてた。

「・・・んつ」

不意に誰かの手が頭に触れたのを感じた。

「・・・・・・・誰？」

先生？

目を開けるとそこにはにっこりと微笑むカノン。

「力・・・・ノン・・・・？」

「ゴメン 目が覚めちゃった？」

「ん・・・大丈夫 少し起きてた」

「そつか 教室戻れる？みんな心配してたよ？」

・・・みんな

みんなって誰？夢乃達？

飛鳥は？

「・・・・・」

「何があつた？」

カノンが私の顔を覗き込む。

カノンに 言つていいこと?

わかんない

「・・・別に・・・なんでも・・・ない」

「なんにもなこよつには見えないけど?」

「ツー」

「や、言いたくないならいいんだがさー。」

私のモロ『図星です』と言つての顔にカノンは慌てて首をふる。

「・・・男と 女が・・・ずっと友達なんて無理なの?」

「へ?」

「ずっと 飛鳥つてそばにいるつて思つてた・・・ずっと友達で  
ずっとずっと隣にいてくれるつて思つてたの・・・」

言つ出したらとまらなかつた。

「けど そんなの無理だつてわかつてきて・・・飛鳥に『距離おい  
づ』つて・・・言われて・・・ツツ」

もう カノンの顔見れない

「そしたらすゞい苦しくて 泣きたくなつて・・・やつと気づいた  
飛鳥に彼女とかできたらどうなるの? 飛鳥は私達よりその子選ぶ

に決まつたもん・・・ツツ！」

また涙が溢れ出す。

とまらない　この口が

動いて　本音ばかり吐いて

「やしたり離れてく・・・そんなのやなのーーやつ思ひたら寂しくなつて・・・」

お願い

強がらせてよ もう少し・・・

「なんで・・・・・」

なんで今さら 気づいたんだろ？

カノンが私を抱きしめる。

カノンの背中につかまる。

「~~~~~」

カノンの制服を　涙で濡らす。

急にカノンが私から離れる。

「・・・燐」

「な・・・に・・・？」

ボロボロと流れる涙で視界がゆがんで・・・顔が見えないよ？

「好き・・・なんだ」

「へ？」

「俺　燐の事・・・好き・・・なんだ」

ホラ　また

「本当は　幼稚園の頃も好きだった・・・けど　もうないって思つてた・・・んだけど　やつぱり好きだ　今の燐も　昔の燐よりずっと！」

「や・・・ッ」

「俺は燐の事好きなんだーー。」

「やめて……。」

カノンを突き飛ばして保健室を出た。

なんで?

カノン

なんでそんなこと書いつの?..

ねえ

カノンと私も友達じゃダメ・・・なんだ

ねえ

言わないでよ そんなこと

「・・・ツツ」

コンクリートでできた灰色の床を涙が濃い色に染めた。

第1-9 教室 裏門 裏庭 飛鳥 私

しづかにトドケにもつて 落ち着いてきた教室に戻った。

「ああ、春日部さん……大丈夫か?」

4時間目 総合 担任の先生が私に気付いて言つ。

「……大丈夫です」

席に座る。

横ナナメ前が飛鳥。

ああ 気まずい

後ろから奈央がシャーペンで私の背中をつつく。

『どうかした?』

小さな声でそういづ。

「……なんで?」

『泣きそうな顔してる』

やつぱり わかるんだ?

「なんでも……ない」

不意にこすれた音がする。

見ると白い折りたたまれた紙。

「？」

手紙・・・?

先生の様子を見て机の中に手紙を握ったままの手をつっこむ。

中を見ると飛鳥から。

『力ノンだけ一人で帰ってきてたけど なんかあったのか?』

なんで 心配するわけ?

意味わかんない

どうしていつも事するの?

距離おくつて話は?

ねえ

飛鳥 勝手だよ

私が傷ついてるなんて 全然気づいてないんだよねえ？

手紙をぐしゃりと握る。

『放課後 一緒に帰る』

新しい紙に書いて渡す。

『わかった 裏門について』

返事はすぐに来た。

「・・・・・」

ねえ 私の思つてること全部話したら飛鳥・・・どんな反応する?

やっぱり 困るよな

放課後 夢乃達に声をかけられる前に裏庭に行く。

しばらくして 夢乃達が諦めて帰るのを待とう。

裏門に行くのは それからで・・・

はーっとため息をつく。

がしつ

「へー?」

後ろから肩をつかまれて振り向くと飛鳥。

「飛鳥?」

「・・・んだよお前 裏門来いよな

「え? な なんで?」  
「んの? や?」

「教室 早歩きでお前出るから追いかけたんだよ! なんで裏庭にい  
んだバカ!」

飛鳥はイラついてるらしい それを吐き出すよつと怒鳴つてゐる。

「」「メン」

「で? なんで一緒に帰らひとか言こ出した?」

「ー。」

いえる かな

飛鳥が田の前にいて ジッと私を見下ろしてゐる。

見下ろすつていつても ほんの数ひとの差だからたいしたじじや  
ないけど

なんか こわい

全部 見られてるみたいで・・・

「あの・・・ね」

「うん」

あれ 私 何が言いたかったんだっけ？

飛鳥が田の前だと 頭が・・・真つ白になりそつ

「不安つていうか・・・寂しいっていうか なんかわかんない・・・

の」

「は？何が」

「飛鳥が 距離おひつて立つた時 すつて悲しくて すつて  
辛かつたの」

「・・・・・・」

「それで・・・もしも飛鳥に彼女とかできたら、ひょっとしたら  
すゞしく寂しくて、凄く・・・嫌で・・・ツッ」

恥ずかしい

何言つてんの？私・・・

「『ゴジゴメン』私が・・・そんなこと思つていわけないのに」

だけど

「けど 飛鳥が離れてつたりせだつて すゞしく・・・思つて・・・

頭真っ白 何言おつとじてるのか忘れた 今何言つてるのかわから  
ない 口が勝手に動き出す

とおりない

「飛鳥が離れてつりやうななんて やだー。」

言つ終わつて 息がきれる。

しばらく沈黙が続いて我にかかる。

「あえと・・え・・・私何言つてんだろねは・・・ははは  
はは・・・・・?」

頭がカーッと熱くなる。

血が駆け足で上へのぼつていくみたい

顔 赤いかも

ぐいっ

「ひやー!?

飛鳥が私を抱きしめる。

ドクンッ

胸が大きく揺れた。

ビックリ したから?

それとも・・・

「俺が離れるわけねえだろ」

ぎゅっと飛鳥の腕に力が入るのがわかった。

「・・・つー

飛鳥の胸も 同じよつこでクンと鳴つてた。

「 なんてこつか・・・・・・・・驚くなよ?」

「へ?」

「これから言つこと・・・聞いて 僕の事嫌いになんなよ?」

「え?え? 何?」

飛鳥の顔が私を離す。

見ると 飛鳥の顔は真っ赤。

私の目を見た後 飛鳥は静かに目をつむつて 口を開いた。

「・・・お前の事 好き・・・うしー」

## 第20話 燐への気持ち 自覚

顔を赤くして喋る燐が凄く可愛く見えて

離れたくないなんかない

むしろ

お前が離れていくかもしけないっていつ気持ちのまゝがある

この感情の名前を 僕は知ってる

燐を抱きしめる。

理科室で感じた 燐の体温。

肌の感触 筋肉のほとんどないやわらかい体

『ドクンッ』

今 大きくなつたのは 僕の胸か?それとも・・・・?

どうでもいい

新一　　お前に感謝・・・しようかな　わからない

結果による

燐を離す。

燐は不思議そうに俺を見る。

愛しい

「俺の事嫌いに・・・」

こんな事言いたいんじゃないけど

けど 不安だ

言つて お前がもしも離れていつたら？

俺が離れていくのが不安だとこいつたけど

それは・・・

「好きだ」

言つた後 視界がゆがんだ気がした。

緊張のためか?

血が集まつていぐ。

胸がドクンドクンとやかましく暴れる。

燐は口を少し開けたまま俺を見た。

「お前の事好きなんて ありえないと思つた」

「・・・・・」

「幼馴染だし・・・ってそれだけの理由なんだけど 好きなわけないって思った」

だけど

「・・・・・ 可愛く見えてしょつかない」

お前の事が どうしても

「我ながら氣色悪い・・・ナビ バビもお前を見ると・・・抱きしめたくなる」

ああ 氣色悪い

俺は変態か? もしや

だけどそれは眞実で

「なんていうか・・・今でも少し抵抗はある・・・けど」

「お前の事好きなのは確か・・・なんだよ」

燐の顔も赤い。

ああ 抱きしめたくなる

もつと もつと近づく行きたくなる

燐の心の近く

燐の口が動く。

「「」・・・めん」

「めん？」

一瞬 視界がまたゆがんだ。

「か 考えさせて・・・ください」

「・・・も もちろん！－それは－そつだよな－驚くよな－・・・  
あはっ あはははは」

何を動搖しまくってんだ俺は

ああ ふられたかと思つた

だつて「めんとか言つんだぞ？おい

アアアア ビックリした－－

その後俺は燐を家まで送つた。

その間燐はずつと顔を赤くしたままいつひいて 僕の顔を見ようとしなかった。

「じ じゃあ・・・送ってくれて アリガト」

燐がやつぱりしたを向いて言つ。

「・・・ああ 明日学校で。」

「う うん ジ・・・じゃあ・・・」

「燐」

「な 何!？」

・・・警戒してほしくないんだけどなあ

「もしもお前が俺をふったとしても俺は離れていいかないよ。絶対。  
お前の事が好きな俺でもそばにおりてくれるんなら 僕は離れては  
行かない」

離れていける わけがない

「だから 正直な気持ち聞かせて欲しい」

カツコつけてるんじゃない

本当にそつぽつてる。

「し 正直・・・混乱してゐる」

「・・・・・・・・」

「全然気づかなかつたから そんなこと」

そりやな 僕だつてわかつやつと完璧に自覚したんだから。

「飛鳥の事・・・・・・・・・・ 正直 意識してゐる」

燐はかあつともつと顔を赤べする。

「急に ドキドキしたつするし・・・・・・・・・・・・・・

「けど これが恋愛感情なのかどうか 今の私にはわからない・・・  
から」

「・・・・うん」

「だから 時間をくださこ」

やつと燐が俺の顎を見た。

俺はにっこり笑つて燐の頭を撫でた。

「待つよ?俺は離れていかないんだから。」

「・・・・うん」

燐はよつやく笑って 家へはいつていった。

パタシッ

ドアが閉まる。

俺はため息をついて家へ向かつた。

なんとなく スッキリした。

ホラ なんか 空なんて見上げてゐる。

なんで今まで 気づかなかつたんだろう

こんなにも アイツの事が愛しいことに

## 第21話 燐の気持ち 夢乃へ

「…………ツツ…………」

言葉にならない叫び。

ドアを閉めた後すぐ座り込む。

意図的じゃない 腰が抜けてしまった。

飛鳥が好き！？誰を？私を！？

「あ・・・ありえん・・・ツツ」

顔が赤いのがハッキリわかる。

ゆっくり起き上がりつて夢乃に電話をかける。

「ハイもしもしー」

「もしもし夢乃！？」

「んー 燐？」

「やう！…ねえ！飛鳥に告白されたあ！…！」

夢乃の返事がない。

「・・・はあ、やう

せつて・・・そんだけ！？

「なんかもう頭ぐしゃぐしゃで・・・ツ」

「んー・・・燐はどうしたいの？」

「どうして・・・よくわかんないー飛鳥の事とかあーーなんか頭ぐしゃぐしゃしててイリツく！」

「パニック状態なのはいいけ声のボリューム落として。耳痛いか」

「う ドライな夢乃も好き・・・う」

「そんな状態じゃ話になんないでしょ？明日朝迎えに行くから。行きの道で話そ？」

「う うん・・・ツ」

電話が切れて はーっとため息をつく。

なんとなく落ち着いた。

夢乃の声を聞いたからかも。

それでも胸がドキドキして・・・

これで夜寝れるかな・・・

結局そのままぐずり眠った。

## 次の日の朝

寝たらさうに落ち着いた気がした。

けど 飛鳥の顔が頭から離れなくて 心臓はうるさかった。

どうしよう…

ピーンボーン

夢乃だ…！

慌てて玄関に向かいドアを開ける。

夢乃がにっこりと笑って言へ。

「おはよう

「おはよ…

「落ち着いた？」

「うん…寝たらスッキリしたかも」

「ならよかつた」

ガチャンッ

鍵を閉めて夢乃の横に行く。

「で、どうするの？ 燐は」

「どう……って……わかんない」

「わかんないって？」

「だつて飛鳥の事好きかわかんないんだもん……」

「あー……そつか……」

「飛鳥がなんで私の事好きなのかよくわかんないし……」

「それは本人に聞けばいいよ。問題は燐の気持ちよねえ……」

わかんないよ

人を好きになつたことなんて……

「そうだなあ……じゃあ考えてみな？もしも飛鳥に自分以外の彼女ができたらどうする？」

「や やだーそんなのいやー絶対やーー」

思わず大きな声で言いつと夢乃はくすくすと笑つた。

「ならじゅうぶん。」

「へ？」

「燐は飛鳥の事好きなんじゃない？」

「・・・そなの？」

「うん 飛鳥の事考えてみて？」

飛鳥・・・

小学校の頃から一緒に 仲がよくて

第一印象は『可愛い』だったかも。

昔は可愛かったもんなあ・・・

なのに いつの間にかわってた。

『男の子』になってしまった。

背にしても力にしても

昔は私のほうが上だったのに。

飛鳥の顔が浮かんで 胸がぎゅっとしまった気がした。

夢乃が口を開く。

「胸がドキドキしたりした？」

「う・・・ん・・・」

「・・・私は燐じゃないから 本当の事はわからない。」

「・・・・・・」

「だけど 燐の今の様子を見たら 飛鳥の事好きに見えるよ。」

「え？」

「顔真っ赤」

「！！」

手で顔を覆つ。

確かに少し熱い。

けど

夢乃にそういうわれてもイマイチ実感がわからなかつた。

だつて 人を好きになつたこと あつたつけ？

だから どうでもよくわからなかつた。

## 第22話 変わらない教室 だけが変わつて見える

昨日と変わつていない校舎

昨日と変わっていない 教室

なのに 入りたくない

ゲタ箱を見て 飛鳥がもう教室にいる事がわかつてた。

「・・・何してんの 早く入るひよ」

後ろから夢乃の手が伸びて ドアを開ける。

「一。」

入るしかないじやん

はあ・・・とため息をついて教室に入る。

教室を見回すと飛鳥と田があつ。

飛鳥は克哉たちと話してたらしく窓の隅にたまつてた。

田があつた瞬間 心臓が暴れ出した。

「・・・」

早歩きに席にたどり着き荷物を置く。

そしてすぐ廊下へ出た。

「……はあっ」

息が苦しい

おかしいな

ガラッ

教室のドアが後ろで開く。

見ると不機嫌そうな顔をした飛鳥。

「…………」

「…………」

慌てて逃げ出したら右足を前に出すと右腕をつかまれる。

「な……つ……？」

「逃げんなよ」

「…………」

「返事は？」

「・・・・・」

ジッヒーの見ているのがわかる。

だけど 私はそっちを見ることができない。

見られてる と黙つたナド心臓の響がジン・・・と熱くなる。

溶けてしまひ

「・・・別に ふられても平氣じやないけどしようがないと思つて  
る」

「やんないと・・・」

慌てて反論しようとした口に力を入れる。

そんなこと・・・間わないでよ

「・・・待つて言つたけど やうこいつ態度ばつかだつたら待てな  
いんだけど?」

ため息まじりの声。

「し しょうがないじゃん!」

「は？」

「わかんないんだもん！飛鳥の事 好きかもしけないけど人好きになつたことなんてないからわかんないし！」

まだ朝早くはないから人が少ない。

しかも 廊下に限つては人がいない。

だから少々大きな声で喋つたつて平氣。

「夢乃に相談したらそれは好きだと思つみたいな事言われたけど実感ないし・・・ツ」

飛鳥の事は大事なんだもん

「いい加減な返事なんてできないんだもん・・・」

言つてゐるうちに涙が溢れる。

飛鳥の不機嫌そうだけど 違う

今まで見たことない表情

それを視界に入れるたび 胸がつぶれそうになる。

「・・・ゴメン ゴめんな？」

飛鳥の手が私の頭に触れる。

「・・・ツツ」

下を向いて手を手で引かる。

「燐の気持ちよく考えず」にキツイ」と言つて、『メン』

「・・・うん・・・」

「あ～～～泣くなよ 僕が泣かしたみたいじゃん いや実際そうか  
あ～もう・・・」

「・・・ツツ

「俺はお前の事が好きだから。それはハツキリわかつてゐる だから  
よく考えていいよ?」

「・・・ん アリガト」

飛鳥が優しいのは知つてた

だけど 私は

この優しい人に辛い思いをさせてるのかかもしれない

## 第23話 カノン 宣戦布告？ 反事 対応（飛鳥視点）

ふーっとため息をついて燐と教室に戻る。

見ると新一達がニヤニヤと笑ってる。

・・・「イツ等 聞き耳たててたなこつや ・・

他の奴等は普通に騒いでるから聞き耳たてなきや聞こえやしない。

不意にカノンと田があつ。

「飛鳥 ちよつと来てよ」

・・・呼び捨てかよ

少しイヤツを覚えたがもう一度廊下へ出る。

「・・・燐に告白したみたいだね」

・・・聞いてたなこいつも。

「・・・せうだけど 文句あるか？」

「燐 なんだつて？」

「・・・お前に話つ必要ね？」

やつぱり「トトシ氣にいらねえ

「なんで聞いてくんだよ 気になんのか？」

「当たり前だよ バカだなあ」

「はあー!？」

「バカだあー!？」

カノンはくすりと笑う。

「言つとくけど お前等がたとえ面思いになつたつて俺は壊す気あるよー。」

「・・・あ?」

なんだ?マイシ

黒い 嫌味な笑みを浮かべたままカノンはこちらを睨むようじ眼  
る。

ぞわりと悪寒を感じた。

「燐の事気に入つてるのはお前だけじゃねえつひさん。」

口調が変わつてやがる・・・

マイシと喋つてゐるといつても理由がよつやくわかつた氣がある。

「だったらなんだよ 俺は・・・」

「ああ、いい事教えてやるよ」

「あん?」

「俺 昨日保健室で燐と2人きりだったよ」

「！」

あの時か

そういえば あれから帰ってきた時燐は様子がおかしかった。

あれは クラスの連中に騒がれたせいだと想つたけど・・・

「何があつたかは教えない」

「・・・アイツに何した?」

「教えないってんじやん。」

「・・・」

「その時俺は燐に告白もしたよ?」

「ー。」

「燐の事が好きだって キチンと言つた

「へ 返事は?したのか?あいつ

胸騒ぎ がする

「……されてないよ。——」

「な……」

「ああ、これ以上言つ氣はないよ。ナビ 燐の事狙つてるのはお前だけじゃないし俺はお前等がつきあつても壊す氣でいる」

「お前に燐をやる氣はねえよ」

「……俺だって お前にだけはやりたくないよ

精一杯強がつて睨みつける。

が カノンはそんな事お見通じと黒い笑みを浮かべて教室へ戻った。

燐が俺の事をふるならそれでいい それならそれで納得はする。

だけど アイツにだけはやりたくない

「そりゃ矛盾してるな」

「へ？」

教室で 要のため息まじりに言つた一言。

「それはお前ねえだろー」

新一も言ひ。

克哉がため息をついて言ひ。

「自分がふられるのは文句ないけど他人にやるのは惜しいんだ？」

「…」

「矛盾してるな」

要がまたため息。

「…」

「結局は自分のもんにしたいだけだろ？」

「それは・・・だけ俺 アイツにふられても文句は言わねえよ。」

燐はそれが一番いいって思つなん。

「どうだか? ふられたらキレちゃつたりして?」

否定はしないナゾ・・・

正直そんなことさせじつでもよかつた。

なんでもいいから返事が聞きたい

昨日から スッキリしたよつでまた新しい鉛が増えたような気がして仕方がないんだ

胸に 鉛がひつかつてる。

たぶん お前の返事が聞ければこれは取れるんだろうナゾ・・・。

## 第24話 飛鳥へとカノンへと

授業が始まつて じうしても飛鳥のことが気になつて 後ろ姿ばっかり見てた。

授業も よく聞けなくて 黒板をノートにつづすだけで

「・・・」

じうしても 田を離すことができなかつた。

視界が 脳内が 胸の中が

全部に『飛鳥』が侵食していく。

かああつと顔が赤くなるのを感じた。

好き?

飛鳥の事

やつぱりわからない

わからないまま返事してもしょうがないだろ？じ・・・

次の休み時間だった。

「燐 ちよつと来てくんない?」

「へ?」

新一に腕をつかまれる。

「どーかしたの?」

聞いても新一は答える」となく腕をひっぱり廊下へ出る。

廊下は人が少なかった。

1組と・・・もう一クラスが移動教室らしい。からっぽの教室があつた。

「どうしたの?」

「・・・あのや 飛鳥の事なんだけど」

新一が私を少し上田遣いで見る。

気を使つてるつもりだらうか?

「うん・・・どうかしたの?」

「や、その・・・返事 どうするのかなーって」

「・・・新一が心配する」とじやないよ

まあ、心配してるのは 飛鳥の事なんだるつけど。

「早く……返事出したほうがいいと思ひ」

「へ? どうしたわけ?」

「……なんなく いい予感がしない」

新一は目をそらして教室へ戻つていった。

呼び出しておいて一人で先に帰るのか 身勝手な……

身勝手なところは知つてたけど。

新一にも いつか大切な人ができるのだろう。

夢乃にも 奈央にも 明美にも 要にも……

私は どうなるんだろ?

私のとつての大事な人つて 飛鳥なのかな?

その日の昼休憩

「春日部一この荷物職員室まで運んでくれないか?」

担任の先生が私を呼び止めた。

見ると本が詰まっていた。

またか・・・私は「」いつ用件を黙つて聞くより見えるってことなのかな?

「先生ー これ私一人じゃ無理ですよ?」

軽く先生を睨む。

先生は困ったように笑つて男子を見る。

「カノン 春田部と荷物運んでくれ!」

「はーい!」

カノンがにこにこしながらこっちに駆け寄る。

ああ よりによつてカノン・・・

飛鳥のことが頭の中でいっぱいになつてカノンのこと忘れてた・・・

この違いも やつぱり・・・飛鳥の事が好きだからなの?

・・・それにも 気まずい・・・かも。

まあ、職員室だし・・・2人になることはないけど。

「失礼しました」

職員室を出る。

うん 何もなかつた。

「燃！」

カノンに腕をつかまれる。

あ・・・

「」ないだの返事 どうなつたわけ？」

「・・・・・・・」

「ダメならダメで言つてくんない？」

「えと・・・」

びひじょひ

たぶん・・・ほとんどの確率でカノンの「」とは好きじゃない。

カノン相手にドキドキした」ともなれば男で意識したこともない

カノンの後姿を見つめたり・・・って 飛鳥への「」と比べぬ「」と

もないんだけど。

けど　ない・・・と思う。カノンは。

「ゴ・・・ゴメン 私は・・・カノンの事好きじゃないと・・・思  
う」

階段を上りたいけど・・・階段は途中。田の前にカノン  
まして腕をつかまれてるから・・・なんていうか 逃げられない状  
況。

「・・・・

カノンが一瞬少し上を見てくすりと笑った。

「？」

不意にカノンの顔が近づく。

「へ・・・・やつ！？」

次に起るにとならわかつてた。

避けようとしたけど後ろは階段でへたに動けなかつた。

「・・・・つ！」

田をつむるが何も起らぬい。

田を開けると すぐ田の前にカノンの顔があるだけだった。

「・・・?」

トンチ

後ろで音がしてふりむく。

いたのは 飛鳥だった。

「飛鳥・・・?」

飛鳥は私の腕をつかむと乱暴に歩き出す。

「へ？へ？へ？」

「どうしたのじゃねえ！？」

飛鳥はそのまま鳴って廊下を歩き続ける。

渡り廊下を過ぎて 旧校舎へ。

移動教室はもう終わってるはずで 誰もいない。

後ろを見るとカノンはいなかつた。

「ねえ 飛鳥？何・・・」

飛鳥はいつも見すに立ち止まつた。

しんと静まりかえった校舎は奇妙な空間だった。

## 第25話 カノンと燐（飛鳥視点）

\* カノンと燐が荷物を運びに行つた直後\*

「・・・あれ 燐は？」

席についてボーッとしてる夢乃に聞く。

「んー？ああ、カノンと一緒に職員室へ荷物運びに行つたよ」

「カノンと2人？」

それだけで俺の心臓は異変を起こした。

「・・・そつか アリガト」

まあ、気にする事もないか

職員室なわけだから・・・うん 別に何もないはずだし。

と思つはずなのに

足は廊下へ向かう。

廊下を過ぎて階段を駆け下りる。

考へてる事と してゐる事が違う。

わかつてゐるのに 止まらない。

トントン・・・

もつすぐ1階 職員室のある階。

「・・・・・」

燐の声

トンツ

1階の見える踊り場。

カノンと田があつとカノンはくすりと黒い笑みを浮かべた。

「?」

するとカノンは燐に顔を近づける。

あれ・・・つて・・・まるで

田の前で すぐそこで起きてる」となのに なにが起きてるのか把握できなかつた。

不意に燐とカノンが離れる。

俺はわけがわからないまま燐の腕をつかむ。

「え？」

燐の戸惑う声 カノンは何も言わない 追つてもこない

キス してた？

なんでだよ？

カノンとつきあいつ氣か？

だつたら だつたら・・・

どうせ ふられて アイツにとらわれるくらいなら・・・

静まりかえった校舎

不意に足を止める。

燐は少し怯えた目

そんな燐を白い 少し汚れた壁に押し付ける。

この光景 何も知らない奴が見たら ピツンこ ピツするだらう。

燐は逃げない だけど去ってる

「言えよ 何してた！？」

「へ？ な・・・ 何？」

震える声

何をされるか わかってるのか？ だったら逃げればいい

「カノンとーつこわつきー」

「え？ 何つて・・・」

「俺が来た時！ 何してた！？ アイツとー！」

頭に血がのぼる

「アイツを怒鳴つたつてしまふがないけど

「飛鳥？ 何言つてゐの？ 私何もしてなかつたよ？」

「はあ？」

急にマヌケな声になる。

何も してなかつた？

「でもお前……アイツと近くで……」

「ああ、あれはカノンが顔近づけてきたんだよ。なんでか知らないけど。」

「…………はああ！？」

じゃあ アイツわざと……！」

あの野郎！！

アイツのすかした顔が浮かんだ。

## 第26話 変わるもの

「え？ 結局……なんなの？」

「何……って いいやもつ」

変な勘違いして勝手に誰もいない校舎に連れ出して

そんなカツコ悪いこと正直に言つてたまるか！

キーンコーンカーンコーン

休憩時間の終わりを知らせるチャイムが鳴り響く。

「あ……戻ろ……か？」

「……戻ろ……か？」

燐がため息まじりに囁く。

『戻りたくない』が本音。

教室になんて戻りたくない ずっとこいつしてたい。

燐がいて 僕がいて 周りには誰もいなくて

こいつしてたい……けど

「……次なんだっけ？」

「えーと……総合……だつたかな?」

「じゃあ……サボる?」

『サボる』の一言なんて 小学生の時要達にいくらでも言つてきた。

夢乃や奈央 女子に言つことだつてあつたはず。

なんか 違う

燐が口を少し開けたまま俺を見つめる。

「や……えと 別に……戻りたいならそれで……」

なんとなく気まずくなつたのがわかつて口調をかえると燐は俺の腕をつかんでにっこり笑つた。

「サボつちゃおつか

「……シ

この笑顔だけで 不安がすべて消えてしまつて言つたら 嘘に聞こえてしまつだらうか?

かすかに幸せを感じてしまつてる俺は バカですか?

この幼馴染のハツキリ言つて色氣もなんもない女の子供っぽい笑顔だけで

サボる・・・なんて簡単に口に出してしまったけど 実際この校舎は俺等2人だけなんていう証拠はない。

静かだけど・・・たぶん人がいる。

ハツキリ言つてしまつとここの学校は評判がいいわけじゃない。

頭がいいかと聞かれても・・・まあ、真ん中あたりだひつ。

だから当然拍子抜けな生徒が存在する。

そんなの どんなに優秀な学校にも存在すると思うが。

だからうかつに外に出れば不良な2年3年に会う可能性がある。

てなるとやっぱり危ないのは燐?いや 僕?

顔の可愛い燐はもしかしたら連れまわされるかもしれない。

俺は 男だから手荒なことができるから・・それはそれで危ないし

・・・まあ、結局ここから動かないほうがいいわけだ。

トンッ

階段を1段下りて1番上の段に座る。

トント

燐が隣に座る。

たぶん燐から来る シャンパーとリンスと・・・よく女子がしてる脇にかけてるスプレー?

のこないが全部まとつたいてこないで頭がクラコとした。

他の女子からみると不快なこおこのなの。」

「・・・あのやー燐」

「んー?」

『警戒』とか『意識』とか

そんな言葉の意味も知らないことにつよつな顔で燐が言へ。

「俺の畠田 本気にしてる?」

燐の顔が固まる。

『ああ やうだつた』みたいな顔。

「本気にな・・・してる よ?」

じやあなんでそんなめちやくひや動搖した 震えてる声してんだ?.

「のわりには 前と変わんないよね？」

変えたいから言った っていうのは100%正解じゃないけどほほ  
正解に近い。

燐は困ったような顔をする。

全部知ってるつもりだ。

昔から 見てたんだから 単純なことなら 全部 君の事なら  
けど これは予想外。

「飛鳥の事……は 好き……かもしない」

この答えは 予想外。

少し困らせてやりたくて

燐は困った顔さえも可愛いと 知つてたから 見たくて

なのに 足元をすくわれしまった気分。

顔が赤くなるのがえ感じる。

「その……えと 飛鳥にこんな話するの間違ってるかもしない  
けど……カノンにも告白されてるの」

「…………知ってる」

「ツで……ね それで……カノンの事もビックリしたけどあの時はいやだったの好きって言われた時……気持ち悪かったゾツとしてだから逃げたの」

この言葉を聞いて ひびくイリツのせビツしてだらう。

かゆくもない頭をくしゃりとかく。

「けつけど……飛鳥の場合違つて……」

燐の顔が赤く染まる。

「なんていうか……その……えと……ツツ」

赤みは頬だけじゃなく 頤のほほ全体に広がり 耳も赤くなる。

「飛鳥の時は 飛鳥のことすつ」に意識して……なんか……変な感じだったの」

燐がぎゅっと目をつむる。

「飛鳥の事 好き」

その瞬間 僕は頭がぐらつと揺れて 視界が天井へ向く。

どすつ！

「・・・つて」

後頭部に激痛が走る。

階段の横にある壁にぶつけたらしー。

「えー？ ちょっと大丈夫！？」

不安そうな顔をして燐が立ち上がる。

パサッ

頬にやわらかな燐の髪が触れる。

その髪をあくまでやせこいつかんで俺のまつに寄せる。

抱きしめると燐の鼓動に気づく。

少し震える手を見てくすくすと笑ってしまった。

「へつ な 何！？」

裏返りそつた声で燐が言つ。

「・・・いや かわいいなあと思つて」

そういうと燐は顔を真っ赤にした。

赤い頬に唇を寄せると燐は口を開けて言葉にならない何かを発した。

「な・・・ななな・・・にして・・・つ！」

そんな顔も可愛くて笑いをこらえる。

「そつか、両思いっこじとはせいか、うれしくもいいんだっけ？」

「な・・・な！？」

幼馴染で 恋愛対象外とか考えてたのがつそみたいだ。

見事にはまつてく

## 第27話 お祭り

みんなに変化を教えたのは次の日のこと

教室の片隅に いつものグループを集めて 2人で言った。

「燐・・・なんで飛鳥なわけえ？」

明美がため息まじりに言つた。

「へ なんで？」

「カノン君のが絶対いいじゃん！顔とか！」

「うむせえよ明美・・・」

飛鳥がむすつと不機嫌そうな顔で言つた。

「そりゃ顔のこと言つたら俺なんて・・・だけじゃあー

「何ぶつぶつ言つてるの？」

「ヤニヤ笑いながら言つと飛鳥は顔を赤くした。

「私はカノンより飛鳥のがかっこいいと思つけど？」

そうこうと飛鳥は顔をさらに赤くした。

みんなはため息を漏らす。

「なつなんだよお前らー！ため息なんてーー！」

「いや……つこーの間まで恋心を否定してた奴がバカッフルになつてやがると思つてわあ……」

「イチャつこのまことにけど……今燃えるとれるの早こぞー」

新一達が口々に囁く。

「うるせえな！バカッフル囁くな！冷めたりしねえよー！俺はーー！」

俺は……？

「……そりゃ 燐が冷めたら……あれだけど……」

なんか飛鳥 昨日から可愛いんだけど？

「私が飛鳥のこと嫌いになるわけないじゃん」

そういうと飛鳥は田をさらした。

「……お前、バカッフルだな本当に」

要があきれたよう囁く。

「あー一つあつたらんね 話題変えよー」

新一も「飽きた」とつまみにみんなに囁いた。

「あ、ねえねえ 今度神社でお祭りあるからこなび もうすくな。」

「あー・・・」の辺祭り多いよな。」

私達の住んでるとこで春1回夏2回秋1回お祭りがある。

その度みんなでいつてるんだけど・・・

「どうする? 今年・・・みんな一緒にで行く?」

明美が明らかに私と飛鳥を見ながら囁く。

「・・・まあ、燐と飛鳥は2人で行くだろ?」

新一が口のはしをわずかにつりあげて言つ。

チラッと隣にいる飛鳥を見ると何か考へてるみたいだった。

「・・・こや みんなと行くよ」

飛鳥が軽いとみんな皿を丸くして口をわずかに開けた。

「なあ?」

飛鳥はこちらを見て同意を求めてくる。

そんな・・・同意を求められても困るよ

本当にとのり。できれば2人で行きたいって思つてゐる。

だつてせつかく西思いになつたんだし……いい機会じやない?お祭りなんて。

なのにみんなと一緒になんて……

せつかく一緒にいるのに話したりできなこじやん どうせ飛鳥男子といるんだもん!!

「え……燐 一緒にいいの?」

「え……」

飛鳥がキッパリ言つんだもん……いやだつていえるわけなこじやん?

「う……うん みんな一緒にほつが楽しいだらう……」

やつと「新一」と要が2人同時に大きなため息をついた。

キーンローンカーンローン……

チャイムが鳴り響くとみんな席に戻る。

前方の席にいる飛鳥の背中に問いかける。

『なんでみんな一緒にいいなんて言ったの?』

ずっとそれが気になつて 授業どじゅうじやなかつたよ・・・

だけど本人にも聞けなくて 休み時間はずつと夢乃達といた。

## 第28話 祭と煙（飛鳥視点）

「おこ飛鳥あ……」

休み時間になるとすぐに新一が俺のところに来た。

「……何」

「お前来こむーーー。」

「……なんなんだよ」

ため息をつゝと新一は俺の腕を強くつかんだ。

そのまま教室を出て廊下へ。

「……お 新 痛えよ・・・離せ」

「お前やーなんでみんなと一緒に行かぬわナ?」

「……あ やっぱりの」とか

「やつぱりじやねえよーわかるでじやねえかおかしこいだって  
ー。」

なんでお前がそんな興奮してんだよ せつとか

「……じゅうがねじやん」

「何がだよー」

「どうすりやいいかわからんねえし」

「・・・はあ？」

新一はまぬけな顔と声。

「・・・両思いになつて 2人でどつか行くなんてできるわけねえだろ・・・俺何するかわからんねえよ?」

「・・・あー なるほどね もつちの意味か・・・

「ほかに何があんだよ?」

「や、燐と2人ででかけたくないってことかなーと・・・

「違うよ 燐に嫌われるようなことしたくねえし・・・それに・・・

「それ?」

「あ、いや・・・なんでもない」

祭りって毎年燐は楽しそうにほしゃいでる。

そんな燐と2人?ふざけるな

何するかわかったもんじやねえよ・・・

まして今両思い・・・って・・・

頬にキスであいつあんな顔すんだぞ？

祭りで2人になつたら頬どじろじやねえだらうし・・・

あ～～～！～～～変態か！？俺！～！

こんなんで燐といでいいのかよ！？ああ！～？

・・・それに

わからんねえし 女の扱いなんて。

夢乃達のこと『女』って見てなかつた気がする・・・

だから 祭りとかで2人で何を話せばいい？何をすればいい？

わっからんねえ・・・

俺は女好きでもなれば頭もよくない。

もつ少し頭がよけりや何すりやいいかとか思いつくんだらうひだり

・無理だ

「けどそーあれば燐傷ついたんじゃねえの？」

「へ？」

「お前の言い方 明らかに2人になりたくないって感じだつたし。」

「……なんだよそれ」

「不安になつてんじゃねえの?つきあいはじめなわけだし。」

「……んなこと言つたって……」

不安なのは俺も同じだよ。どうすればいいのかわからない  
自分を抑えられる自信がないんだ

「お前や 幸せで忘れてるかもしんねえけど ライバル多いんだぞ  
?」

新一はそう言つて教室へ入つていった。

ライバル・・・ああ そうだ

カノン・・・がいたんだった

『お前等が西思いになつても・・・』

あれが本気なら これで安心してられない。

それに 燐・・・だから ライバルいるだろ他にも・・・

けど 荷が重い・・・

どうすりやいいかわからねえよつた状況なのに・・・

あーーーーううするー

## 第29話（無題）

「…………」

やつぱり ハツキリさせたほうがいいよなあ

教室に戻り女子にかこまれたカノンの元へ行く。

「カノン 話したい」とあるから放課後裏庭来いよ

「…………あ 別にいいけど?」

なんの話されるかわかつてゐるかのような表情だった。

それに軽くイリつきを感じる。

余裕がない…………なあ

「あ 飛鳥!」

「この声は…………

「燐…………?」

「あの ね ちょっと来てー!」

「…………どうかしたか?」

燐が教室を出る。

また廊下かよ・・・

なんて 燐に呼ばれてんだから思つたらダメか・・・

「燐? どうしたんだよ」

「あ あのや・・・」

燐は上田遣いに俺を見る。

無意識ながらもしんねえけど・・・内心ドキッとするんだよなあの表情。

「お祭り・・・2人で・・・行きたいんだけど」

言つ終わると燐は泣きそうな顔をした。

「・・・や・・・その・・・2人でまちよつと・・・

そうこうと燐は泣きそうな顔をした。

「え・・・燐?」

「・・・わかった もうこ」

「おい 燐? なんでなきそうなんだよ?」

「泣きやうじやないもん……ほつとこでよ。」

燐は涙田でさう言つて教室へ入つていった。

「・・・意味わかんね

勝手に泣きやうになつて その上逆ギレH?

意味わかんねえ アイツ・・・

俺 何か悪いことしたっけ?

なんで泣きやうになるんだよ?

あんな顔 もう見たくないの・・・

## 第29話（無題）（後書き）

無題にしてすいません……  
題名つけてつけるの苦手でして……、  
たまにこういうことがあるかもしませんができるだけ考えます！  
本当にすこません！！

### 第30話 バカ飛鳥

教室に戻つてため息をつく。

飛鳥のバーカ！…！

私、勇気出していったのに…！

あんな返事が 返つてくるなんて思わなかつたんだもん…

私と2人がいやなの？

ねえ なんで不安にさせるの？

頭の中と胸の中がぐしゃぐしゃして…・・・・・

「…・・燐？どうしたの？」

「・・・・・カノン」

後ろを振り向くと微笑むカノンがいた。

そういえば 告白…・・・されたんだっけ？

どうしよ…・・・

「カ カノン！あのね 私ね…・・・

「ん?何?」

がしつ

途端後ろから右腕をつかまれる。

「燐！」

・・・飛鳥

なんなわけ？

カノンと私がしゃべるのがいけないの？

変なところで意見がハッキリしてゐ

一番 不思議なことに答えてくれないくせに・・・

「カノンとしゃべるな カノン放課後話あるつたよなっ・悪いけどそれまで・・・」

「・・・」

イラッときて 思わずつかまれた腕をふりまわして手を離せせる。

「・・・燐？」

飛鳥の驚いた声 頬は見ない

顔を見たら・・・私・・・

「カノンと喋るなつて……なんで喋る人まで飛鳥に決められなきやいけないの？もう……全部わかんない」

飛鳥の言いたいこと したいこと 気持ち

全部わかんないよ

言つてくれなきや……

『いや……ちよつと……』

そんなせりふでばぐらかすぐせに

ああもう なんかやだ

「飛鳥なんて知らない！カノン 行こー！」

そいつ言つてカノンの腕をつかんで廊下へ出た。

後ろから視線を感じたけど 振り向かなかつた。

もうやだ

なんか 面倒になつてきた

なんで悩まなきやいけないの？

なんでいい加減なの？

そんなのがいっぱい浮かんだけど

一つ一つ考えたくもなかつた。

だつて 行き着く答えがわかつてたから。

飛鳥は 私とのこと いい加減な気持ちだつたの？

おかしいな

飛鳥から告白してきましたはずなのに・・・

それなのに なんで私がこんな不安なの？

なんで 私が・・・

### 第31話 初めて・・・の相手

「・・・燐？ どうしたんだ？」

1階の廊下は授業前だから誰も通らない。

授業 またサボっちゃおつかなあ・・・

なんかもう 全部じつでもよくなつてきた・・・

「あ・・・」 じめんね 連れだしちゃって・・・えと・・・

「別に 燐ならいいけど?」

・・・あ

忘れてた・・・

そうだ カノンに告・・・

「飛鳥と何かあつたんだ?」

「一」

トンシ

後ずさりするとすぐ後ろに壁があった。

背中がぶつかって 後ろを見なくても『これ以上逃げられない』と

わかった。

すぐ前にカノン。

誰も通らない廊下

『逃げる』と脳が危険信号を送つてくる。

でも どうやって？

「飛鳥と ケンカでもした？」

「べ・・・別に・・・」

「隠すことないじやん」

「でつでも・・・えと・・・その・・・ケンカつてほびのことじや・・・」

「俺としては 2人がケンカしてくれたらラッキーなんだけ?」

カノンが私の首筋を指でなぞる。

「や・・・何!？」

カノンの手をつかんでどかせるとカノンはくすくすとわらつた。

「ラッキーって・・・なんで? ひどいー私と飛鳥がケンカしたからついの!?」

「うん 嬉しいよ？俺は。」

「なんで・・・」

「俺 言つたよね？燐のことが好きだつて。」

「う・・・うん・・・でも私・・・」

「だから 飛鳥はライバルだよ？俺にとつては邪魔な存在なんだよ」

邪魔？飛鳥が？

なんでそんな ひどいことこのもの？

「だから 俺にとつて飛鳥と燐がケンカしてくれたほうが 楽なん  
だよ」

「楽・・・って 何が？」

「ん？決まってるじやん 燐のこと奪えるでしょ？飛鳥がいなけれ  
ば」

「な・・・ッ！？」

「・・・燐はわ わうこう無知なところが可愛いけど・・・致命傷  
だね」

「へ？」

カノンの顔が近づいてきて 私の耳に口付ける。

「や・・・やだッ 離してーー！」

離してくれることなく カノンが今度は頬に口付けてくる。

「やだ・・・ッ やめてつ カノン・・・やめて！」

逃れようとして動こうとすると足がすべって座り込む。

そんな私を覆つように後ろに手をおいてカノンはまた近づいてくる。

口から くすくすと笑い声を漏らして。

気持ち悪い

やだ こわい・・・

「や・・・本当に・・・離してーーお願い・・・離してよー・

「・・・燐」

耳元で名前を呼んで カノンはにっこりと満足げに微笑んだ。

じんわりと視界がゆがむ。

涙が目にたまる。

「ねえ 燐・・・飛鳥とはもうキスしたの？」

「な・・・っー？」

かあつと顔が赤くなるのを感じる。

キス・・・つて 口と口?

そんなの・・したことがあるわけないじゃん!

「・・・腹立つなあ」

カノンはせつづぶやいて私の肩を壁に押し付けた。

「や・・・痛・・・ッ」

次の瞬間 唇にやわらかいものが押し当たられる。

「ん・・・つ・・・・・つ」

田の前には田をつむるカノンの顔。

されてることを自覚して 田の前が真っ白になる。

「・・・んつ」

離してと 嘶りたいのに喋れない

「や・・・・・・ツツ」

ぱたぱたと腕を動かすけどそれは田を仰ぐだけ。

突然 口の中に何か入ってきて・・・

「う・・・・・・ツ！」

ドカッ！…！　　ドサ・・・

何かがぶつかった音がして　その少し後に何かが落ちた音がする。

目を開けると　カノンの顔はなかつた。

恐る恐る顔をあげると　そこにはかなり怒った飛鳥。

「あす・・・・」

「テメエ燐！…何してんだよバカ！…！」

「な・・・・バカ・・・・つて・・・・」

「なんで　カノンなんかとキスしてんだよ！…つーか　俺以外の男  
と・・・・ツツ」

飛鳥はそこまで言つとため息をついて私のすぐ前にしゃがみこんだ。

「お前　何考えてんだよ・・・取り返しのつかないことになつたら・  
・・・」

「・・・・・・」

急に足と手と腕 ううん 体全身がガクガクと震えだした。

「・・・燐？」

「」わか・・・ツツ」

涙をぽろぽろと落とす。

飛鳥が私を強く抱きしめる。

唇に残る違和感

ビツして・・・

初めて・・・だったのに

さつきまであふれてた飛鳥へのもどかしさが どこかくすつ飛んで  
しまっていた。

「・・・飛鳥・・・飛鳥・・・ツ」

ぎゅっと飛鳥の服をつかむ。

「・・・燐 カノンに何されてたんだ？」

「そついえば・・・カノンは？」

答えられないよ

その質問には

だつて 何されたか・・・言つちやつたら・・・

「・・・どつか行つた」

飛鳥は私のことを抱きしめたまま 強い口調で言つ。

「・・・言えよ 何されてたんだよ?」

「・・・い いえない」

「は?」

「言えない・・・ッ」

だつて 飛鳥以外の男の子と・・・私・・・

思い出したら また涙が流れた。

### 第32話 嫌いになるわけ

本当はわかつてた。

カノンに 何されたかくらい 後ろから見たつてわかる。

座り込む燐

そのすぐ前に座り込むカノン

燐の声

わかつてるけど・・・

なんとかわからない 燐から言つてほしかった。

だけど燐は泣くぱっかりで 何度聞いても答えてくれない。

どうしてだよ?

「・・・燐?」

腕をつかんでじりじりを向かせると燐はそのまま立ち上がった。

驚く俺をほつとこて燐は逃げ出した。

「え?」

キーンゴーンカーンゴーン・・・

ああ またサボらなきや いけないみたいだ

は一つとため息をついて俺は燐の進行方向へ向かった。

燐のいる場所は 大体見当がついてたんだ。

タンタンタンタン・・・・・・

旧館の階段を1段1段ゆっくり上がる。

昨日の場所にいるんだろうし・・・

だんだん近づくと泣き声が聞こえた。

その場所につく頃には泣き声はすぐさまに聞こえた。

やつぱりここが・・・

「・・・燐？」

階段の手すりを持つて燐のほうを見ると燐はこくりと今気がついたらしく驚いた顔をする。

「なんで逃げるんだよ」

ため息まじりに囁つと燐はしたを向いてしまった。

「おこ燐……？」

燐のほうへ腕を伸ばすと燐は震えた声を吐き出す。

「や……触らないで……シ」

「はあ？」

触るな？

なんでだよ なんで触っちゃいけねえんだよ

なんだか腹が立つて燐の腕を力強く握る。

そのままその手を階段の壁に押し付けた。

これで逃げられないだろう。

燐はそれでも俺から田をそらしたまま涙を流す。

つかんだ腕のシャツは濡れていて 燐の田も真っ赤だった。

「おい 燐……頼むから話してくれよ」

「……や……だ……シ」

「なんで」

「だつて 飛鳥……絶対私のこと嫌いになる」

「はあ？」

カノンにキスされて 確かにいやだつたよ。

俺以外の男が燐に触るなんて そんなの耐えられない

だけど あれはお前からしたわけじゃないし 悪いのは100%力  
ノン。

だつたら 嫌いになんて・・・

「絶対 嫌いになるの・・・私・・・だつて・・・ツ」

そこで燐の涙の量が増した。

「・・・・・・」

燐の罪悪感の意味がわからなかつた。

「・・・・燐 こっち向いて」

「や・・・なんで？」

「いいから 怒らないから 絶対嫌いにならないから。」

「・・・・・・・・・・」

燐はゆづくつじひりを向いた。

どれだけ泣いたんだろう

やつぱり田は真つ赤で涙は耐えない。

頬にも乾いた涙の跡があつて 首筋も少し濡れてる。

腕も 手も濡れていた。

「・・・飛鳥？」

唇は震えてて かすかに赤い内出血の跡があつた。

震えた燐の唇に口付ける。

「・・・ツ

燐の腕に力が入る。

抵抗するつもりだろうけど そんなのたいした力じゃない。

燐の唇に吸い付くと燐の体が小さく跳ねる。

しばらくして唇を離すと燐は真つ赤で そのまままた下を向いてしまった。

「燐？大丈夫か？」

「・・・」めん・・・なさい

「<?」

「わた・・・し・・・ツ 飛鳥・・・う」

一 燐  
落ち着いて語りはじめた？」

「カノンに・・・私・・・キス・・・・・・・された・・・の・・

L

よいかべく焼か言つた

「初めて……なのに……飛鳥じやなくて……カノンに……う……う……ツ」

燐

だから・・・飛鳥に嫌わ・・・ると・・・おも・・・ツツ

……それくらいで俺が焼のこと嫌いになると思つたんだ?」

モハレハと燐は驚いたよハに顔を上げる

その焼の麪は手を添えて新指で涙をふき取る

くすくすと笑つてまた燐に口付ける。

唇を離すと燐は目を大きく見開く。

「初めての相手は・・・そりや 僕のがよかつたけどさ・・・」

正直 それに関しての怒りは大きい。

「……けどさ 初めてが俺じゃなくてもカノンにされたのはあくまで一回だろ？」

「…………」

「だったら 僕がこれから先何回でも 何十回でも 何百回でもしてやるよ」

「…………」

「…………だから そんなに気にするなよ」

「…………」

また燐が泣き出す。

「燐？どうした？いやだったか？」めん…」

「違……飛鳥 やれしこから……絶対 怒られると……ッ」

「……だから 僕が燐のこと嫌いになるわけない。悪いのはカノンなんだよ？それなのに燐を責めるわけないだろ？」

両手で燐の頬をつつむと燐はこくんと頷いた。

・・・さて カノン

あの野郎ぶつ潰す！――！（燐は許せても奴は許せん）

# 第33話 裏庭放課後 カノン

放課後になつて裏庭に来る。

燐には下駄箱で待つよう言つてある。

しばらく待つとようやくカノンがへらへらしながら来た。

いや、コメンコメン！ 女の子をまくのが大変でさー！」

何か女の子だ黒鹿か・・・

一飛鳥と違つてモテるから、

に「ことりと微笑みながら言う。

「別に……女にモテなくても燃がいるからいいんだよ」

一  
あ  
そ  
寂  
しへ

いやみが通じたのか通じてないのか知らないが余裕な表情は崩れて  
いない。

でもここで焦つたら絶対足元すぐわれる。

「わかつたかもしないけど俺燐とつきあつ」とになつたんだよ」

「...」

ふーんじゃなくてーー！

「だから やけに出すのやめてくんないかな？」

「・・・ちょっとかいって？」

「ふざけんなーお前が燐に何したか知つてんだよーー。」

「つたく 心が狭いなあー」

「はあー！？」

「ちょっとほかの男に触られただけでそれかよ・・・」

ため息まじりにカノンが言つ。

「キスはちょっとじゃねえだろーー！」

「初めてだから?んなのととしなかつたお前が悪い」

なんだコイツー！！

「こままで性格悪かったか！？ああーーー？」

「あのセーー言つたよね?俺。お前らがくつついても邪魔する気あるつて。」

「・・・ああ 言つたな。」

「くついた以上 遠慮なく邪魔をせてもらつてしまつだから」

カノンが満足げに微笑む。

「ブン殴つてやりたいけど……そもそもこかないか……

「やうじいじことを言つのは勝手だけどな。今日の時点で燐はお前のこと嫌いになつたはずだ。もうつかつに触れねえぞ？」

「うーん そうかあ……それは考えてなかつたなあ……」

ふざけるよつた口調にイラつく。

「考えたかどうかなんて知らねえし興味ねえけど！邪魔すんなよ！  
それに……次燐に触つてみろ 病院行かすぞ」

そう言つてカノンを睨みつける。

が カノンはくすくすと笑うだけ。

「知るかよ 僕はいくら時間がかかつたつていい。お前から燐を奪つてやるよ」

「…………」

絶対 奪わせてやんねーよ

### 第34話 名無しの手紙 ラブレター？

「・・・燐」

「あ、飛鳥ーどうしたの？」

下駄箱で待つてた燐は俺に気づくとぱああっと明るい顔をした。

それがどうも可愛くて口が持ち上がるてしまう。

「や、別に? ゴメン 暇だつたろ? 寒かったか?」

「ううん 大丈夫! あー最近寒いよね」

そつと燐の頬に触るとひんやりと冷たかった。

「冷たッ ゴメンな・・・早く終わらせるつもりだったんだけど・・・

・

「ううん 大丈夫だよ? ね、帰ろ?」

「ん・・・そーだな ちょっと待つて」

靴を履いて上履きを脱ぐ。

パサツ

「・・・あ?」

靴から小さな紙が落ちた。

よく女子がおりがみみたいにしておつてゐる手紙の形。

「なんだこりゃ？誰かと間違えたのか？」

が裏返してみると確かに『島村君へ』と書いてある。

「うちこのクラスに俺と同じ『島村』はない。

つてなると……なんだ？」

「不幸の手紙かあ？」

ため息まじりに嘆つて燐が手紙を奪つて。

「？燐　どうかしたか？」

燐は返事をせず手紙を開く。

小さな紙に小さな女の子の文字が書かれていた。

『突然のお手紙すいません

私は貴方と同じクラスの者です。

入学式の時から貴方と見ていました。

貴方のことが好きです。

きつとふりれるけどふられるのが怖いので名前はかけません。

私のことを見つけて返事をしてくれたらうれしいです』

「・・・はあ？」

俺のことが好きイ？

同じクラスの女子で？

誰だこりや

「誰だかわかるか？」

「わつわかるわけないじゃん・・・」

燐はかなり動搖してゐみたいで声が震えてた。

「燐？ビリした？」

「・・・・・・・・・・・・」

「燐？」

「だ・・・・・つて 誰だろ・・・私・・・だつて・・・・・」

「落ち着けよ 僕が燐以外の奴好きになるわけないじゃん。まして  
そんな名前も名乗れねえような奴・・・・」

「・・・・本當にっ！」

不安そつて 僕を覗きこむ。

「本當だよ？」

そんな燐に顔を近づけると燐は俺の肩をつかんで拒んだ。

「へ？ 燐？」

「げつ下駄箱なんて誰が来るかわからんないでしょー。」

「あ・・・ああ 悪い」

まあ なあ・・・

そりゃ 誰からか氣になるのが本音だけビ・・・

今どきのクラスで『可愛い』とか思つのは燐ぐらこだし・・・

誰でもいい氣はする。

だけど 返事もせずに放置もなあ・・・

まあ、これがからかうるとかなり別だけど

本気なり・・・悪じよなあ・・・

なんて言つたら 燐が不安になるからやめた

まだ不安そうな顔をしてる燐の手を握る。

「ホラ燐 帰る？」

「え・・・」

「燐 好きだよ」

顔は見ずに 燐の前を歩いて言つ。

顔なんて見ながら言つたら 赤面でカッコ悪いから。

言つた後でやつぱり血が顔に集まつてく感じがする。

つかんだ燐の手に力が入るのを感じた。

## 第35話 克哉 報酬 2500円

「……無記名手紙……ねえ」

朝 燐がいなことを確認済の教室で俺はすぐに克哉に相談した。

女好きのコイツなら……と思つたから。

本当は本人の気持ちを考えたら他人に見せたりするべきじゃないんだろうけど……

手紙を見た克哉はため息をついて俺を見た。

「何 お前にんなので悩んでんの?」

「だ……つだつて 誰かわからんねえじゃんそれじゃ……」

「お前なー燐がいるんだからこんなもんどうでもいいんじゃねえの?」

そつと克哉は手紙をゴミ箱へ捨ててしまった。

「あーー何すんだよーー!」

俺があわてて手紙をゴミ箱から拾つ。

「……なんで、ゴミ箱の中からわざわざ捨つんだよ?」

「はあ? だつて……」

「まんざり亞だもねえんだる。その様子じや

「な・・・」

「つたべ・・・燐も苦労するな

「し しょうがねえだろーそりゃ・・・誰かに好きって言われてい  
やな氣する奴・・・多くねえじやん」

「おいおー 彼女持の言つことかよそれが

「う・・・」

確かに

俺はこの手紙の子が誰でもいいつづきあつ氣なんてない。

だって どう考へても燐がいいし・・・

だけど・・・これが罰ゲームとかじゃない 本氣なら・・・

「お前な お人好しは悪いことじやねえと思う。だけどな そのせ  
いで傷つく人間がいること忘れんじやねーぞ」

克哉はそう言つて俺から手紙を奪つてしまつた。

「克哉 それ・・・誰かわからんねえかな?」

「・・・忘れんなつづいたよな俺

「忘れてねえよ でも……燐のこと考えても スッキリせたまうがいいと思つ」

昨日の燐の動搖とか考えたり……

『ちやんと断つたよ』

とか

『もつ大丈夫』

とか

何か 言つひやうなあやこけない気がしてならないんだ

「……俺 お前が後悔しても慰める気ねえから

「へッ 僕だつて慰めてもらひにねえよ……」

「あつそ んじや軽く調べておこへやるよ

「ああ 頼むよ」

「んー、お礼はどうしようかなー」

「……金どんのかよ 友達だろーが……」

「友達だつてな たまにはメリットがねえとな」

「・・・つたく 何がいんだよ」

「そーだなー ま、今回は一週間パン注おいでー や」

「テメヒ・・・『でいーや』じゃねえだろ! テメヒ一日ごへつ食つてんだー! 一日いくらかかってんだ!」

「一日・・・んー 500円くらいこか?」

「・・・・十日は休みだから・・・ 2500円か・・・ 売ヒ」

「アハハッ 每日500円じゅねえよー」

・・・べれつ

けど しょうがねえか・・・

俺じゅ女に話しかけたりしていいもんなあ・・・

へたに話しかけて燐が勘違こするとか・・・

・・・しょうがねえ 2500円出すか

### 第36話 手紙の主

んで あれから2日がたつた。

その間俺と燐は何にもなかつたし 手紙に関しての話題も出なかつた。

カノンも別にちよつかい出してこなかつたし・・・づん。

が 今日になつて克哉が「一ヤ一ヤ笑いながら」ひびきに来了。

「おい飛鳥あ！…わかつたぞ！…」

「あん？何がだよ」

燐と皿食を食べていたところ克哉は「機嫌な様子で割り込んできた。

そして俺にそつと耳打ちしてくれる。

『お前へのラブレターの主がわかつてぞ』

「……」

思わず俺は立ち上がる。

そんな俺を燐は不思議そうに見上げてきた。

「わ・・・悪い燐！夢乃達と食べてくんねえか！？さゆつ急用が

できて……」「

「え・・・う・・・ん・・・わかつた」

メン!」「めんな焼! たけじお前のためでもあるんだあああああ!

廊下に出て俺は堺哉の肩をつかむ

「で、誰だよー。」

「うちのクラスの竹中美織って知ってるか?」

•  
•  
•  
竹中？

•  
•  
•  
**美緒**  
?

誰だそれ？

「目立たないからそうでもないが顔はかなり可愛い感じだ。身長が  
150ないしらしくかなりの口りだね 運動音痴で・・・ああ、成績  
は中の上だ」

「・・・あれ」

「ちなみにお前が小学校の時70点だったテスト アイツは100

点はなまるだ

「……なんでそこまでわからん！」

「俺の情報網を甘く見るな。ただの女好きだと思つてただろ」

克哉は満足気に微笑む。

つたく 何が たまたまだろ？」

「……で 本人……どれ」

「お前女に興味ねえもんなあ……名前じゃ わかんねえか」

「そりゃわかんねえって……まだ男子の名前だつて全員は……」

「あ、いたいた！ あれだよ！ …」

克哉がそうじつた瞬間 ドキッとした自分がにくい。

克哉の指差すほうを見ると小柄すぎる女の子が立つてた。

女友達と仲良く喋る彼女は可愛く見えた。

あ、いやいや 燐ぼどじゅねえぞ！？

「な？ 可愛いだろ？」

「まあ……燐ぼどじゅねえけど」

「……へいへい」

確かに可愛い。

なるほど あの手紙の丸つじこ字にパラタリな子ではあるな。

とはいへ 嘆つたことではないし入学してからこれまでまつたく眼中になかつた。

その子はいつも他の視線に気づいたりして俺のほうを見て顔を赤く染めた。

なんだよ いつまで恥ずかしくなるじゃねえか！

「お おこ・・・・克哉・・・・」

「何 返事でもするの？」

「そつそつじゃなくて・・・えーとえーと・・・」

「あ あのー島村君ー」

「ー」

後ろからくる風で かわいらしい声。

振つ向くとやせつわいの女の子。

「え・・・えつと・・・竹中・・・だつけ？」

「せつせつ……」

「な・・・なにかな?」

「『氣づいてますよなーあの手紙私だつてーー』

「せーせーせーせーせーせー

『氣づいてたけどーー確かにーー』

けつねじれー

そんなどかい声じや・・・燐に聞ひ入るじやねえかあーー

「あ・・・あ・・・氣づいた・・・けづ・・・」

「へり返事はーー?」

そつそんな真剣に詰め寄られたら・・・

「「「」」めぐね・・・急に元シ

本当だよ・・・

俺は心の中で静かにため息をつく。

「わ・・・悪いけど 俺・・・彼女いるんだ

「か・・・のじょ?」

「そ……うちのクラスの……春田部……って 知つてゐ?」

「あ……燐ちゃん……」

知り合いか?

「だから……」

「飛鳥ー?何してゐの!?.燐が待つてゐるんだからねーほかの子とい  
チヤついてんじゃないわよー!..」

明美が教室から出てきて俺の肩をつかむ。

ひょいと教室から燐も顔を出す。

「あつ明美……別に……」

「もう!燐が遠慮がちだからって調子にのつてんじゃないわよ?」

「別に調子になんか……あ、えーと 竹中……」

ぐいっ

なんだかひっぱられる感じがある。

「え?」

そちらを見ると上田達いにこいつを見ながら俺の服をつかんでる燐。

うわ 可愛……!

「わ 悪いけど竹中…セツコハ」とだし・・・「めんな…！」

「え・・・う うん・・・」

あ～～泣きそつた顔してる・・・けど・・・あーー！

「ゴメン竹中！お前のことが嫌いなんじゃない！」

つーかほぼ初対面で嫌いもなにもねえけど…

とにかくめんな…！

「んじや飛鳥 パン注ようしぐう」

「・・・おお わかつたよ・・・2500円・・・」

まあ・・・めでたしめでたし・・・か？

### 第37話 燐とのケンカ チョコバナナとつるじん飴

「あ・・・あのさ 燐・・・わつきの・・・子のこなんだけど」

「・・・何?」

教室の隅の机4つ

後ろ2人が夢乃 燐で前2人が俺と克哉。

夢乃が厳しい目つきでじっと見てくる。

「こないだの手紙の子・・・らしいんだ」

ぼちやつ

「へ?」

間抜けな声

見ると燐が手から飲んでいたパック牛乳を床に落としてしまっていった。

それを拾つて渡す。

「あ、けどその もちろん断るよ!…な!…?」

「・・・ん」

燐は微笑を浮かべた。

それで心底ホッとする。

やつぱり不安は残ってる表情だけだ。まあ、ひと段落……だらうな。

「そういうやつー祭り どうすんの?」

その言葉に俺も燐も固まる。

「・・・・・」

「・・・え?みんな一緒に行くんでしょ?」

夢乃が明らかにこちらを睨みながら囁く。

なんか最近……夢乃 僕に対しての態度がキツイと思つただけど・

「・・・・・」

燐が牛乳パックのストローを加える。

「夢乃 2人で行くかー?」

「ふざけんな アンタにはこいつでも女がいるでしょーが

「えへひつどー俺夢乃が一緒に行くなら誰とも行かないー」

「行かない ビツビツ女子の子達と。」

「この2人は進歩なさげだな・・・」

「・・・飛鳥 みんな一緒にいくの?」

「へ?」

燐が何か言いたげにこちらを見る。

いや 正直・・・何が言いたいのかは大体わかるんだけどさ。

「え・・・いやだ?」

「・・・」

燐がうつむく。

「・・・2人で行きたい?」

聞くが返事はない。

「燐?」

「・・・飛鳥が 一緒にきたくないならいい」

「いや、一緒に行きたくないわけじゃない!――全然――」

「じゃあなんで一緒に行かないなんていうのセー。」

あ　じの顔は・・・

キレかけの顔。

顔を真っ赤にして 潤田で 急に声を荒べる。

「怒るなよ だつて・・・」

「怒つてないよーーー」

「おい 待てよ・・・だから」

「やつやつて言い訳しようとするんなら聞きたくないー行きたくないならそういうえらいー！」

「つだからー聞けよーーー」

「・・・ツツ 何さ

走ったわけでもないのにお互イハアハアと息が荒い。

「・・・しうがねえだろ 2人でなんて・・・行きたくても行けねえよ

「・・・なん・・・ケホッ でさ」

「だから・・・その・・・正直 今まで通りじゃないわけだから・・・よくわからんねえんだよ

「何がわからんないのさ?」

「だから・・・2人でツ行つたと・・・して ビツすればいいのか・  
・」

「・・・・・・・」

「今までただの友達だつたじやん・・・だからなんともなかつた  
けど・・・やつぱ 違うよ・・・」

「・・・やっぱ言つて訳なんじやん」

「は?」

「だつたら何年先なら2人で行けるわけ?しなきゃわかんないじや  
ん!してもないくせにわかんないなんていわないでよ!!--」

また・・・

「つだけど!お互ひ氣に使ってんじやしうがねえだり!!--」

「何それ!だつたら今まで通りでいいじやん!今まで通りでも2人  
じやいけない理由なんてないはずでしょ!!--」

「だからー!」

「両思いになつて 気持ちが通じて!--変わつたのはそれだけじや  
ん!私は変わつてないし!飛鳥だつて変わってないでしょ!今まで  
と同じ人でしょ!!--」

燐の目から涙がこぼれた。

俺も反論しない。

「なのになんで無理矢理変えよいつとすんなのやーー...変える必要なんてないじゃんか！」

そうこうと燐ははーつと息をついて下を向いてしまった。

いつの間にか俺も燐も立ち上がりつていて 燐はすとんと座り 俺は乱暴にどすんと座った。

「・・・燐の圧勝だな」

隣で克哉がつぶやく。

夢乃も同意と田で囁く。

田で会話するじゃねえよ・・・

自分のせいだけど 僕のせいだけどー

泣いてる燐

しーんとした教室

夢乃と克哉

俺は胸のそこがイライラする。

同時に 不安が広がった。

後ろを見るとカノンがニヤついていた。

俺はそんなカノンを睨みつけて視線を戻す。

テメエにチャンスが来たわけじゃねえ 勘違いすぎんなー！

「・・・燐 悪かったよ」

「・・・」

「・・・祭り 2人で行こう。」

「・・・」

「・・・許してくれねえの？」

「・・・」

返事がない『許さない』とこひといひこと。

「・・・祭りの時 いや、いつでもいいから・・・お前の言ひたいこと一回聞くよ。だから機嫌直してくれよ」

燐が顔をあげる。

やつぱり涙田だつたけど・・・。

「・・・それから・・・・・・・・・チヨコバナナ・・・・と りん  
『飴・・・おじる』

「・・・飛鳥大好き」

燐が涙目ままに「うう」と笑う。

俺はため息をついた。

チヨコバナナとりんご飴

毎年祭りで燐が食べる2つだ。

「・・・つたく チヨコバナナとりんご飴で仲直りかよ・・・ぐだ  
らねえな」

「いいじゃん 飛鳥好きー」

〔冗談で言つてゐんだらうに 少しだけ胸が熱くなる自分が情けない。〕

恋といつものは 素敵なのだか 面倒なのだか

イマイチ俺には理解できそうにない。

### 第38話 胸の違和感 恋と雲 恋の雲

「・・・ねえ 飛鳥ア」

休み時間 不安になつた私はすぐに飛鳥の元へ行く。

「ん、何?」

「明日のお祭りなんだけど・・・」

「あー どうかした?」

「本当に 2人で行くの?」

「・・・は?」

わかつてるよ 私から言つたんだから・・・こんなのが聞くのか  
かしいよねえ

でも・・・

「だつて飛鳥・・・あれからずっと機嫌悪いっぽいんだもん・・・

わかっちゃうんだよ

隠してゐつもりかもしれないけど ビニカ機嫌悪げ・・・。

「・・・急に何言い出すかと思つたら・・・疲れてるだけ。燐のせ

いじやないよ」

そつ言つて飛鳥は微笑んだ。

「……本当に？」

じつと飛鳥の目を見る。

「本当に？」「ゴメン……顔に出てたか」

「……なら よかつたけど……」

変わつてないとかいつたのは私。

だけど やつぱり何か変わつてしまつた。

飛鳥は今までよりやわしい。

いいことだし……嬉しいけど

なんか……変。

胸の奥に違和感が生まれてゐる。

いつそのこと……

指を入れて えぐりとつてしまいたい

恋つてなんだか 難しい。

もやもやして 雲みたい

見た感じはふわふわして やわらかそうで 触れてみたくて 楽し  
そうじ。

だけど実際は

ハツキリした形のない

ふわふわといつよつ ぼやけた感じ・・・

どうすればいいのか わからない

『いつしたい』と願うのに

そうする方法を私は知らないの。

結局 曖昧なまま 私はお祭りの日を迎えた。

やつぱりなんだか胸の奥に違和感があつて

なんだか もどかしかつた。

「飛鳥ー。」

待ち合わせのお店の前で飛鳥を見つけて声をかける。

振り返った飛鳥は なんだかご機嫌で 楽しそうで

私に氣づくといひりりと笑った。

それがなんだか嬉しくて

違和感の雲は 風で流された。

### 第39話 お祭り りんご飴編

人ごみ 独特の香り 横笛の音 はっぴを着た人達 たくさん並んだ屋台 交通整理をしてるおまわりさん

たくさんのかおり 人がまざつてる。

そんな中 飛鳥のすぐ横にいる それがなんとなく嬉しかった。

「ね 飛鳥ーりんご飴とバナナチョコのおいしつてくれるって言つたよ  
ねえ」

「あー・・・んなこと言つたな・・・いけど?」

「やつたあ まづはりんご飴ー!」

すぐそこのはりんご飴の屋台へ飛鳥と行く。

「りんご飴ーつくれー!」

「はいよ

飛鳥が100円玉何枚か渡す。

キレイで真っ赤に光るりんご飴が小さい頃から大好きだった。

舐めたら甘くて・・・

まあ、口とか歯が赤くなるのが難点なんだけれども・・・。

「やつたあ 飛鳥ありがとー 」

「うん」

ドンッ

浮かれてて 目の前の人につつかる。

「「うつごめんなさいー!」

「あ・・・いーえー」

そちらはカップルで私は女人につつかつてしまつた。

そのカップルは腕を組んでなんだか他の人達と違つて見えてしまつた。

「おい 気をつけるよ

「う、うん・・・」

そう言つて飛鳥が私の腕をつかんで自分のほうへ引き寄せた。

「ホラ 食べ終わつたらチヨコバナナだら?」

そういう瞬間 手があたたかいものにつつまる。

自分の右手を見ると飛鳥の左手が握られていた。

「・・・ツ」

飛鳥の耳がかすかに赤い。

それを見てくすくすと笑う。

右手に好きな人のあたたかい手

左手に大好きなりんご飴

周りは知らない『え？いつも近所に人がこんなにいたの？』 つてくらいな人数の人達。

だから手をつないでても恥ずかしくなんてない。

ずっと こままでいればいいのに

ずっと 変わらなければいいのに

ずっと こままで ずっと・・・

## 第40話 お祭り お化け屋敷編

かなり歩いて 神社に着く。

神社の石段にハンカチを敷いてそこに座る。

他にも何人か石段に座つていて 上る人が迷惑そうに見ていた。

だから2人は一番はじっこに座つてる。

「ここなら邪魔じやないだろうじ···

「ホラ 早く食べろよ」

「え? うん···なんで?」

「やっぱ祭りといつたらあれに行かなきゃダメ···だろ?」

にやりと笑つ飛鳥。

この時点ではやな予感はしてた。

りんご飴は畠袋の中

りんご飴の棒はその辺においてあつた大きな「川」箱の中

隣には嬉しそうな顔の飛鳥

そして私は・・・ため息。

「やっぱー祭りつつたらこれ・・・だろ?」

目の前には・・・

私の大大大大大大・・・・・・大嫌い!!な お化け屋敷。

暗いのとかこわいのとか・・・急に脅かされたりとか

そういうのが苦手な私にとってお化け屋敷っていうのはまさに天敵  
だった。

毎年いつものグループで来る。

まあ、毎年私と夢乃は外で待ってるんだけど。

今年・・・そつか 忘れてた

「ね・・・ねえ 飛鳥ア・・・やめない?」

「えー?なんでだよ!学生2人ね!」

飛鳥は私の分まですでにお化け屋敷入り口の人へ渡していた。

「だつだつて・・・私 こいつの本当だめなの・・・飛鳥だつて  
知つてるでしょ？」

「そりや・・・いいじゃん 僕がいるし！な？これがなきや祭りに  
来た感じしねえよ！」

そつそんな・・・

そりや 1人で行つてらっしゃいなんていえないけど・・・うう・  
・

中に入ると後ろで鈍い音をたててドアが閉まる。

周りは・・・きっと木かダンボール。

だけど中は真っ暗で少し寒い。

夏なのに・・・

「や・・・ねえ 飛鳥・・・私 もうこわいんだけど・・・

涙目 震える手足

脳が『やめときな 早く出ちやえ』と信号を送つてくれる。

「ホラ 大丈夫だよ！」

## 飛鳥の明るい声

その声とともにまた手が握られる。

そりや・・・飛鳥がいるならつて・・・思えないこともないけど・・・でも・・・でも・・・

お化け役の人気が急に出てきて  
私はのどがつぶれそうな声をあげる。

—おしゃれ・・・

涙がぼろぼろと流れ出す。

その時は私も無我夢中で覚えてないけど飛鳥の話によるとお化け役の人も困つてたらしい。

「おい  
燐！  
」

飛鳥が私の手をひっぱり走る。

少しすると誰もいないところになる。

「大丈夫か？ゴメン　ここまでだと思わなくて・・・」

立つてられなくなつた私を飛鳥が抱きしめる。

じんわりと体中にぬくもりが広がる。

毎日　こんな風なお祭りだつたらいいのにとかしじうがないことを  
考えてしまつた。

## 第41話 お祭り 飲み物編

なんとかお化け屋敷を出る。

ぐすぐすと泣く私を見て飛鳥は困った顔をする。

「のひ飲み物でも置つてくるから待つてねよー知らない男に話しかけられたらすぐに俺呼べー！」

飛鳥はやつれて人ごみの中へ消えてしまった。

こま犬のよつかかって泣いていると誰かが肩をたたいてくる。

「え？」

振り返るとおじさん。

「お嬢ちゃんどうしたの？迷子かい？そここの迷子案内センターの者なんだけど・・・」

おじさんの指差すほうを見ると確かに迷子センターがある。

「あ・・・いえ 迷子じゃないです！」

「やうかい？ならいいんだけど・・・ホラ飲み物。」

「あ・・・りがとうござります」

もう少しひても・・・平気だよねえ。

迷子案内センターには人がいない。きっとこのおじさんがここにいるから。

いい人そうだし・・・私に飲み物を渡すと手をふって迷子センターに戻つていった。

うん 確かに迷子センターの人。

渡された紙コップに入った飲み物はコーラっぽい。

黒くて・・・小さな泡。

私はそれを「ぐぐぐ」と飲み干した。

のどが渴いていて、体は水分を歓迎した。

が

「ぐく・・・ん・・・・

飲み物がのどを通り、少しすると・・・

カアアアアツツ

「・・・え？」

体中があつくなる。

だんだん視界がゆがみ、頭がぐらりと揺れた。

向こうにひらへ歩いてくる飛鳥が見える。

「・・・はれええ？」

みんなが 回つてる・・・

地面が 人が 屋台が こま犬が・・・

瞬間 目の前は真っ青な空になった。

が すぐに暗闇へと変わる。

「・・・ん」

頬に何かが触れるのを感じて目を開ける。

目の前にはあきれた顔の飛鳥。

「あす・・・かあ？」

「お前何してんだよーーー！」

「へえ？」

まだ頭はぐるぐるしてたけど起き上がる。

周りを見るとそこは誰もいない近所の公園。

ベンチに座つて……どうやら飛鳥のひだ（もも？）を借りていたらしく。

「うひめん…」

「いいよ……それより お前酒……飲んだ?」

「……へ?」

「酒くせえ……」

「……あれえ?」

「やひいや お前紙コップ持つてたよな……」

「迷子センターのおじさんにもらつたんだナビ……」

「……酒 飲まされた? もしかしてそれで氣イ失つたお前をどうつかつれてくつもりだつたとか……」

「かつ考えすぎー・自分が飲んでたの間違えて渡しちゃつたんじゃない!?」

大きな声を出すと頭がガンガン痛む。

「・・・起きたよ

飛鳥がそつこいつと頬にあたたかいものが触れる。

次の瞬間視界が横に傾いた。

頬から

こめかみから

飛鳥の肩のぬくもりを感じる。

うわーうわああー！

頭がくらくらしてるのは 恥ずかしさか お酒のせいか・・・

「あーバナナチヨ！」

「・・・後でもう一回行こうか 祭り。」

「うふーあ・・・やうこえぱば飛鳥」ここまで運んでくれたの？

「あー まあ 一応・・・」

「ありがとねー！」

「・・・うふ

飛鳥の顔が目の前に来る。

「ちよつこ」外・・・

「誰もいなから・・・」

「や・・・飛鳥　待・・・」

「待つてたら日が暮れる」

「・・・・シツツ」

あもつと皿をつむると 口があたたかくなる。

クラ・・・ツ

お酒のせいか 恥ずかしさのせいか わかんない

## 第42話 お祭り チョコバナナ編

その後しばらく2人で公園について喋つてた。

「・・・燐 そろそろ祭り戻るか?」

「・・・んー」

なんだか眠くなつてきて目を一ぱり飛鳥から離れる。

「チョコバナナ食つだろ?」

「うん 飛鳥も食べよ?」

「俺甘いの無理・・・からあげ食つ」

お祭りに戻りチョコバナナを買つてもらひ。

「美味しい~」

「もうやつてりゃ可愛いんだけどなあ・・・

「ん? 何があ?」

「いや? 知らない男信じるのは問題だなーと思つて

一ヤリと飛鳥がいじわるく笑う。

「だつだつて　いい人だつて思つたんだもん！」

「・・・まあ、ついてかなかつただけいーけどわ」

「？　あ、からあげあつたよ！」

「あーうん・・・」

キョロリと辺りを見ると迷子センターがあつた。

「ホラ　あそこへ座つてゐるおじさん！」

わつかのねじさんを指差して飛鳥に囁く。

「んー？」

飛鳥は目を細めておじさんを見た。

「ね？　いい感じの人でしょ！？」

「まあ・・・いい人氣ではあるな・・・まー外見じゃわかんねえからな」

そつといながら飛鳥は私をおいて迷子センターに行く。

慌ててついていくと飛鳥はおじさんに向かってわざわざぐにたいらげてしまつたからあげの紙コップを投げつけた。

「なつなんだ君は！？」

「燐に酒飲ませてんじゃねーよジジイ」

「ちょつ 飛鳥！？」

「君は・・・」

おじさんが私を見る。

「あ・・・すっすいません！飛鳥 ホラ行こ？」

「悪いのはコイツだろ！？未成年の・・・しかも人の女に一日離したスキに酒なんて飲ませんな！」

「飛鳥・・・」

警察官だつてうひついてる。

もしもこんな光景見られたらどうなるかわからない。

周りの人はじろじろ見てくるし・・・

すでに警察官のところへ行つた人がいるかもしねない。

それなのに

普通 あせるべきで 不安になるべきで

それなのに 嬉しいと思つてしまい 口がゆるむ私がここにいた。

「あのジジイムカつく！…」

あの後私がなんとか飛鳥を宥め、あそこからかなり離れた場所で人気もあんまりない通りに連れてきたところで飛鳥が言った。

みんなお祭りに行つてるせいが、少し神社の道筋を離れれば人はほとんどいなかつた。

「つたくさー」つちは本氣で怒つてんのに何も知らねーみたいな顔して・・・ムツカつく！」

「まあまあ飛鳥・・・」

「お前も怒れよー。」

「だつて・・・別に私は・・・」

飛鳥が怒つてくれただけでじゅうぶんだつたし・・・

「つたく・・・」

ぶつぶつ言いながら飛鳥がうつむく。

「？」

「……悪い」

「なんで飛鳥が謝るの？」

顔を覗き込むと飛鳥は顔を真っ赤にした。

「や……その……なんていつか……田離して……」「メン

「そんな子供じゃないのに 何言つてんの？」

「やうじやなくて……なんでもない」

飛鳥は『はーっ』と大きくため息をついた。

「飛鳥 疲れた？」

「ん、そうこうわけじゃないよ」

「あ、これ捨ててくれるね」

バナナチヨコをさしてた棒を見ながら言へ。

1歩飛鳥から離れると飛鳥の手が田の前に来る。

「ふえ？」

ぐこつとぢつぱいられる。

飛鳥の腕が首輪のような感じで、私がいくら暴れても離れる」とはできなかつた。

「ちよつ飛鳥！恥ずかしいから！」

「・・・離れんな 人多いんだから」

飛鳥はせつてため息をつく。

「心配性ー！」

「・・・バカ」

「へ？」

「いいから・・・そばにこらよ 田の畠へとにかくこいくんねえと・・・なんか不安」

「そんなの・・・」

「さつきみたいに酒飲まされると困るしな」

「・・・つーー！」

「こうわれると もづ反論できなかつた。

「ねえ だつたら・・・一緒にいきみ捨てに行こうよ」

そう言つて離れようとすると飛鳥はくすりと笑つた。

「人前で恥ずかしい?」

「あつ当たり前でしょー。」

「ふーん 帰り・・・俺の家来てよ」

「へ? なんで?」

「なんとなく 来なよ」

「わ・・・わかつたよ・・・」

「こつちばん最近・・・来たのいつだっけ?」

私が飛鳥に背を向けて歩き出すと飛鳥も着いてきた。

「中・・・1の時かなあ?」

さすがに中学生になると世間で『お年頃』といつやつなわけ

男の子の家に女の子が行く・・・なんて やっぱり・・・おかしい  
といつか 今までとは違う感じになってしまったのだ。

冷やかされたりはしたくなかったし 何より飛鳥がもう私達女を部屋に入れたがらなくなってしまったのだった。

「じつこつ風の吹き回し? 自分から部屋に入れようなんてさ

「・・・別に 彼女なんだから彼氏の部屋に入るくらい普通かなー

つて。」

・・・そうだった

なんだか 忘れてたものを思い出すよいつな感覚。

忘れちやだめだよね・・・

心の中で苦笑した。

「ま、親いなから何してもいいんだけど？」

「な・・・・シッ 当たり前でしょー。」

「バツカじやないの？」

「あははははは」

「あははははは」

いつもって 笑つんればそのままだと変わらない。

だけど 変わったものはある。

いつもって2人でお祭りに出かけて

手なんてつないで

キスして・・・

変わったものは確かに存在した。

それでも『今まで通り』を望んでしまひ。

私は 飛鳥どじつなりたいんだろう？

考えなければなんでもないこと どじつしても考えてしまつた。

## 第43話 お祭り 飛鳥の部屋編

正直 緊張してしまってた。

「何じつとしてんの？」

冷たくないわれて はつと我にかえる。

チヨコバナナのじみを捨てた後 そのまま飛鳥の家へ。  
家中に入ると飛鳥のこおいでいっぱいで なんだかすぐに緊張してしまった。

だからなんとなく玄関でじつとしてた。

「あ・・・ベ 別に・・・」

「緊張でもしてんの？」

「なっ！－！」

「別に何もしないよ たぶんね」

たぶん・・・って 何がさ

心の中でぶつぶつ言いながらも靴を脱いで中に入った。

部屋に入つてまた動きを止めた。

「……やつたなー……？」

昔はもう少しあ片付けていたのに飛鳥の部屋がいつしかで汚かつた。

漫画が床に散らばり勉強机の上には消しゴムのカスの山もあり……CDやDVDもケースに入れずそのまま。

くしゃくしゃに丸めたティッシュや紙くずなんかも落ちてる。

「あー掃除めんどくへー……」

「ちよっと……まさか掃除じろとか言わないよね?」

「言わねーか 觸いたら困るモンだつてあるし」

「じゅあつれへへんなー!」

そう言ひて笑うと飛鳥もへすく笑つた。

「こっかし……、ゴリラ箱はどひー。」

足元の黒いシミのついたティッシュを見ながら言ひ。

「あー……それ たぶん昨日ゴーラーはじつふいたやつだ。ゴリラ箱……だったかな」

「アンタ……そのつち病氣になるよー。」

「別に 大丈夫だよ

部屋の奥にあるベッドにも漫画が散らばってた。

その横にあるタンスも半開きばかり。服がはみ出てるし・・・

「あー お茶とか持つてくるから その辺座つて待つてて」

「あ、うん・・・」

ぱたんっ

ドアが閉まる。

・・・座るも何も ビニニー！？

勉強机の椅子をそつと覗き込むとクッショングあるだけで「こみはな  
い。

すぐにそこには座つてまた部屋を見回す。

不意に勉強机の引き出しを開けると・・・

ガチャッ

「ウーロン茶でいい？」

「・・・・・・・・・・・・

「燐？」

飛鳥がいることに気がつかなかつた。

そんだけ 驚いた

「お お前一勝手に人の机の中見てんじゃねえ……！」

「えー？あ・・・飛鳥・・・」

引き出しの中は「ちや」「ちや」で たくさんの中物があつた。  
はき終わつたものかどつかわからぬいぐしゃぐしゃの下着

小さこ頃の写真の山

中学の頃使つたと思われる高校入試の参考書・高校のパンフレット達

「そこには・・・人に見られたくねえもんばつか入つてんだよ・・・」

「

飛鳥が顔を赤らめながら言つ。

「へー ハツチな本とかはないんだー」

「バツバカ！んなもん興味ねえよー！」

「えー？どーだかー」

「べつ別に 女には・・・お前ぐらいしか興味ねえしー」

そういうと飛鳥の顔は真っ赤になつた。

「も もうこいだろーホラ茶ーーウーロン茶しかねえぞーー」

くすくすと笑うと飛鳥は小走りになつて床へ乱暴に座つた。

## 第44話 気付いたら氣付いてなかつたら

それからじょりく飛鳥と喋つて……

不意に勉強机の上にある時計の存在に気付く。

見るともう3時30分強。

「うあ もう帰らなきゃー。」

「え？ そんな時間？」

「うん じゃあ私帰るねー。」

「待てよー送るから……。」

「え？ そんなに離れてないんだから平氣だつてばー。」

「……そろそろ 暗くなるし……危ないだろ」

「えー？」

「だー！ 素直にはいつていえよー！ 別に送りたくて言つてんじゃねえよーもつ少し前といたいだけだー！」

そう怒鳴ると飛鳥は耳まで真っ赤になった。

「あ・・・・・あ・・・・・ぐ・・・・・い 今のは・・・別に・・・・・」

くすりと笑つと飛鳥はため息をついた。

「じゃあ 送つてつてもらおうかな」

そつこつと飛鳥は満足気に鼻で大きく息を吐く。

ガチャーンツー

ドアを閉めて 鍵も閉めて。

「う～結構寒イな」

そつ言つて飛鳥は私の手を握る。

「そ？私はこれぐらいのがちょうどいいになー」

「へえ？俺寒いの嫌い・・・」

「ふーん 私暑いより寒いほうが好き。だって寒いなら着れば寒くなくなるでしょ？」

「・・・そんなもんかね 夏のが身が軽いけど？」

「ふーん」

向こうのほうから何人かのグループが歩いてくる。

小学校の・・・3年生くらいだろうか？

女の子3人 男の子3人のグループだった。

仲良さげに喋つて 楽しそうで・・・

昔の私達みたいで。

お祭り帰りらしく、女の子3人はりんご飴 男の子3人はフランクフルトを食べていた。

「・・・なんか 昔の俺等みてえ」

同じことを想えていたらしく、飛鳥はぼそりとつぶやいた。

「・・・そーだね」

「あの頃は まさか燐といつなるなんて思ってなかつた」

そういう飛鳥の手に力がこもるのがわかつた。

「・・・うん 私も思わなかつた」

「ずっと あんなふうにつるんで・・・ずっと一緒にいるもんだと  
ばつか思つてた」

その言い方が なんだか氣に入らなくて口をはむ。

「・・・あのままの方がよかつた?私と いつならないほうがよかつた?」

返事が 20秒以内に出されなかつたら、この手を離さつ

そう思つたけど 答えは即答だつた。

「いじや~」いつなつてよかつたよ

「・・・ふうん」

「でなれや カノン」とうれてた

「・・・」

「いじならなきや 燐が俺から離れてつた

「べつ別に 飛鳥といじならなくともカノンとは何にもなんないよ

!—!

「・・・まあ、別にいじなつたからいんだけども、どうちでも。」

「・・・」

「それに俺は元々燐のことが好きだつたと思う。今のガキ達の年齢の頃からかもしれない。どんなくらいかわからぬいけど昔から 燐のことは好きだつたよ」

こんな その辺に人も通りそうな道で 堂々といわれたら・・・

「気づかなかつただけ。いまさら気づいたから・・・戸惑つたけど どんなに時間がたつてもこつなつてたと思つ」

「・・・せつか」

「とにかくー今は俺幸せだからいいんだーー！」

「アハハッ 何それ！」

笑つてるとすぐ家に着いた。

「んじゅ・・・ありがとね」

「ん 明日、学校でな」

「うんー・じゅ・・・」

言いかけて口をふさがれた。

「・・・・ツー・・・」

「じゅあな

微笑を浮かべて飛鳥が手をふる。

「じ・・・・じゅあ・・・・

手をふって すぐに家に入る。

玄関でへなへなと座り込んでしまった。

## 第45話 お祭り 夢乃達編（夢乃視点）

実は 燐と飛鳥バカツプルモード発動中の間 みんなの間では亀裂  
が・・・

「ふつざけんな……！」

「お おこ夢乃・・・」

珍しく夢乃が声を荒げて怒鳴った。

それは ほんの数十秒前の克哉の行動のせいだった。

「夢乃！夢乃！りんご飴食べよーー！」

華穂が私を手招きする。

「あー・・・私ぶどうにする。」

「私はりんご飴ー！」

「ぶどうの飴とりんご飴をそれぞれ受け取つて舐める。

口の中に濃い甘い味が広がる。

「あー・・・・ぶどう飴久しぶり・・・去年はいちご飴だつたし・・・

L

「夢乃が持つとそういう飴つて可愛く見えるよな」

克哉がつっこひ微笑んで言つ。

「ハイハイ アンタのそういう系の冗談は聞き飽きた」

「冗談じやねえのになー」

「あーはいはい」

「・・・ホント夢乃つて体で教えないといわかんないよなー」

「は?」

頭を力強くつかまれる。

と  
すぐに目の前が真っ暗になった。

脣にあたつたもの 田の前には田をつむる克哉の顔

じばりくして脣から「それ」が離れる。

「な・・・な・・・つ」

「こんぐらいすればわかつてくれる?」

バシンツツ――――――――

騒がしいお祭りの人」みの中 私が克哉の頬を思い切りたたく音が響いた。

「いつてええ……」

「なつ何すんのよ……！」

克哉が赤い自分の頬をなでる。

「何・・・つて キス」

「やついつ意味じやない！！なんでこつこつ」とするかなあ！？アンタは！！ホンシト！！！」

「好きな奴にキスしちゃいけねえんだ？初めて聞いた」

「ツツ 女なら誰でもいいくせに！！女好きの最低男！！！」

「誰でもじやねえ！お前が全然俺のこと見ねえからしようがなく他の女の相手してただけだ！女好きでもねえ！！最低はどうちだ！！この鈍感女！！！！！」

「ふつざけんな！！！！！」

「お おこ夢乃・・・」

要があせつて私の右肩をつかむ。

「アンタなんて・・・大イイツツツツ嫌い！－！－！－！－！」

## 第46話 夢乃と克哉

昨日は飛鳥とお祭りで楽しかったし……

あ～！なんてすばらしげ……（ゲンキン）

「おっはよー！」

我ながらかなり上機嫌で教室のドアを開けた。

・・・のこ

シイイイイン・・・・・・

「・・・はりやああ？」

思わずマヌケな声をあげた。

なんで なんでみんなこんな重い空気・・・？

見ると夢乃がかなり不機嫌な顔で席に座ってる。

「ゆ・・・めの？」

「・・・ああ・・・燐 わはよつ・・・昨日は楽しかった？」

「うふー…すんじく楽しかつたあ」

「そ・・・よかつたね・・・」

「・・・夢乃？何かあつたの？」

「・・・うん あつた。私のきっとこれからも含めて人生最大最低の出来事が・・・」

「へ？」

「おい夢乃・・・克哉も悪氣があつたんじゃねえだろうしさあ・・・」

「

要があきれた声で夢乃に言ひ。

「要！夢乃、何があつたの！？」

要はチラリと夢乃を見てから私のほうを見た。

「それが・・・克哉が夢乃に・・・・・・・キス したんだよ」

その言葉を待つてましたとばかりに教室にいた人達が騒ぎ出した。

「マジで！？克哉やるなああ！――！」

「うつそ！――夢乃かわいそ――」

同情？期待？からかい？

いや、全部だよね・・・

どうであれ人事でみんな高みの見物気分だ。

「・・・で？ 克哉は？」

「知らねえ まだ来てないみたいだけど・・・」

「あんのくそ男・・・来たら窓から落としてやる・・・」

夢乃 ここ 4階だよ・・・？

夢乃がここまで怒つてるのは初めて見た・・・かもしないなあ  
今まで女の子 男の子 どちらにからかわれても平然とした夢乃  
が・・・

よおつぽど 克哉にキスされたのがいやだつたんだろうなあ・・・

「おはよー」

何事もないよつこ

今までと変わらず笑顔で克哉は教室へ入つた。

もちろんみんな挨拶の返事はせずしんとしてる。

夢乃はため息をついて克哉を睨みつける。

わー・・・こわあ・・・

「なんだよ～みんな俺のこと無視ー？おはよー夢乃」

「…………」

夢乃は返事をせず席を立つ。

「おい夢乃 どう行くんだよ～？」

「……アンタのこないじりひめ」

また夢乃は克哉を睨んで教室を出ようとする。

「えー？ なんで？ なんで？」

「アンタのいる場所になんていたくない 回じ部屋の空気吸つてる  
と思つだけで嫌」

夢乃はよく通るこつもと変わらなこ声でペラペラ喋る。

自分のいいたことだけ吐き出すよ！」

「なんでだよ～ひじくな」か？」

「ひじこのせひつちよ～」

夢乃は少し怒鳴つて教室を出た。

夢乃のいないしんと静まり返つた教室の中を見て克哉はため息をついた。

「なーにをあそこまで怒つてるのかなあ・・・」

「アンタがしたことが許せなかつたんでしょう？」

私が言つと克哉は少しうな。

「うーーーー・けどさ 好きだつたらしくなんない・燐と飛鳥だつてキスぐらじしてんだろ？」

飛鳥の顔がぼつとこつきに赤くなる。

「お・・・前・何聞く…」

「ホラしてんじゃん 好きならしたくなれるよ」

「向うは好きじゃないんだよ? それでもじてこと細つへ。」

1人で焦つてる飛鳥はかまわず克哉に言ひ。

「・・・別に アイツがいつまでも俺のことまかすからだよ」

「は?」

「昔つからー俺が好きだとかいうとアイツは[冗談だとふざけんなだとか言つ! 本気なのにずっとやつだ! だつたらどうせいつかって信じてもうれつてんだ! …」

克哉が声を荒げる。

思わず1歩克哉から離れた。

「そつそれでもー無理やり感情を押し付けるやつなことあることな

いでしょうー? 「

「シッだつたらーーーびくすればよかつたんだーーー? 言えよーホラー! ！」

「・・・・・・・・・・・・シッ」

いえるわけない

そんなの わかんない

だつて知らないもん そんなの

恋愛に関してなんて 全然わかんないのに

そんな 自分のことでもないのに・・・

いえるわけない

「シいいえないだろー? だつたら偉そうなこと言つてんじゃねえよー! ！」

「・・・・・シッ」

「いい加減なこと言わないでくれ! 僕だつて・・・色々考えてたんだから! 余計なお世話だー! 黙つてろー! ！」

「本気で言つてる? 」

「は? 」

「余計なお世話 黙つてろ それ本氣で言つてる。」

思い切り 目に力を入れて

少しでも克哉を困らせるように睨む。

どうしても克哉を見上げる」とになるから・・・そりゃ迫力ないかもしれないけど

「・・・本氣で言つてるけど?だから?なんだよ」

「だつたら アンタのことなんでもう知らないー。」

やつまつて私は教室を出た。

後ろから誰かついてくる。

振り返ると飛鳥がいた。

「・・・なんぞついてくるの?..」

「ああこう言い方ないんじゃねえの?」

「・・・だつて」

「アツイだつて色々考えたんだしわー」

「だつて 梢乃傷つけた」

あんな夢乃は初めて見た

それなのに悪いことしたなんて思つてなくて

それが克哉で

いろんなこと考えて・・・

「・・・夢乃 泣く」

夢乃は人前で泣いたことがない

夢乃は 人前で泣くことができない

だけどあれは泣きそうな顔してた

教室に出る前の夢乃

だから・・・教室から出たんだ

きっと 今泣いてる

「夢乃・・・」

「・・・なんでお前が泣くの」

飛鳥が私の頭を撫でる。

目から涙が流れる。

「だ・・・つて・・・」

「お前が泣く」とじゃない、お前の問題じゃないよ。夢乃と克哉が  
どうにかしなきゃいけない問題なんだよ。お前は何も言っちゃいけ  
ない」

何も言っちゃいけない

本当に?

私は 何もしちゃいけないの?

夢乃と克哉はずっと一緒に

仲が良かつた

そんな私でも 何も言っちゃいけないことなの?

## 第47話 バラバラ

教室に戻ると克哉が要を喋つてた。

「・・・新一ってさ 夢乃達のことは一言も言わねえよな 昨日もボーッと見てただけで・・・」

要が少しイラついた様子でいつ。

「・・・別に」

なんでも要が急にそんなことを言つのか一瞬不思議に思つたけど・・・

やつぱり 要も私と同じ。

何か 私達がしなきゃと思つてしまつただ。

ずっと一緒にいるから

お互いのことが わかつてゐるから

わかつてる私達がどうにかしなきゃいけないとか思う。

それなのに 同じ条件の中 新一が黙つてるのは確かに気になる。

「・・・なんで俺等がいちいち言わなきゃいけねえの?」

そういえば 飛鳥は私と考えが違つてた。

やっぱり 人間というものが複数いれば 考えが違つてくるものなのかな？

「なんでって・・・アイツ等2人が暗かつたら俺達だつて・・・」

「なんこと言うのはいいけどさ 仲良しこよしすんのも勝手だよ。だけどさ それがなんになるわけ？いつまでも・・・もうそろそろ離れていんじゃないねえの？」

その言葉に 衝撃を受けたのは私だけだらうか？

「どうせ人間なんてバラバラにつまれて 偶然接点が生まれて 結局バラバラに死んでくんだよ。そろそろバラバラになる準備したつていいんじゃねえの？」

新一の言つてる意味が わかるけどわかりたくなかつた。

何がいいたいのか わかつてしまつこの頭を憎んでしまう。

「お前・・・何言い出すんだよー」

「燐と飛鳥がいいきつかけだよ！どんなに仲良くしてたつて所詮男女なんだよ。そういうのもそろそろ考えるべきだと思つね」

私と飛鳥が付き合い始めたことで 確かに始まつてた。

私達の関係が 崩れていく準備が。

あのままずっと みんな仲良しで

男女 関係なくて

あのままでいたら・・・どうなつてた?

周りを寄せ付けず『わたしたち』といつグループでずっと通してきて  
て・・・

将来離れ離れになつて どうするの?

男嫌いで冷静沈着 他人の意見を聞かない夢乃は?

結婚はきっとできない 他人から見れば感じ悪いひと もうと職場  
で嫌われる。

そんな夢乃でもいいといつぱいあつて

それは たくさん私達は知つてて

それでも知つてるのはあくまで『私達』といつグループの中で

その外にいったら?

考えたくもなかつた。

だからこれまで考えなかつた

「・・・別に夢乃と克哉は・・・はつときやいいんじやねえの?」

新一がボソリとつぶやいた。

「・・・・・」

要はため息をついた。

## 第48話 静かな教室 崩壊

力チ・・・力チ・・・

授業になり 席に座る。

ボーッとしながら無意味にシャーペンを押し続ける。

芯が少しづつ出て 数センチ出て止まる。

止まるとため息をつく。

先生が数学の問題を黒板に書き続ける。

クラス中がしんと静まり返っていた。

先生 なんとも思わないの？

夢乃は戻ってきたけど不機嫌で

克哉も不機嫌。

要はよくため息をつく。

他のみんなは普段通り・・・じゃなくて 静か。

別に特に異変はないけど・・・誰も一言も喋らないとなると氣味が悪い。

飛鳥も平然として、普通に授業受けてる。

ため息もつかない。

なんだかそれが 無神經・・・とは違うな

なんだか 無関心に見えてしまって寂しくなる。

今まで私達が一緒にいたのはどうしてだらうへ

どうじょりもないことを考える。

新一の言葉を思い出す。

新一は 本気でそう思つてゐるのだらうか

それは いつ思つたことなのだろうか

私達と遊んでて 一緒にいて 笑いあって

そうしてゐ間も新一は一人で考えていたのだろうか?

『離れる準備をいつかしなければいけない』

『ずっと一緒にいてもしょうがない』

そう 考えてたのだろうか?

そう思つと寂しくて 泣が出来つになつた。

結局 私の独りよがり?

休み時間 誰も教室内で騒がなかつた。

他のクラス 廊下で騒ぐ人はいたけど。

夢乃はむすーと不機嫌な顔をして座つてた。

克哉は鼻歌を歌つて ずっと一人で座つてる。

まるで わざと夢乃のそばにいるよう。

要や新一はボーッと空を眺めてる。

奈央 明美 華穂は静かにしてるのが性に合わないといいながら廊下へ出て行つてしまつた。

夢乃と克哉についてはなんとも言わない。

「ね・・・飛鳥」

飛鳥の服のはしつこをひっぱる。

「んー？」

「なんかやだ・・・」

「・・・あー」

「みんな静か 無関心 他人事」

思い浮かぶ単語を並べると飛鳥も教室内を見回す。

「まあ・・・黙つて終わるのを待とうっ！」

「・・・本当に 私達は何もしちゃいけないの？」

「ん？」

「だつて・・・ずっと一緒にいて・・・」

「一緒にいても 結局は他人で・・・」うううたら冷たく聞こえるかもしぬないけど、違う人間なんだよ。一人で色々考えたい 他人に何も口出しされたくない あるだろ？そんなこと

「・・・うん」

確かにある。

そうなると 夢乃達の言葉をウザつたく感じてしまつて ついハッ 当たりする。

「そういう状況だと思うよ。あの2人は、克哉なんかは元々男限定に短気だから・・・あんまりかかわらないほうがいいかも。」

飛鳥の言つてゐことは正しいのだらうか

どうしても すべてを否定的に見てしまひ。

何が正しいのか わからない。

ずっと みんな同じ気持ちだと信じていたのに

急にそれがすべて壊れてしまつた気がした。

## 第49話 「チャチャ」

飛鳥達はほつとけつていつし・・・

夢乃と克哉には関わらないよう、休み時間のたびに私は明美達と廊下へ出た。

そのまままづとそのまま 本当にそのまま同じように時間は流れていった。

静まり返った教室

不機嫌な人

関わらないようにと近寄らない人

何も気づかない様子の先生

放課後になると私はすぐに飛鳥のところへ行く。

「飛鳥」

飛鳥はくすくすと笑つて私の頭を撫でる。

「ハイハイ 帰ろうか」

「うん〜・・・」

「だからーなんでお前が泣きそつになんだよ

荷物を背負つて飛鳥がまた笑う。

「だつて・・・みんな静かで変 ずっとこのままなの?やだ・・・」

「このまま・・・ってことはないだろ。さすがに・・・まあ、今は黙つてた方がいいよ」

「本当に?やうなの?」

「うん ホラ 燐 帰る?」

頷いて教室を出る飛鳥についでいく。

階段を降りると途中で囮まれる。

クラスの人たち・・・といつより 同じ学年の人?

「ねえ・・・夢乃達がいたから聞けなかつたんだけどさーーー」

えーと・・・横山さん・・・だつけ?が言つ。

「2人つてつきあつてんの!ーー?」

「へ?」

「はあ?」

私と飛鳥は同時にまぬけな声をあげて顔を見合わせる。

つきあつてゐる・・・んだよねえまあ・・・

けどなんか・・・」みんながこゝの言ひへりつてい  
うか・・・

「そつなのか！？飛鳥！？」

「お前等一緒にいるし、アリヤや祭りいなかつたか?」

うつわ・・・ウザ・・・

私がため息をついてさうさと行こうとするとき腕をつかまれる。

1  
?>

ふりむいた瞬間  
唇に飛鳥の唇が触れる。

一  
な  
・  
・  
・  
づ  
！  
？

唇が離れて私はビックリして目を丸くした。

火事に手出すなよ野郎共、

飛鳥はそう言ってにつこりと微笑んで私の手を握る。

「え・・・ちよ・・飛鳥!-?」

「いいか！！燐に手出すとかしたらツブス！！！！！」

飛鳥はもう一度言つて階段を下りる。

「え・・・飛鳥ーちよ・・・待・・・つー・・・」

「・・・」

飛鳥は私の手を握ったまま階段を下りる。

1階に着くと手を離す。

顔を見ると飛鳥は満足気に笑っていた。

「・・・飛鳥 なんでああいりとするの?恥ずかしかったあ・・・」

「

「だつて ハツキリさせないと中途半端な奴等が集まるだろ?」

「どうこいつ意味?」

「お前に俺以外の悪い虫がついてー」

「??？」

「自覚ないけど お前何気にモテんだからなーーそりんとい氣をつけろよ!」

「モテる?私が?夢乃じやなくて?」

「あー・・・まあ、夢乃もそりだけどーお前だつて可愛いんだからな!」

「え～？ 何それえ～」

「ハイハイ・・・自覚ないうてのは知つてゐるよ・・・」

飛鳥はあきれたようにため息をついた。

下駄箱を開けて靴を出す。

「あーあ・・・本当 夢乃とかどうなつたらだらう・・・」

「だから 今はほつとナツヒヅマー」

「セツヤ・・・ナビれあああ・・・」

胸の奥からじわじわと浮き出していく感情

『どうにかしたい』

『何かしてあげたい』

そんな風に思つてしまつ

やつぱりずっと一緒にいたんだし・・・

でも それは表向きだけで?

結局はバラバラで?

でも心配で?

頭の中がこまごま整理できなかった。

「 もう・・・ホント 色々いきなりやるの… 」

たぐわざのことが、こいつから起つやめた。

だつて もうと 小わざ頃から一緒に

当たり前で

これからもやうだと 信じていたのに

急なカノン 飛鳥からのお

カノンと飛鳥関係のやりとりを

夢乃と克哉

新一の発言

たぐわざのことが起つやめた。

「 今日は早く寝るよ。な? 」

飛鳥が私の頭を撫でる。

飛鳥の手のぬくもりが頭からじんわり伝がる。

「 ・・・ん」

私はそう言って小さく頷いた。

## 第49話 ハチャハチャ（後書き）

祝50ページ目ー！（関係ないか）

私の年齢教えちゃいます・・・別に知りたくないよーとか言わないで下さいー！！

中学1年生です・・・（ボソリ

ガキかよー中坊かよーとか言われると思いいえませんでした  
ところがで・・・これからもよろしくお願いします！

## 第50話 文化祭 白き姫の配役

「やつこえば、今月の最後に文化祭をすることがなつてゐる」

「ええええええええええええええ！」

しんとした朝の教室に響き渡つた　なんだかかなり懐かしい騒がしい声。

「この学校は1年に2度文化祭をしてくることになつていて、1度田は各クラスごとに劇や合奏　合奏の出し物をするんだ」

ふーん　めんどうやー・・・

「で、今日は何がいいかみんなで話し合つてくれ！評議委員は前に出てきて進めてくれ」

委員の人が前に出てペラペラ喋り始めたけどどうでもよかつた。

だつて先生　それどうがんやないよ？

少しは『づこづこ』・・・・うちのクラスの異変にやあ・・・

そんなことを考へる間に多数決で劇に決まつてしまつていた。

「じゃあ・・・劇はどうしますか？何をしますか？」

「ハイ…やっぱ定番のかぐや姫とかシンデレラで…。」

「あ、白雪姫とかもいこよねー」

「あ、白雪姫いいね！森とか・・・いいねいいね！…。」

みんな白雪姫でわっと盛り上がる。

今頃白雪姫か・・・小学生みたい・・・

心の中でため息をつべ。

「じゃあ・・・白雪姫で決定します いいですか？意見のある人は？」

誰も何も言わないため白雪姫で決定。

「じゃあ・・・王子様 白雪姫 小人等を決めます。まあ・・・王子様と白雪姫 立候補者は？」

もちろんいない。

さすがにそんな恥ずかしい役を自らみんなの前で『やるー』なんていう人はいない。

よつぽどの大立ちたがり屋。

みんなこれがいいあれがいいといいながらもいざ自分がするとなると拒否するものだ。

「じゃあ推薦は？」

「ハイ！白雪姫は桜塚夢乃さんでー！王子様は沖野克哉君がいいと思  
います！」

その意見にため息をつく人

からかいの言葉を放つ人

くすくすと笑う人

「いいじゃん 美男美女ー」

誰かがそんなことを言ひ。

「つていうかアイツ等本当にお姫様と王子様の関係じゃん 本当にし  
くつついちゃえよ」

「あ、そうだー！白雪姫と王子様でキスシーンいれよつぜー！本当にし  
ちやうやつーー！」

「いいねそれーー！」

ぎゃははははと下品に笑うバカな男子共。

イラつく・・・

夢乃もかなり不機嫌。

克哉はボーッと窓の外を眺めてる。

本人達は無関心 つて感じだ。

「なあ！桜塚！いいだろ！？キスくらい！！」

その言葉に夢乃が男子を睨みつける。

「な・・・なんだよ こわいおすんなよ」

「アンタ達 ふざけてんじゃないわよ？いい加減にしてよね・・・」

「ふざけてねーよーお前等がいつまでもぐだぐだしてるとか・・・」

「うるせえな！・・・」

克哉が怒鳴る。

「お前等おとなしくしてろよ 夢乃泣かせたらテメエ等全員血祭りだ」

その言葉に男子はしんと静かになる。

くすくす笑つてた女子も静かになつた。

「・・・言つとくけど 僕王子様なんてしねえから。夢乃が姫すんのは勝手だけど 僕は誰があいてでも王子はしねえ・・・」

克哉はそう言つて乱暴に椅子に腰掛けた。

委員はおどおどしながら話をする。

「では……他に推薦者は？」

「ハイー、白雪姫で……春日部さんがい」と思っています

「え？ 私？」

縁のない話だと思って聞き逃すところだった。

確かに今 春日部といった。

「燐かー、いいよねー、可愛いしー、お姫様って感じー！」

「相手は……飛鳥だよなあ やつぱり。」

「え？ 私……お姫様なんて……」

「他の推薦者がいないのなら春日部さんで決まりますけど？」

「異議なし……」

クラスの半分以上が言つたため委員は黒板に私の名前を書く。

「うなつたら……やりたくないなんていえないじゃないか

飛鳥が王子様ならいいけど……

と呟つともわもわと空想の世界が広がる。

そりこえれば最後に結婚するんだっけ あの2人・・・

つてことは劇でうそだけど飛鳥と結婚式！？

したい！劇だとしておもしてみたい！

と 思つていたけど・・・

「じゃあ・・・王子様は島村君がいいと思います！」

「えー、けど飛鳥じやはまろすきてなんかなあ・・・」

「だつて 燐ちゃんひとつあつてんどう？あいつ・・・」

「本人でもつまんねえよなあ」

夢乃と克哉の時とえらいく態度が違うな・・・

「な・・・つけど俺・・・」

飛鳥が何か言おうとしてある女子が声をやれぎや。

「ハイ 王子様役・・・カノン君がいいと思います」

「・・・美緒ちゃん」

カノンの名前を出したのは美緒ちゃんだった。

前に 飛鳥のラブレターを出した女の子。

「な・・・竹中!?

飛鳥が言つと美緒ちゃんは無言で席に着く。

「俺やりたいなー」

カノンが言つ。

「カノン君いいかも!カツコイイし・・・王子様って感じー・

「うんうん いいね!..」

「え・・・おい ちょっと待てよ・・・」

飛鳥がうろたえるがみんな気にしない。

「じゃあ・・・王子はカノン君でいいと思う人!」

ほぼ全員が手をあげた。

「じゃあ・・・王子はカノン君で・・・

「な・・・ふざけんなよ・・・ツツ」

飛鳥が言つが話はどんどん進んでいつてしまった。

「うわ・・・

よりによつてカノン!?

やだ・・・なんか・・・やだ・・・

「おい ちよつと待てよーー!」

飛鳥がついにきれた。

「ふざけんなよーー俺以外の男が燐の相手役なんて・・・〔冗談じやねえーーー!〕

「おじ飛鳥ー やめろよー」

「カノンが王子なら燐 姫やめろよーー姫を燐がやるなら俺が王子するーーー!」

「もつ多数決で決まつちゃつたじやんかよー 飛鳥ー」

「島村君 うるさいーー」

「~~~~~」

飛鳥は怒りがおそれられないらしいが、ふと震えていた。

「飛鳥ー。」

私が名前を呼ぶと飛鳥が振りむく。

「大丈夫だよ 心配しなくても・・・なんにもないから。」

「・・・ナビ 燐・・・」

「いいから 黙つてよ?」

「こり笑つて言つと飛鳥はぼりぼりと頭をかいて目をそらす。

「・・・騒いで すいませんでした」

ボソリとやう言つて飛鳥は静かになった。

それからじぱり飛鳥はむすーっと不機嫌そつな顔をしてた。

## 第51話 白雪姫の配役2

結局配役は・・・

白雪姫 燐

王子様 カノン

継母（妃） 要（女顔のためウケ狙い女装）

獵師 新一

小人 ドワーフ 夢乃 華穂 その他クラスの小さい女子男子5人

白雪姫母 明美

家来 克哉 奈央（ウケ狙い男装） クラスの男子2名

鏡（声のみ） 竹中美緒

馬など動物 クラスの数名男子

小道具 衣装 残りのクラス女子

大道具等 残りのクラスの男子（飛鳥）

脚本・監督 先生と委員

「男装とか女装とか・・・お約束だよね」

「いいじゃんーおもしれーー！」

「奈央ちゃんとか・・・いいの？」

クラスの女子が言つ。

「えー？別に？私は平氣だよ？」

そりや・・・奈央 私服も男前だしね・・・

それよりも 要だよ要！一・継母・・つてフリフリドレス！？

「要ヤツベーーー！」

「まー要つて女顔だし・・・意外とアリ？」

「ふつ お前等俺の女装はやっぱいぜ？惚れんなよ」

・・・要 その自信、むなしくはないですか？

「白雪姫って・・・残酷版と童話版があるナビ もう一つあるね？」

委員が口を開く。

「あー、本当はこわいグリム童話・・・みたいな 小学生の頃 読んだっけな」

「あれだろ？肝臓だとか胸紐だとかだろ？」

「あーあつたあつた・・・」

「童話つて意外と残酷なんだよー・・・」

「あれ 最後の妃が踊り狂うつてやつはおもしろいやつだよなー。」

「あー、表向きハッピー・ヒンドなのに後ろでぐるぐる踊つてるとかよくねえか？」

あーあー・・・人事だと思つて・・・。

「燐一 がんばろうな 」

カノンが「機嫌でこっちに話しかかる。

・・・別に もう友好的にする必要ないんだよね

だつてひどい」としてきたし 私は飛鳥とつきあつてるんだし・・・

「・・・別に アンタと一緒にやる気でなー」

「えー？冷たくないかー？そういえば王子と白雪姫はキスシーンあるんだっけー？楽しみだなー！そういえば放課後練習とかあんのか

な？」

ドンッ！……！

私の机をいつの間にかこちらに来た飛鳥がたたく。

「テメエ……燐に必要以上近寄んな キスも演技だ！寸止めだ！」

！」

「えー？ 別に1回しちゃったしよくない？」

「テメエ……！」

「飛鳥……！」

私が慌てて止めると2人は今にも殴りそうな体制はやめたけどこちら  
み合つたままだった。

「あつそ 大口たたいてるわりに余裕ないよねー」

「な・・・・ッテメエ いい加減にしろよー！おー委員ー！俺とカノ  
ン入れ替わらせろー！ー！」

「委員さーん 入れ替えなくていいよ 僕王子やりたーい」

カノンもカノンで……ふざけてるし……

なんか ムカつくなあ……

私は一人で小さくため息をつく。

「じゃあ……春日部さん 2人の「うちどり」をしたい？」

「え・・・えーと・・・」

そりゃ 飛鳥・・・つていうべきだよね?

けど わっかから感じてんだよね・・・

## 女の子達の視線

あはははは そつかあ カノンって女子に人気あるんだっけ? (し  
かも気の強い子ばつか)

そうだよねえ~あ~そつかー

だつたらカノンが王子するの反対意見言えればいいのにー

頭の中でふぞけたよつて色々考えるけど無駄。

どうしよう・・・かなあ・・・

「おい燐ー何悩んでんだよーー。」

「えー？ 燐 僕のほうがやる氣あるし顔いいし演技力あるよー？」

そりゃ・・・確かに・・・

ぱっと見た感じ『王子様』って感じはカノン・・・

けど 私、飛鳥以外の男の子と恋人やつていいのかなあ？

「えつと・・・うへん・・・」

「燐ー？」

「えつとお・・・カノンってあんまり器用じゃないから・・・大道具無理そつだし・・・」

「はあー！？」

「やつぱ・・・カノンのが雰囲気あつていいかも？」

私がにこーと笑つて言つとみんなが頷いた。

「じゃあやつぱりカノン君で・・・」

「お おい待てよーー燐ー！ なんなんだよお前ーはあー？ 僕よりカノンのがいいってのかよーー。」

「誰もそんな」と言つてないよーただ！ カノンのが王子様つて感じがするつて話なのーー。」「

「はああ！？ テメエ 僕以外の男と恋人同士でいひつてのかー・ふざけんなよーーー！」

「うひさいなーー！ だつたらアンタ女装して白雪しなさこよーーー！」

「無理だーーいいから俺を王子に推薦しりよーーー！」

「い・や・だーーわがままー！」

「ふざけんなーー！ テメエ 僕のこと好きなんじやねえのかよーーー！」

「好きだけどそれとこれとは別でしょおーーー？」

「別なもんかーー！ テメエ 別れんぞーーー！」

別れる！？

ふつぎけてる・・・・・

そんな簡単に口走れる言葉！？

その程度なわけ！？

すつしーじい腹立つてきた・・・・

「ああ別れてやるわよーー！ こんなぐちぐちいつつ男私だつて限界だねーー！ 束縛しそぎー！ 白意識過剰ーー！ 白己中ーーー！」

「な・・・・本気で別れんぞー！」

「ええ別れてやるけど? ハイさよならああーーー!」

「ムツカつく・・・絶対俺は謝らねえ！！」

「あつそ 謝らなきやいいわよ……」

ムツカつく・・・！！

私達のやりとりをみんな口を開けてみてた。

克哉たちはあきれたよつにため息をついていて カノンはにじにじ

## 第52話 白雪姫3

「じゃあ・・・春日部とカノンは放課後残つて打ち合わせするかー。」

先生が立ち上がり急に仕切り始める。

あーあ・・・とめに入つてよね・・・

飛鳥は心底不機嫌な顔をしている。

けど 飛鳥が悪いよ！！

劇なんだから・・・演技なんだからせ・・・

放課後になると飛鳥はさつさと教室から出ていってしまった。

何さ あれ！！

私は悪くないもんね！！

結局先生と委員 カノンとの4人で大体の流れや衣装等の打ち合わせをして帰る。

「燐一 僕送つてくよ」

カノンがにこにこしながら言つ。

「結構 アンタと帰つたつて不審者に会つてると変わんないしー」

についつと愛想笑いを浮かべるとカノンはため息をついた。

下駄箱に行くと見慣れた人影。

「・・・なんで いんのさ 帰つたんじゃないの?」

思い切り動搖しながら言つと飛鳥は田線をそらす。

「・・・お前 ホント白雪姫・・・やめろよ」

「はあ?」

「夢乃がさ、かわつてもいひつて言つてた。かわれよ

「やだよ なんでいまさら? 第一なんで飛鳥が言つわけ? 関係ない  
じゃん」

「関係あるだろー」

「・・・なんなの？」

態度でかくて『別れる』あんて軽々しく口に出して

今度はなんなわけ？

私にビビッたりと？

「・・・頼むから やめてくれよ」

「意味わかんない 理由は？」

「・・・お前が他の男とこるといふ見たくない」

わがまま

すぐ】その言葉が浮かんだ。

「・・・飛鳥 わがまだよね」

「え？」

「なんなの？あーだこーだ・・・つるせこー 彼氏だったら彼女の全部を縛つていいんだ？私は他の男の子といちゃいけないんだ？おかしくない？それって」

飛鳥の「」とは好きだ。

だけど だから他の男の子とは喋らないとか

そういうのはおかしい」と思つ。

「演技だよ？劇だよ？それでもダメなの？私がカノンとつきあつとも思うわけ？そんなことあるわけないじゃん！」

「わ・・・わかってるけど……」

「わかつてゐならなんなわけ？」

「とにかく一夢乃と変われ……」

「やだ！…飛鳥のわがままをなんで聞かなきやいけないの…？私は飛鳥とよりカノンとしたいよ！…」

飛鳥としたつて こういつ風にあーだーだ言われるんなら にこにこ笑つてゐるカノンのほうが多い。

カノンの「」とは嫌い 正直こわい。

だけど あーだーだ言われるよりはずつヒマシ。

にこにこ愛想笑い浮かべてる人のほうが ずっとずっとといい。

私は飛鳥の横はさつたと通り過ぎて、一人で帰つた。

寒い

冷えた手はとても冷たくて 震えてきた。

後ろを見ても飛鳥はない。

この寒さの中 一人で静かな下駄箱で待つてくれた

やさしい

だけど こちこち口出しするのはおかしくよ

はーっと冷えた手に息を吹きかけた。

## 第53話 白雪姫4

家に帰つて着替えて 私はすぐに夢乃の家に行つた。

「夢乃おおおお～～～～」

「・・・私に泣きつかれても困る」

そういうながらも自分の部屋に私を入れる夢乃は大好き・・・

「だつてさーひどいと思わない！？」

一通り説明すると夢乃はあきれたようにため息をつく。

「まつたく バカッフルほど冷めるのが早いつてのはホントだね」

「バカッフルじゃないもん！！」

「まあいいけど・・・それはアンタが間違つてるでしょ・・・」

「なんで！？私悪くないもん！！」

「普通彼氏以外の子を選ぶ？あれは私もあれ？って思つたよ・・・」

「う・・・

「だつて！カノンのが王子様じゃない！？」

「そりゃそうかもしないけど 飛鳥でもいいじゃん別に。」

「へへ・・・」

「私が飛鳥でもむかがに怒るね」

「こじわる～やむしくな～い」

「同情するだけが友達じゃなこりしそ？」

夢乃はにっこりと微笑む。

それでも・・・同情の一言は欲しいんですけど奥さん・・・

「ホラ メールでもして謝りちゃいなよ。『みんなこいつ。それでホラ 仲直り!』

夢乃が私の携帯をつかんで私に握らせる。

そりゃあ・・・

私が一言「みんなこいつ謝りまえば

きっと飛鳥は笑って許してくれる。

こいつもやうだつたもん。

でつでもむせー！

「でもー別れるとか離つのばどつかと思わないーー?」

「せつやあ・・・あめ・・・」

「ホラ!ねー!」

「でも 燐がした」とのがショック度は高いね

「・・・・・・・・」

「ホラ!ー!見栄張つてないで!謝りなー!」

「・・・・ハイ」

「んじや帰れ ホレー!」

夢乃はいつまでも私を追い出す。

「う・・・バイバイ・・・・」

「ハイ バイバイ!」

「・・・・・・・・」

とぼとぼと家へと向かう。

謝りあけり感謝の言ひ出しあげつけられかな・・・やつぱじ・・・

ナビ あんな偉わかなこと言つてこそ今日のわざわざあけり謝りあけり?

それは・・・なんか悔しごっこつか・・・・・・・

けど」のままケンカもいやだし……

「もお 飛鳥のバカ！……」

「誰がバカだ ちび！……」

「……」

後ろからの声にふりむくと飛鳥。

「なななな・・・なんつなんつ なんで・・・いんの！？」

動搖丸出しの声。

「文房具屋行つてたんだよ 悪イカ」

「わ・・・悪くはないけど・・・」

「・・・んじや」

「ちょつ待つて！……」

やつぱ謝り！……

なんかやつぱ飛鳥怒つてゐつぽこし！……

慌てて飛鳥の腕をつかむと飛鳥は私を見下ろす。

「・・・何」

「あ・・・あのねーー今日・・・」

「わわわと聞えよ なんなわけ?」

そんな 冷たい皿で見るにとないじやん・・・

せつかく譲りうしてんの?ーー

「別に!ーなんでもない!ー」

フンッヒヤツボを回いて走り出す。

しづらしく走つて後ろを見たけど飛鳥はいなかつた。

「・・・フン 追いかけてくれたつていいじやんか」

ボソッヒツヅクヤコト家に入った。

## 第54話 白雪姫5

あれから1週間くらいいたつた

白雪姫の衣装はできてるのとできないのとがあるくらい。

台本はできあがつてもう練習に入つてゐる。

小道具もそろそろできてるらしい。

大道具も男子が遅くまで残つて作つてるみたい。

色々運んだりしてひらひらしてゐる飛鳥をたまに見かける。

そう あれから1週間

私は飛鳥と一言も口をきいてない。

だつて飛鳥 私と田もあわせよつとしないんだもん・・・

「なんと美しい娘だらう 死体でもいい」

カノンは台詞をもう全部暗記してゐみたいで、ペラペラ喋る。

死体でもいひつて 理解できねー・・・

心の中で思わずつぶやく。

「で、私が田え覚ますんだつけ？」

「んで・・・あーやうだ

「王子様がキスすんだつか？」

「なあ委員」「のキスってホントにやめるの？」

「あー・・・ビハッショウかー」

「まあ、才止めじやねえ？」

「ハビヤ一本掉こしたらおもしろことよなーーー。」

「燐 どひづがいい？」

委員が私に言ひへ。

その瞬間飛鳥と田が合ひへ。

「・・・別に ビハチでもいーーー。」

「じゃあ本物にしちゃおつかー？」

みんながあはせりと笑ひ。

「こや、才止めじよひも」

カノンがニヒリと笑つて言ひ。

「そりゃやうだよなー。」

みんなもまた笑う。

そりゃやうで……思つてなかつたでしょ

で、キスして……田え覚めて……

「白雪姫 愛しています 私と結婚してくれますか?」

「ハイ・・・」

ていうかさ 白雪姫も助けてくれたくらいで王子様好きになるな  
簡単に恋に落ちすぎなんだつてば・・・

「結婚のシーンのドレスは安物だしフリルとかほとんどないけど白  
い布でそれっぽく作ってるよーー！」

衣装係が言つ。

「あ・・・うん そつかあ・・・」

「男役の衣装は持つてる奴いたみたいだからそれサイズあうかなあ

?  
「

あーあ・・・。ヒツササ嬢嬌様のシーンやねなら雀鳥の丑うが・・・。

セレナード鳴えて首をくらわ。

そんなことないもん……別に誰だつてこころーだ!!

## 第55話 白雪姫 最終回

そして 本番前日

「白雪姫・・・愛します」

「王子様・・・」

「日本の手直しとかも入って なかなか慌しい。

『ゴンッ！』

カノンの頭に王子様の王冠があたる。

「こつて・・・ッ」

「手がすべった」

棒読みで飛鳥が言つ。

「何 やきもちでも妬いてんの？」

「誰が妬くかよ いつそ本当にへつてやいいだろ」

「な・・・ッ」

「何アイツ！ 意味わつかない

本当にやきもち妬いてくれたら嬉しいの・・・

飛鳥は私が他の子とくつついても平気なわけ！？

そして 本番迎田

うわーホント 緊張するんだけど！…

白い 本当に安っぽい生地で作られたドレスを着る。

「燐 緊張してない？」

カノンがにこにこしながら言いつ。

「え？ べつ別に？」

「 わづ？」

カノンはくすくす笑う。

そして 劇が始まった。

「生まれた女の子は白い肌に・・・」

あー緊張するーーーあーどうしようーーー

バクバクと暴れる心臓

「白雪姫 白雪姫ー！」

女装した要が私を呼ぶ。

うわあ・・・本当に美少女・・・要 なんで女じゃないわけえ？

「ハイ お母様」

たたたつと走り出す。

で、森に行つて・・・小人に会つて・・・

どんどん物語は進んでく。

そして 毒林檎を食べて倒れた白雪姫

王子様

目をつむつてるから顔は見えない。

ナレーション役が言つ

「王子は家来に姫を運ばせました。すると途中、家来がつまづいて

しまじ わの時姫の口から林檎が出てきました

皿を開ける。

皿をひつひつむつてたから視界がぼやけてる。

ん?

あれ?カノンってあんな髪型だったっけ?

皿をひつひつむつてもできなくて王太子様と手を握り合つ。

「白雪姫・・・」

・・・あれ?

「の壇つて・・・

「愛しています 私と結婚してくれますか?」

・・・・・飛鳥?

「あす・・・んつ」

飛鳥 と思わず皿をひつひつするの口をふさがれた。

で 混乱する頭のまま舞台裏に運ばれてドレスに着替えさせられる。

## 結婚式の場面

作り物の教会 安いドレス これだけは本物のタキシード

顔を見るとやっぱり飛鳥。

なんで飛鳥？と聞くヒマもない。

「姫 愛しています」

王子様がそう台詞を言つて またキス。

「・・・・・」

いや、本当にキスしてゐし・・・

それよりも 何が気になるつて・・・

チラリと後ろを見るとそこには踊りまくつてる黒。

やばい・・・笑う・・・ツ

「・・・ツツツ！－」

本当に笑いそうになると幕が下りた。

「~~~~~つ」

口を押されて座り込む。

「燐？」

飛鳥もしゃがんで私の背中に手をおぐ。

「つてゆーか なんで飛鳥！？カノンは！？本当にキスすんな！恥  
ずッ！？」

「え？あー アハハッ カノンに入れ替わっちゃった いいじゃん  
キスしたってさ 」

『まかし笑いの飛鳥の後ろを見るとカノンがにっこりと微笑んで手  
を振ってる。

「アイツ！？

意味わつかんない！

## 第5・6話 白雪姫 カノン（観覧点）

「なんであんなことしたんだ？」

ジラを取つてタオルで汗をふきながら言ひ。

制服姿のカノンがこちらを回へ。

「お前 燐狙いじゃなかつたのか？」

なのに なんで飛鳥を助けるよいつなまねをしたのか

「・・・別に？」

「は？」

「燐のことは好きだけど・・・彼女にしようとは思わない」

カノンは微笑を浮かべてる。

「はあ？」

「俺以外の男が燐を彼女にするのは気に入らない だけど俺は彼女にしようとは思わない」

「・・・意味わかんねーそれ」

「わかんない？ アイツの横に男がいるのなんて似合わないんだよ」

なんだそれ

「 どんだけ血口中……といふか わがままといふか……  
とにかく 意味わづかんねえ……」

カノンはくすくす笑う。

「 僕が燐のこと好きってのは人間の女としてじゃねえよ おもむりや  
として」

「 ……はああ！…？」

「おもむりやあ？」

「 アイツで遊ぶの楽しいだろ？」

「 お前なあ……」

「 お氣に入りのオモチャを野郎なんかにやりたくねえんだよ」

カノンはそう言つてくすくす笑いながら体育館から出て行つた。

・・・アイツ 性格悪い・・・

頭をがりがりかいて体育館を出るとクラスの野郎達。

「お前女装似合ってすきだよーーなんでそんな似合つんだよーー。」

「あー? なんだお前等・・・。」

「ホンダ、お前女として生きろーーばーー似合ってすきだーー。」

「・・・お前、俺にカマになれてのかあ?」

バカ共が騒ぐ中キヨロキヨロと辺りを見てカノンを探すがいなかつた。

それから少しだめ息をついてみる。

・・・燐もやつかいなのにつかまつたもんだよまつたく

## 第57話 打ち上げ

「アハハハハハハツツ」

高校生が来ていいの？って感じの居酒屋風のお店。

クラスの男子の家族がしてくるお店らしい。

今日はそこを貸しきつて打ち上げ・・・って聞かされて来てみれば

「一番！…竜崎！イツ キ行きます！…！」

クラスの竜崎君がお酒を飲む。

高校生のくせに・・・とあきれてため息をつく。

「春日部も飲むか～？」

酔っ払った顔でクラスの男子が言ひ。

「いらない・・・」

ため息まじりに言つと男子は『あつや』と言つてまた飲みだす。

早死にするや・・・

心の中でつぶやく。

チラツと飛鳥の方を見ると焼き鳥を食べてる飛鳥と田が合ひ。

手招きしてくるからそちらに行くと要もいた。

「おー燐 白雪姫よかつたんじゃねえの？」

要は少し酔つてる様子。

あーあ・・・そういうや要つて飲んだことあるって言つてたっけ・・・

要 飛鳥と並んでるから飛鳥の横に座る。

「アハハッ 僕もしかしていないほつがいい?」

要がへラへラしながら囁つから

「うん お酒臭いの嫌い」

とハツキリ言つと要はフランクとクラスの男子のかたまりへと向かう。

「・・・なんで カノンに入れ替わつての?」

「んー?カノンがさ 急に腹痛えつて言つからすぐに入れ替わったんだ」

「・・・ふーん

「仲直り?」

「はあ?意味わかんない 別に・・・」

そんな 率直に聞かれたるとなんて答えればいいのかわからない。

田をそらすと飛鳥はくすくすと笑つた。

「仲直りのチューする?」

「な・・・こんなことあるわけないじょー第一 今日まわつた  
じやん! 2回も!」

「アハハツ そつかそつか! ! !」

「・・・飛鳥 飲んだ?」

だつて飛鳥そんなこといつのはず・・・

「あー? うん ちょっと飲んだー」

「な・・・ッ なんで飲むの! ? バカ!」

「初めてだよーそれにほんのちょいひとだしー」

「もーバツ力じゃないの?」

あきれでいつと飛鳥はまた笑う。

「大丈夫だよー」

お酒のにおいと焼き鳥のにおいが充満した室内は頭がクラクラしそうなくらいだった。

「あ、おい燐！！」

新一の声に振り向くと何か飲み物の入ったコップを渡される。

「水！飲めよ！のど渴いたる？」

「え・・・うん アリガト」

何一つ疑うことなくコップの口をつける。

横で飛鳥の声がする。

「あ・・・燐！待て！」

けどもう遅かった。

ゞくさつ

ゞく・・・ん・・・

2口 飲んだ。

のどが焼けるように熱くて 穴でも開くかと思つた。

ガタンツツー！

「・・・はれえ？」

立ち上がるといきなりと体が崩れた。

そのまま床に倒れる。

「わー！ 燐ー？」

「春日部！？ 大丈夫か！！」

「あはははははは~~~~~」

視界がゆがんで 体がぐるぐるまわってるよいつな感覚

世界が 回ってる・・・

「おい燐！ 大丈夫か！？」

目の前には心配してる飛鳥の顔。

「飛鳥ア～？」

「おーーしつかりしろよーーホラー！」

「んー・・・？」

そこで 意識が途切れた。

## 第58話 打ち上げ2

「・・・ん」

意識が戻ると ゆれてた。

ゆさゆれと ゆっくり 小さく揺れてた。

誰かにおんぶされてる感じ。

まだ田を開けることはできない

において誰だか確認して安心する

飛鳥だ

少しお酒と焼き鳥のまじったにおい

だけどわかる

飛鳥のにおいだ

「・・・飛鳥」

小さな声で名前を呼ぶとゆれが止まる。

小さくついつて田を開ける。

「・・・んん~」

同時にじじいかに座りられる。

「……ん？」

皿をいりすると視界がだんだんハッキリする。

そこにはやつぱつ飛鳥がいた。

「…………？」

少し寒くて 暗いからどうかわからない場所

「公園 も前酔つてぶつ倒れたんだ。覚えてる？」

「ん…………」

新一になんか飲まれて……それでクラクラして……つてだけ。

「……飛鳥 も酒くさい」

「お前もちよつとくわいこよ

「そお？」

「うん ちよつとだけだけだけね

飛鳥がよつといひかと言ひながら横に座る。

そんな飛鳥によりかかる。

「まだ少しクラクラする……」

飛鳥はくすりと笑つた。

私も笑う。

自分と同じようなにおこのある口に口付かると飛鳥はびっくりした  
顔をする。

「……燐からすんの初めてだね」

「そーだっけえ?」

「……酔つてんだな」「りりや」

「んー……」

そのまま飛鳥の胸に倒れこむ。

体が言つことを利用かないんだ

なんだか　だるくて　体に力はいらない

頭はぐらぐらして　視界もなんだか怪しい。

「飛鳥ア……好き……」

そういうと上から飛鳥のくすぐる笑いが聞こえる。

頭にあつたかい何かがあたる。

### 飛鳥の手

私のほうが大きかったのに

いつの間にか飛鳥の手のほうがずっと大きくなつてて

だけど あつたかくてやさしいその手は 小さい頃と変わらない

「大好き・・・」

また言うと飛鳥の手が頬に触れる。

唇が重なる。

「・・・んっ」

いつもより長いそのキスは 頭をもつとクラクラさせた。

「・・・はあっ」

「・・・ゴメン 苦しかった?」

「ん・・・ちよっと」

飛鳥の首元に顔を埋める。

「・・・お酒ぐらい」

「だから燃も少しにおこすね。」

「んー・・・」

何も考えられない

ただ頭がぼーっとする

それからじめ、鳥の体温いややつこ感を感じた。

## 第59話 お泊り

ドサツ

「・・・んー」

「・・・はあ 疲れた・・・」

あのまま燐はまた眠ってしまい、俺はまたおんぶして運ぶことになつてしまつた。

燐の家へとは思つたが・・・かぎないし・・・

燐は持つてゐだうつけどポケットとかかばんとかあさられたべ・・・  
ないよなあ普通。

だから俺の家に連れてきてベッドに寝かせる。

今日は両親はいない。

なんか・・・どつかに旅行に行くとか行つてた。

結婚記念日が昨日だかで、昨日からどこかに行つてた。

俺も学校休んで来いつて言われたけど文化祭あるじつひつて断つた。

トボボボボボ・・・

コップミニネラルウォーターを注ぐ。

ガチャヤツ

ドアを開けてのぞきこむ。

「すう・・・すう・・・」

燐は寝息をたてていた。

— 1 —

変に意識してしまった自分が情けない。

好きな女が無防備に横たわってて  
しかもこには自分の部屋

西親にしなし

焼たてで家に西新しなしかに泊まつていたてしい

ハ力じせねえの俺」

それでも制服のスカートから伸びる長くて細くて白い足。

そう言つて布団をかけてやる。

「・・・風邪ひくだろ」

「・・・ん・・・ん?」

燐が目を覚ます。

「燐 水・・・飲むか?」

「んー・・・飛鳥ア?」

「うん 僕だよ。ホラ 起きて水飲め

ゆっくり燐が起き上がる。

まだ寝ぼけてる瞳

乱れた頭と服

ピクンとのびが動く。

すぐ燐は水を飲み干してコップを俺に渡す。

「ありがと・・・

「うふ まだいる?」

「ん・・・いい・・・」「あ、ビ」「?」

燐はまだ寝ぼけた目でキョロキョロと辺りを見回す。

「俺の部屋

「・・・飛鳥の部屋へ」ひなだつたつけ？」

「「ひなだよ・・・」なこだ来ただろ やつは寝てんな

「ふあ・・・」

燐が小さくあべじをす。

「今日は泊まつてへか? 明日は学校休みだし・・・今日親いないか  
ひ

つて 親いないのに女泊めてへるか俺は・・・

まあ、こへり燐でも泊まつてへる」とひ

「ん・・・わいつるー

「・・・へ?」

「泊まつてへ?」

寝ぼけたままの田代俺にて。

そりや・・・言いだしつ俺だし・・・ちがう理由  
わけないよなあ・・・

なんてこえる

「うさ いいよ。パジャマとか俺のでこ? さ

「ん・・・全然こい・・・」

「そっか、そんな寝たら夜寝れないからもう寝るなよ」

「うん・・・」

えーと・・・夕飯はもう食べてきたようなもんだよな・・・俺腹い  
っぱいだし・・・

「風呂……寝起きじや無理か 少ししたら入れよ」

風呂

少し危ういことを考えて慌てて首をふる。

バツバカ！！

誰も覗いてしまおうかとか考えてたわけじゃねえぞーーー？

だつだつて そんなことして嫌われたくねえし！！

## 第60話 お泊り2

・・・泊まれ なんて言つんじゃなかつたあああ・・・・・

すでに後悔と罪悪感でいっぱいな胸。

罪悪感・・・まあ、罪悪感。

余計な口走つちまつたつていうか・・・

うつわー・・・ホント びうしょ・・・

「燐 水飲む?」

「ん・・・いい も風呂入らせてーーー」

「あ?ああ・・・パジャマ 洗面所置いとくよ

「ん・・・」

フランフランと燐が風呂のせりへ歩く。

あ、そつか 昔も泊まつたことあるから場所わからだっけか・・・

つて 僕・・・燐が入った後の風呂入んの!?

とはいえ・・・俺が先に入るのはいやだし・・・

シャーツ

シャワーの音がする。

何も考えないように 新一とか克哉とかのことを考ながら洗面所に  
昨日洗ったパジャマを置く。

あ、下着……まあいいや

ふーっとため息をついて洗面所を出る。

「あ、ねえ 飛鳥アーッ

「……何?」

シャワーの音が途切れる。

「湯船つて 入つていーの?」

入つていいの……つて……

聞くなよ……

「え?別にいいけど……」

「んーわかったー」

ぽちゅちゃんと湯船の音。

あーなんかやだ……あー変な感じ

またふーっと息をついて洗面所を出た。

・・・・とつとと寝て とつとと朝になつてしまひこ・・・

はーっとため息をついて天井を見る。

・・・あ やばい・・・

布団・・・じうじゆ・・・

四せとひやわんの分はクリーニングに出しちゃう・・・

うわ・・・漫画とか小説のお約束・・・!?

おこねにおこね 待てよ・・・

高校生の男と女が!?.ふぞけんな!..

「なんか・・・なんかかわりとかねえのかよ!..」

寝袋・・・あるわけねえだろ!..

毛布・・・一年中家は布団派だ!..

びすんだよ・・・

「うわ・・・最悪・・・

何?俺このひむい中床と布団なしのパジャマで寝るってのか!..  
ええ!?.神様って奴は残酷だなあ おい!..

・・・外を見る 真つ暗 寒い おまけに酔っ払いがうるさいでや  
がる。

こんな中・・・いまさら帰れなんていいえないしなあ・・・

とはじえ やっぱ・・・無理だよなあ 一緒に寝るとかってのは（  
お約束のパターン）

・・・しうがねえ 真冬用の上着着て寝るしかねえな・・・

## 第61話 お泊り

「飛鳥……出たよ～」

「え？ あ、うん……」

「パジャマありがと もう起きていけどあったかいよー」

「え、う、うん……」

俺のパジャマはぶかぶかで 肩幅があつてなくて 手が出てなくて  
足も見えなくなってる。

これまた漫画のお約束……だよなあ……

「んじゃ俺入るからー 寒かつたら布団敷いてるから。」

「うん ありがとー」

パタン……

洗面所のドアを閉める。

「うわあ……びしきりなんだよ……

燐の後だとか 色々考える暇もなこよう俺は急いで風呂に入つてすぐに出た。

「……すっげー疲れる

ため息をついて部屋に戻ると燐は床に寝転がつてすーすー寝息をたてていた。

「・・・はー」

人の悩みも知りらずここではまつたくもつ・・・

「燐？ 燐 寝るなー起きろ！ 床に寝たら風邪ひくだろ？」

「ん・・・」

もぞもぞと燐が動く。

いや、可愛いんだけど・・・うん いつもと状況違つから・・・なんか複雑なんだよね

「・・・ホンシト俺のこと男としてみてんのかなあ」

そんなことを思つてしまつ。

たまにああ、前とは変わッちやつたんだ って感じるけど・・・

やつぱり じつこつき不安になる。

俺は 男として見られているのだろうか？ イマイチ不安だ。

「ん・・・飛鳥・・・」

「ホラ起きりよ 髪も乾かさないとー風邪ひかれたらたまんねーし・

・

「ん・・・頭痛・・・」

「ハイハイ ホラー洗面所の棚の上から2段田てライヤーあるし  
！」

「はあい・・・」

フラフラしながら燐は洗面所へ向かう。

俺はぱいじりとタオルで髪をふく。

「一・・・

ドライヤーの音

しばりくわると燐がまだ眠そうな顔で俺のところに来た。

「・・・乾かしたあ」

「ん えーと・・・」

時計を見るといすでに10時をわずかに過ぎていた。

「もう寝るか。ベッド使えよ」

「ん・・・飛鳥は？」

「俺もすぐ近くで寝るから平気」

燐は一人で寝ることが難しいらしい。

いつも寝る時は音楽を聴いてないと眠れない。

その理由は・・・せっぱつ親がいつもいないからかもしれない。

燐はベッドに座る。

俺はすぐしたの床に座つて上着を着込む。

「・・・飛鳥 床？」

「ん 一応マットとかひくけどね」

「・・・風邪ひくよ?」

「大丈夫だよ」

眠そうな やわらかい甘い声。

「もう寝よう」

頭をなでると燐は田をとろんとさせた。

どつかの捨て猫かお前は・・・

なんとなく 香飼つてた猫を思い出した。

どこかへ行つてしまつたけど。

猫は死ぬ時 姿を見せないとか言ひ。

猫は死ぬ時が自分でわかる

人間にも わかつてしまえばいいのに。

・・・って 燐の眠そうな顔から なんか変な話に・・・

「おやすみ」

「・・・おやすみ」

すると燐はすぐに寝息をたててしまつた。

眠つてからもすぐそばに好きな女の子はいて

女の子は眠つて 夢を見てるかもしれなくて

それに 僕が出てるとしたら とか 色々考えてしまつたらなんだ  
かおかしな気分になる。

眠つて 意識がなくなつて

それからも 一緒にいられる

なんだか やっぱりおかしな気分。

ボーッと色々考えてたら燐が寝返りをうつた。

「・・・燐」

名前を呼んだけど 反事はなくて。

寝息だけが静かな部屋に響いてた。

ふーっと息をついて俺も寝てしまつた。

## 第62話 お泊り4

顔に何かがあたって意識が戻る。

「ん・・・」

よく寝た　目の奥がじんわりとした。

目を開けると視界には線が何本がある。

髪・・・?

俺　髪の毛長くないから」「んなとこにないのに」・・・

つまんで離す。

横を見ると燐がすうすう寝息をたてていた。

「・・・燐?」

「ん・・・」

燐は一瞬眉間にしわを寄せたがすぐにまた寝息をたてた。

「・・・ベッドから落ちたのか

くすりと笑って頭をなでる。

長いまつげ　色白　綺麗な髪　細い体

改めて見ると本当に綺麗な体をしていて

その子の「」が好きで おしてその子も俺の「」が好きだとか考えると口元が緩んだ。

半開きの唇に近づくと燐がまた眉間にしわを寄せた。

「んん・・・・」

その反応と並んでピクシとして慌ててもとの体制に戻る。

いや・・・別に つきあってんだし・・・悪い・・・としてるわけじゃねえんだけどや・・・

「・・・ははははは」

これじや 寝てる女の子に何かやましいことしようとしたら男みたいじゃないか・・・って 実際そんなどうやーー。

「・・・やめよ」

なんだか自分が本当にバカに思えてため息まじりに一言吐く。

携帯に手を伸ばし時間を確認すると一時過ぎていた。

横を見ると燐はまだ熟睡中で起きなかつた。

燐の手を握る。

細くて 乾いた手

俺の手よつも小さこの手

起きないかなーと思ひながら寝顔を眺める。

「ん・・・」

やつと燐が田を覚ました。

「おは

ニッコリと笑つて言つと燐はすぐこゝおこへ起き上がつた。

「な、なんで！？なんで私飛鳥と一緒に寝てるのー！え！？手つな  
いで・・・ええ！？」

寝起きで何がなんだかわからないみたいで燐はキョロキョロしている。

「えー？えー？なんでー？」

「アハハッ ビうしたの？」

俺も起き上がつて燐の頭をなでる。

「え？え？ビーしょ・・・覚えてないんだけど・・・

「え？昨日のこと 覚えてないの？」

「お酒飲んで・・・あれ？」

ああ、そつか 酔つ払つてたんだつけ？

「覚えてないんだ？」

「え？ 何が？」

きょとんとしてる燐が可愛くて 僕の頭に悪魔の角が生える。

「昨日燐醉つ払つてやーホンツト困つたよー」

「え？ え？ 何が？」

「何がつて 色々 いやーホンツト 大変だつたなー酔つて眠つて  
さー俺しちゃがなく家に連れ込んで・・・あ～も～そつからも大変  
だつたよー」

「そせは一つも言つてないしね

「え？ え？ え？ な・・・ 何！？ 私何したのー？」

「えへ？ なんだつたつけえ？」

「は・・・ 歯軋り！？ いびき！？ 寝相！？ 思い当たる」とがあります  
がて・・・

燐が泣きわな顔になる。

ああ、この辺でやめとこつ

「うそだよ なんもない

「へ？」

「ちょっとからかっただけだよー 酔つて寝ちゃったのはホントだけど、家には俺が勝手に連れ込んだの。」

「ホント?」

「うん ちゃんと風呂も入ったのに 記憶ないの?」

くすくすと笑うと燐は顔を真っ赤にした。

「だつだつて・・・ホントに覚えてなくて・・・」

「気にしなくていいよ・・・クククッ」

まつたく 可愛いなあ・・・

まだ納得できなつよい出でつとしてる燐を見ながら幸せなため息をついた。

第六三話 お泊り

「エーハルスヘ、帰る?」

「えー・・・おなかすいた」

「ああ やつが忘れてた・・・適当なんぞここ?」

「うん」

・・・頭痛いなあ

ヨーヒとじてると部屋は飛鳥のこむこむぱこでまた暗くなる。

つて あれ?

普通こいつは 女の子が料理とかして女ひつけをアピールするのでは??

うつわ!?

「あ 飛鳥!—私がやるよ!—泊めでもうつたんだし!—」

包丁をワインナーに向けたまま飛鳥が「え?」といひを向く。

「私がやるよ!—」

「え、いこみ座つてて・・・」

「いーのーかして！」

飛鳥の手から包丁を離そつとして 指が痛む。

「・・・ツ！」

無理矢理離そうとしたから指を切つてしまつた。

ぽたつ

白いまな板に赤い水玉が浮かび上がる。

「燐・・・バカか！－」

ビクッ

飛鳥の怒鳴り声に体が跳ね上がる。

「つたく・・・」

ため息まじりにいって飛鳥はどがどか乱暴にどこかへ歩いていつてしまつた。

「う・・・」

痛みとかで泣きそうになる。

絶対 飛鳥あきれた・・・

慌ててしきぎた・・・

「これじゃ 女らしさも何もないじゃんかあ・・・

じわあつと涙が浮かぶと頬があたたかくなる。

「おい? 何 痛いのか?」

飛鳥が私の顔を覗き込む。

「ん・・・ちよっと・・・」

「かして」

飛鳥がまだ少し怒った口調で私の怪我した指を水道の蛇口へ向ける。

ジャー・・・

冷たい水が触れてジンジンと怪我した部分がゆがむ。

「・・・・」

「我慢しろよ」

「・・・・・はあい」

指をそつとふくと飛鳥は持ってきた絆創膏を貼ってくれた。

「ハイ もういいよ。俺がするから」

「・・・・・」めんなさい

「なんで謝るの？」

「だ・・・って 私・・・飛鳥怒りやむつとしたんじゃなくて・・・」

「

言ひてゐる恰好に自分のバカをとか アホをとか くだらなさとか  
いろんなものをいつぺんに感じて 涙があふれた。

「だつて・・・」いつのつて女の子がしたほうがいいのかもつて  
気づいたら・・・それで・・・」

涙が急にぽろぽろ流れ出す。

「燐？」

「ふえ・・・だ・・・つて・・・ずっと なんもできていんだも  
ん」

いつも してもいらつるのは私のほうだ

酔つ払つたりなんかして 世話やかせちゃつたのも私

いつも 困らせるのも私

いつも私はばかりだめで

「「」あんなさあい・・・

寝起きの頭はぼーっとして

何がなんだかわかんなかつた。

飛鳥が私を抱きしめる。

「バツカかお前は 正真正銘のバカだろお前 あほだりお前」

「な・・・なんでえ！？あやまつてゐるのに！ひどい！

「なんでわかんないかなあ？」

「何が・・・わ・・・・」

「俺が燐に何かしてもらいたいって いつ言つたんだよ。好きだからそばにいたいってだけじゃん？」

「で・・・でも・・・」

「でもないだろーが いいんだよ。何かさせたはさせただこいつなる  
んだから」

ぎゅっと飛鳥が怪我した指を握る。

指から手へ激痛が走った。

「な？そばにいんのに 傷つかれたらたまんないし 別に、できる  
こといいんだよ？ 燐のそういうことは知つて好きになつたんだ

から。」

「・・・私の ゼーザーといひ物へ。」

「デジで不器用で常に無防備でボーッとしてて・・・」

「わーーー悪こじばっかじゅんー。」

「そいですッザー可愛このの」

「・・・」

かああつと顔が赤くなるのがわかる。

なんで なんで飛鳥はそいつに」とわざと聞かせるの？

そんな人だったつけ？

「アハハッ 耳まで真つ赤だ」

「な・・・だつだつて・・・」

ニヤニヤした顔の飛鳥の顔が無表情になる。

「・・・」

「あつと皿をつむると想通り 面でやわらかこものが当たる。

「ん・・・」

いつも セレーヌは私のせいで

声をあげちゃうのも私のせい

でも 自分からするのなんて恥ずかしいし・・・

なんかしたいよなあ・・・私から・・・なんか・・・

料理は・・・できなことはないにせども怪我するし・・・やけど  
とかも・・・

洗濯は・・・洗濯物よく風で飛ばされて汚れちゃうんだよねえ・・・

なんか なんもできないなあ 私・・・

## 第64話 お泊り最終回

結局私はずっと椅子に座つて待つてた。

「ねえ そういうえば9月に秋祭りあるね」

「んー？ ああ、そうだなあ・・・祭り多すすぎ」

「・・・一緒に行く？」

「えー？ 秋祭り・・・なんか祭りってみんな一緒にだし 行かなくて もよくなきか？」

そういうえば飛鳥は毎年祭りに関して積極的じゃないし 決定しても 乗り気じやない。

「・・・んー」

「祭りに行かなくてもやー どうか行けばいいじゃん。」

「うん それでも別にいいけど・・・」

「祭りじゃなくても一緒にいいやいいだり?」

なんか そういう言い方は腹立つ・・・

事実だけど そんな『そつすりやいいだる』みたいな言い方 いい 加減っぽいし・・・

心中でぐちぐち言つてると机にゆげを放つ「飯と納豆の白いパック わかめの味噌汁と玉子焼きと油でつやつやしたワインナーが置かれる。

「ハイ ウィンナーあるから納豆無理に食べなくていいよ」

私は納豆が嫌い・・・

「ん・・・ありがと・・・」

ぼーっとした頭の中も「も」と食べだす。

「味噌汁 熱いからわま・・・つて」

「あつひー。」

飛鳥がいい終わらないうちに私は味噌汁に口をつけていて、舌に熱い味噌汁が触れる。

「熱いい・・・」

「だから言おうとしたのに・・・」

「うひー・・・舌ひりひりするよう・・・」

「大丈夫大丈夫 ホラお茶！」

飛鳥が慌てて冷蔵庫からお茶を出す。

「うん・・・アリガト」

しみる～！

なんかひりひりするし～！

そしてその後 私は飛鳥と手をつないで家へ戻った。

結局秋祭りは行かないことになつてしまつて。

そして 休みも明け 学校・・・

「・・・ねえ こんなこと聞るのはなんなんだいせーあ

教室に入つての私の第一声。

「 なあに？」

夢乃がにこやかに言ひや。

「 メンタるひりつたーー！ 生き物は何？」

そこには克哉が夢乃のそばにこぬくせに背を向けて体操座りしてゐる。

何がしたいのか・・・

「さあ？私には見えないんだけどねー」

夢乃は明らかに作り笑顔で言つ。

「燐！俺の話聞いてくれるか！？」

克哉が急に立ち上がりつて私に言つ。

「はー？聞きたくないんですけどー」

「聞いてくれえええーーー！」

「ハイハイ・・・で？何があつたわけ？」

克哉の話によると

克哉は朝っぱらから夢乃に告白

「夢乃！好きだ！本気で好きだ！俺とつきあえー！」

夢乃はキッパリと

「無理 いやだ 絶対いやだ」

しかし克哉は？

「つまぬってくれなきゃ死んでやるー。」

さすがの夢乃もこれには少しくるかな?とか思つてた克哉に夢乃は・  
・

「あつそ  
死ねば？」

冷たい

ひでえ！本に死んでやる！死んで化けて出てやる！！」

専用は筆箱から机の上をたして手首にさすと、

「バカね。それぐらいいじや死なないわよ。そのはさみ昔から使つてゐやつでしょ？さびてゐじやない。それで死ねるとでも思つてゐの？」

卷之三

一本氣で死ぬ氣なら そこから飛び降りなさいよ

そう語つて夢乃は窓を指差したそうです

「ひどくない！？本当に死ぬよ！」

「そりや・・・アンタが死んだやねつたんがいけなかつたんじやないの?」

「夢乃おおおおーーーー！」

「……………」

ため息をついて夢乃が立ち上がる。

そしてぐるうと回れ右をして荒哉を見下ろした。

「あのね 私はアンタの「」となんてぜんつぜん！好きじゃないしつれあひ氣なんとかひかへりなこーつきまとわれてもウザイだけなの。消えい」

夢乃はあくまでにつゝりと微笑みながら言つ。

「そつそんな  
だつて俺・・・  
」

「まだいい?」

夢乃が無表情でそういうと克哉は黙る。

「アンタなんてね ウザイし諦め悪いからね 私、大ッツ嫌いなの。

L

夢乃は無表情のまま、克哉を見下ろしてハツキリと言つた。

大嫌い

それは 私でさえも夢乃から聞いた 初めての言葉だった。

夢乃が嫌いというものは人ごみだつたり教科だつたり 食べ物だつたりするわけで。

こんな風に人に それも面と向かつて[冗談も一切なしで]言つことなんて 初めてだつた。

## 第64話 無理難問

「あんた一克哉 そろそろ諦めたり?」

「まだ暗い雰囲気の中じる克哉に声をかける。

「諦めろ・・・って 簡単に言つたよおお」

「夢乃がウザイ生き物ほど嫌いなの あんたも知ってるでしょ?」

夢乃是セールスマンだとか 学祭で近寄つてくる人達が嫌いでいつも冷めてる。

声をかけられても完璧シカトでそのまま通り過ぎてしまつ。

そりやあ 克哉の気持ちはまったくついていくほど想像できなわけじゃない。

ずっとずっと大好きで隠し続けてたのに ちょっと?表に出しただけでここまで冷たくされるなんて。

わいとすくべショックで悲しいだらう。

だけど こんな風になるまでしなくとも・・・いいんじゃないかなあ とか思つてしまつ。

「なああ 梦乃おー つきあつてくんなくていいからをあーもひ少しやせしく接してくれても・・・」

「へんなわー 黙れ 死ねんじゃなかつたの？早くしなわーよ」

まあ、いつも冷たく人でなしの「」とく突き放せる夢乃もす「」にけどね

「あのセー・・・克哉の問題はセー・

「あ、克哉君！今日の放課後カラオケ行かない？」

「行く行く！！！」

「…・・・やの間のところが違つてゐただと申つよ

私が言ひと克哉はため息をつく。

「だつてさー夢乃が相手してくんないなら他の子といふしかないじ  
やん！」

「アンタみたいな女好き・・・夢乃とあうわけないじゃん！」

「けどさー好きなのは夢乃！女の子達はあくまで遊びだよ！」

「その！遊びがダメなの！わかんないかなあ！？」

「わつかんないね！女の子ってみんな可愛いじゃん！その子等と遊んで何が悪い！夢乃と両思いになつたら大事にするけどさ」

「んにゃ ん！」

夢乃は冷たい目で私と克哉を眺める。

クラスのみんなはグループで話したり やっぱりまだ外に行いつつする人がいる。

やっぱりみんな関わりたくないらしい。

このままじゃ・・・まさしくよねえ やっぱりさすがに。

「だつてさ 夢乃。」

「じゃあ・・・」

カタンツ

夢乃が克哉を見て立ち上がる。

克哉は夢乃を見上げた。

その瞬間 教室中が静かになつた。

「これから言いつことをすべて達成できたら 考えてあげるよ」

「な 何!? 夢乃のためならなんでもするぞー！」

夢乃が言つたのは 克哉には無理じゃないの?といつ条件だった。

女の手と喋らない 触らない メールしない（1ヶ月間）

毎朝ジョギング10km（1ヶ月間）

次の試験で全教科70点以上とする

明美の飛び蹴り10発連続でくらい、その後10秒以内に立ち上がる

「これができたら 考えてあげる」

その時全員が思つたはずだつた。

『絶対無理だ』

『ありえない』

『克哉にできるわけがない』

つて。

でも克哉はぱあっと唇に顔をしてみせた。

「本當か…？これができたりつかあつてくれんのか…？」

「つきあつとは言ひてない。ただ・・・まあ、いい返事をできるだけだせりてことよ」

すると克哉は狂喜の悲鳴を発しながら教室を飛び出した。

「・・・おじ夢乃 いくらアイシがウザイからって・・・無理難問あざむだり」

新一が夢乃の頭を撫でて言ひ。

「・・・無理?」

夢乃はくすりと笑つた。

「無理でいいのよ。私がアイシとつきあつことが無理なんだから。」

確かに

無理な条件を克哉に押し付けても克哉はあつとそれに挑戦するだらう。

だけどそれはあくまで『無理な条件』だから、克哉はあつと達成できない。

しかし 達成できなくとも克哉は夢乃を諦める」とはない。

だって 条件ができなかつたら一生チャンスはない と夢乃が言つたわけじゃないから。

それに それで諦めたら『所詮その程度』と思われても仕方ない。

そうなれば必ず克哉は諦めずに夢乃につきまとひ。

そして夢乃がまた無理な条件を押し付け・・・

その繰り返しだ。

それは間違つてないと思ひ。

きつと克哉はへらへら笑つてするだらうし みんなも黙つてそれを見る。

克哉は達成できなくても夢乃是条件を出すからきつと自分が意中にあると思つだらう。

そうなれば 表向き 傷つく人はもう出てこない。

けど へらへら笑つてる克哉

それを 夢乃是どんな気持ちで眺めるんだらう?

どんな気持ちで 無理な条件を言つんだらう?

それは私にとても想像できない感情でしかなかつた。



## 第66話 無理難問2

無理だとはわからきつていっても みんな興味津々に克哉を見ていた。

その日克哉は不気味なほどおとなしかった。

授業もマジメに受け 休み時間は予習復習

もちろん一度も女の子と喋つてはいないし女の子が近くを通ればぶつからないように失礼なほど避けていた。

当然普段から遊んでた女の子達は『ばかなことしなくていいじゃない』とか話しかけたりしたけど克哉は全部無視してた。

そのおかしな変化にみんな驚いた。

「ねえ夢乃 克哉本気だよ？」

いつもなら廊下に出てしまつ華穂が5時間目の後の休み時間 珍しく夢乃に話しかける。

「・・・あつや」

夢乃は無表情のまま そっけなく答えた。

その横顔からじや夢乃の感情は読み取れなかつた。

「なあ克哉 本気か？」

要がどうでもよむかうな顔で言ひ。

「んー？何が」

一瞬要を確認して克哉はまたノートを見る。

「お前がテストで70点以上なんてとれるわけねえじゃん。しかも次の試験つつたら期末だろ?」

期末試験は全教科の試験。

おまけに克哉は毎回成績は平均ギリギリ。

中学でも9教科のうち6教科 平均以下をとったことがある。

そんな克哉が全部70以上？高校の試験で？

ありえない

そりやあ・・・本ッツツ氣でがんばればなんとかなる可能性はないわけじやないだらうけど・・・

今まで見てきた私にしてみればゼロに近こと思つてしまつ。

「・・・・・」

克哉は黙つてシャーペンを動かす。

「ホラ、こゝに違う。なんで $500 \times 2 \times$ が $5200 \times$ になる? 高校ど  
ころか中学 つーかこれ間違つてんのかけ算だから小学生が間違え  
るレベルじゃねえか」

「つむせえな ちょっと間違えただけだよ

克哉がため息混じりに囁く。

その可愛げのない態度に要はカチンときたらしくため息をついて新  
一のところへ行つてしまつ。

「アイツ よく中学で数学平均点保てたな」

ボソリと要が言つ。

「まー・・・一応あれば本当によいことと間違つたつてだけってこ  
とじやねえの?」

新一は楽しそうににっこりしながら眺めてゐる。

「・・・無理に $1000$ 円」

「んー・・・成績以外の条件なら達成に $1000$ 円」

すでにかけてる要と新一。

しかも 2人共無理に ジヤん。それつて。

「ねえ飛鳥 バツの悪いつ。」

克哉の光景を一人で眺めてた飛鳥の服をぐるぐるひつぱる。

「んー・・・?俺?まだ賭けるとこまでこいつない」と悪いつ。

「賭けの話じゃなくてー。どうなると 悪いつ。」

「ああ~どうだろーね 克哉は本氣で夢乃のことが好きだし・・・  
ありえる話だとは思つよ~。」

「えーー!~なんで? だつて克哉だよー。」

「・・・お前それ失礼だろ」

「だつてそうじやんー。」

「さーね けどござとこいつ時好きな女のことがあればできない話じ  
やないかもな 勉強すりゃいいんだし」

「それは・・・飛鳥がそこそこ頭いいからなんなんだよ・・・」

ボソリと云つと飛鳥はくすぐす笑つて私の頭を撫でる。

「どうだろ?俺は焼が別れるつて言こ出したら試験で全部100点  
とひつて約束できるよ」

「な・・・そっそんなん 別れるとか言つわけないじゃんー。」

「・・・お前 シツ「//」といふやしない・・・俺今かなづくさ

「これでいいんだだけじゃん。」

## 第67話 無理難問3

放課後 いつもなら複数の女の子達と帰る克哉。

でも今日は要と新一と帰つていった。

「焼 帰るぞ」

「あ・・・うん」

飛鳥が私の頭を撫でる。

「どうも 子ども扱いだなあ・・・

「ねえ飛鳥 今度の期末なんだけどねー」

「ん?」

「期末の2日目がハロウィンなんだよ」

「あー、うちの学校の期末微妙な時期だよな。」

「うん お菓子用意しててね」

「・・・考えとく」

教室のドアを開けると克哉はすでに登校していた。

しかも朝から勉強。

すこい気合だなあ・・・

「ねえ夢乃 本当に克哉が全部達成したらつきあいの?」

「・・・考えるとは言つたね」

「・・・ふうん」

今は考えもしないってことかな

「ねー克哉!」

私が克哉の後ろ姿に言いつと克哉はひかりを見てすぐまた机のまづを向いた。

「な・・・無視!?」

「違うよ」

要がくすくすと笑いながら私の横に来る。

「一応燐も『女の子』だろ?」

「あ・・・そつか」

「ありや 本氣だなー」

ニヤニヤしながら克哉は夢乃を見る。

夢乃は相変わらず無表情。

だけど 目線の先は克哉の背中だった。

もちろんそれは恋する乙女の表情じゃなし 当たり前だけどそれは冷めた視線。

『ばかじやないの?』 とでも言いたげな。

夢乃は 嫌いな人にはとことん冷たい人だから。

「そういえば 早朝マラソンしてるのかな?」

「してるよ」

これに答えたのは今登校してきた明美だった。

「毎朝見かけるよ。道場の前通つてるから。」

「・・・ふうん」

「毎朝汗だくで ゼえゼえ言いながら走つてるよ。」

明美は横目に夢乃を見る。

もやうひん夢乃是表情を変えないし何も言わない。

「・・・克哉」

教室中が静かになる。

だつて 克哉に話しかけたのは 夢乃だから。

克哉も驚いた顔で夢乃を見る。

「克哉がどんなにがんばっても 私は克哉のこと好きにはならない  
よ。」

「・・・」

克哉は何も言わない。

女の子と喋らない の条件の女の子に夢乃が入ってるわけじゃない  
だらう。」

「・・・私は 誰かががんばる姿を信じるよつな人じやない」

「信じなくてもいいよ」

ようやく克哉が口を開いた。

教室中にいたみんながそちらに注目する。

「信じなくても別にいいよ。信じたくないのに信じろなんて言わな

い。」

「……だつたらなんでがんばるの?」

「お前のことが好きだからに決まつてんじやん

「……その言葉が信用できなこのよ

「なんで?」

ようやく夢乃の表情が変わる。

眉間にしわを寄せて 何かを異様に氣味悪がつてゐるような顔。

「男の言葉なんて 信じたくない。」

「なんで男限定?」

「……じゃあ男じゃなくともいい。」

「ちやんと説明しろよ 意味がわからない」

「克哉に説明を聞く権利はないよ。私も話したくない」

克哉はため息をついてまた机のほうを向いた。

夢乃もため息をついて壁によりかかった。



## 第68話 無理難問4 夢乃

今でも 覚えてるんだ

鮮明に すべてを。

泣き叫ぶ母親 幼い私 困った顔をする父親

2人の間には1枚の紙が置かれていて

あの頃の私には理解できなかつた物。

それは離婚届だつた。

そんな夜を私は何度も見た。

だけど 男は女の涙に弱い それは本当のことだった。

父親は 異婚の話を持ち出しあるがハンコは押さなかつた。

それでも あの日は訪れた。

あのままで続くはずがなかつたんだ。

父親も 母親も。

あの家庭が あんないぢやぐぢやのまま 外見だけしつかりして

続くわけが。

偶然じゃない 必然。

父親は荷物を持って家を出て行く。

泣き叫ぶ母親

父親はそれにはもう 振り向かない。

泣き落としなどもうきかない。

あの時 言つてやればよかつた。

なんでもいいから 私から何か。

子供の私が 何か言えればよかつたんだ。

小学生だった私は ただ静かに涙を流すしかなかつたけど。

無力なひきとめの言葉でもいい

ただ傷つけるだけの言葉でもいい

子供なら子供らしく 偽善を並べた言葉でもいい

子供なら子供らしく 大声で泣き叫んだってよかつたんだ。

だけど 私にはできなかつた。

もちろん父親の幸せを願つたりはしていない。

私みたいな子供1人を幸せにする方法すらわからなかつた大人の幸せなど 願つわけがない。

母親の不幸を願つたわけでもない。

だつて 母親を不幸にして 何になる?

わからない

今でも私にはわからない。

私の心はまだあの頃のまま止まつてる

だから 男なんて信じない

信じて あの頃みたいになるのは嫌だ

きっと 私は裏切られる

捨てられる

逃げられる

だから 信じないの

克哉のことば信じてもいいかな って思つ。

昔から一緒にいて

女好きだけど 男の中では一番まともに信用できたかも知れない。

だけどね 信じられないの。

ガツカリさせられるのは『めんな』。

またあの頃みたいになるのはもつじごめん。

めでたしめでたし あの頃の私が拓けた  
い

アラカマヒコのだらうか?

## 第69話 無理難問5

「ねえ飛鳥 期末・・・何か賭ける?」

「えー? だつて燐が勝つに決まつてんじやん」

うそばつかし 飛鳥のが入試の成績よかつたの 私知つてゐるんだからね?

「いいじゃん! 何かしない? ね?」

「・・・んじやーお前が勝つたら帰りにアイスでもおいつでやるか」

「ホントにー? ジャあ飛鳥が買つたら・・・何? ある?」

「・・・」

しばらく沈黙が続いた。

不意に飛鳥が顔を真つ赤にした。

「飛鳥?」

「あ・・・いや なんでもない!」

「? ? ?」

「・・・あのや」

「何? 早く言こなよー」

「…………キス しちゃだめ?」

「は?」

小ちこ声で なにやひ・・・ひつたけど・・・

「こや、なんでもない!」

飛鳥はくもつと私に背中を向けた。

「何ぞ 別に試験で賭けなくつたってしてもここのは

私がくすつと笑つてひつと飛鳥はひかりを向いて私の顔をじつと見る。

「・・・何?」

「・・・俺からじやなくてや!」

「へ?」

「お前から。したことないじやん

「・・・えええええ!?!?」

私からキスー? やだよー。そんなの恥ずかしいもん! -

「こ いやー!」

「じゃあ、お前が勝った時の物もう少し聞このこしてもらお。

「……じゃあなーアイス1週間毎日1個買つてよ」

「んーーーまあいいけど? 1週間で毎日1個ならな。」

「やつた 負けないからね! 勉強しよーーー!」

「俺も勉強しよーーー!」

飛鳥が『機嫌に』。

「あ、お前言つただから今言つとくナビ『やっぱなし』はダメだからな。そしたら罰ゲーム」

「う・・・・言つたんだなあ・・・・」

「言つてもなしにはしないからな」

「ほーほー・・・・」

私がため息をつくと服を誰かにひっぱられる。

やつらを見るとかこにいたのは華穂。

「華穂? どうした?」

「あのねー克哉がすりこーとこなつたよー

「へ？」

克哉の席のほうを見ると克哉はいなくなつてた。

おかしいな・・・勉強してたんじやないの？

「え？」

「あのねー明美のところに行つたの」

華穂がにっこりと微笑むから、すぐに克哉がどうなつたのかわかつた。

「・・・バカだねえ アイツも。」

横で飛鳥があきれたよつぶやいた。

「ね 飛鳥は私のためなら明美に殴られてもいい？」

飛鳥に言つと飛鳥はきょとんとした後

「当たり前じゃん で？ 克哉は？」

くわいと言つたけど 飛鳥の顔が赤いのはわかつた。

「んとねー保健室」

華穂がくすくす笑いながら言つた。

私は飛鳥と華穂の手を握る。

「んじや 保健室行こー。」

そう言つて2人の手をひいて 私は教室を出た。

「うよ・・・燐一離せ!」

後ろで飛鳥の声がしてぱつと手を離す。

「あ、『めん』『めん』つい・・・」

「いや 謝るこたねえけど・・・」

飛鳥が顔を赤くしたまま言ひ。

「あー 飛鳥照れてるー」

華穂が飛鳥を指差して笑つた。

「失礼します・・・先生 克哉は?」

保健室の先生に言つと先生は困ったような顔をしてベッドを指差した。

そこには顔をゆがませた克哉が横たわっていた。

「克哉 大丈夫？」

私が言うと克哉は目を開けたが黙つたまま。

まだ『女の子と喋らない』を貫いてる。

・・・と すると

もしかして 明美のけりをくらつた後に 立ち上がれた・・・の?

「・・・ オイ 克哉 大丈夫か?」

飛鳥が言つと克哉は口を開く。

「大丈夫じゃねえよ・・・あの野郎 ようしゃねえな・・・」

「当たり前だ。明美だぞ?んで どうだつたんだ?結果は」

「・・・・・ 4秒」

克哉は小さな声でぼそりと言つ。

4秒で・・・立ち上がった?

『あの』明美の飛び蹴りをくらつて!?

「すゞいじゃん! 克哉! !」

「よかつたな。んで 夢乃は?」

飛鳥がキョロっと保健室を見るが夢乃はいない。

「・・・・蹴りれる前 呼び出して・・・田の前でやつたんだが・・・  
・俺が保健室に運ばれてる時にどうか行った・・・」

あーあ・・・夢乃・・・

「ま、これで条件一つは完璧クリアだろ? ジョウジさんだろ?」

「・・・・試験とランニングと・・・女・・・・最悪」

「お前 本当に女好きだったのか?」

「本当にっていうか・・・夢乃まではこかないナビセ やっぱ女って可愛いじやん」

「わづかなあ?」

「・・・・テメヒにや燐がいるからだうが 全然振り向かない好きな女と黙つても近寄つてくる好きではないが可愛い女 どっちのが楽で乐しこと選う?」

克哉が震えた声で言ひ。

そりゃあ・・・夢乃見てたらホントかわねえ・・・

「まあ・・・まあ そりゃあ・・・選つよなあ

飛鳥も諦めたよつて言つてた。

「お前は燐がすぐに振り向いたから運がよかつたよ。俺なんて ずっと好きだったのにこの有様だよ」

「ゆっくりと克哉が起き上がる。

「・・・・・

苦しそうに顔をゆがませる。

「・・・・・」んなんで朝走つたりなんかできやしねえ・・・・

「大丈夫か？お前・・・・

「大丈夫なもんか 全身痛Hよ。特に腰と肩を思い切りやられたからな・・・痛すぎ・・・・」

「明美も容赦ねえな」

打撲痕を見て飛鳥が言ひ。

「まさか明美もお前が4秒で立ち上がれるとは思ってなかつたんじやねえの？」

「・・・・・ 女の友情つてのは恐ろしいな

克哉が力なく言ひ。

「は？」

「明美が本気で俺を殴るなんて 夢乃のためだろ？」

「まあ・・・そりゃあ・・・」

「そんなに俺 信用ねえのかな」

明美は 自分に言い寄つてくる野や明らかに悪いことをしてくる人ぐらいしか本気で殴らない。

後は試合とか・・・練習とかで。

なのに 特に悪いこともしない克哉を「こんなに殴るつていい」とは 夢乃のため。

簡単に言えば 明美は夢乃と克哉がつきあいつてて対戦なんだ。

そりゃあ 私だつて・・・つと 「これはいえないんだけど・・・。

克哉みたいな女好き 夢乃がだめなパターンだよ。

若い女と逃げた父親

そんな父親とかぶつたつてしまふがないと思つ。

浮氣なんてされた日には どんな男とも関わらなくなつてしまふか

もしれない。

そう思つと 私だつて · · · ·

## 第70話 トライアの溶ける音 夢乃

「克哉 明美の蹴り受けて4秒で立ち上がりたつてよ  
噂を聞いてすぐに報告に来たらしい。

奈央がニヤニヤしながら私に言った。

「ふう・・・ん・・・」

「どうすんの?」アイツ 全部できけやつかもよ?」

「知らないよ」

「知らない・・って できたらつきあつんじゃねえの?」

「つわあつとは言つてないよ? 考えるつて言つただけ」

「・・・それ ずるいだろ。」

奈央があきれたように言ひへ。

「ずるくて何が悪い?

この程度 タイしたことないでしょ?」

人を平氣で裏切るほうがずっとズルイ。

「・・・別に」

「まあ、夢乃がそういう風に考えてる」という 克哉にだつてわかつてゐるはずだけどね」

それでも 頑張る意味がわからない

言つたはず そんなに頑張つても私はつきあつ氣はない と。

それでも 頑張つてる克哉が理解できない

愛は見返りを求めない?

そんなのふざけてる

人間 損得なしに動くわけがない

そういうこと言つのは偽善者でしかない

冷めた考え方かもしれないけど それは事実。

克哉はあんなになつて 何を求めてるの?

私が貴方を信じるわけがないでしよう?

それとも何 周りから同情でもされたいの?

それではまた 女の子からの人気を集める氣でいるの?

どうあれ ふざけてる

明美の蹴りなんて 下手したら病院行きだつてのに・・・

第一・・・・・・・

私はくるつと奈央に背を向けて 保健室へ向かつた。

奈央がついてきていのを確認して 私は保健室に入る。

そこには先生の姿がなくて 燐と飛鳥と華穂 それからベッドに克哉がいた。

4人共驚いた顔でこちらを見る。

まったく そんな顔されてもすました顔してる私の身にもなつてよね。

「大丈夫なの？」

私が言うと克哉は小さく頷いた。

「これぐらいなら 治る」

「・・・あつそ」

近くにあつた小さな椅子に座る。

「なんでもござれでするわけ？」

私が聞くと克哉はまたきょとんとした。

「前にも聞かなかつたか？それ」

「・・・・・」

「夢乃のひと好きだからーひとつたよなあ？」

克哉が燐達に同意を求める。

燐達は困つたよひに笑つていゝまかわいとしている。

「それが信用できないんぢやない」

「・・・なんで？」

「私のどこのを言つてゐるのか理解できない。私  
うなことした覚えないよ？」

「・・・それを聞かれると俺は正直困る」

困る？

それは いえないとこと？

なんだ やつぱりその程度か

どうせ・・・

「だつて 僕だつてわかんないんだし」

「は？」

「あのなあ 僕はモテるんだぞ？黙つてたつて女は寄つてくる…夢乃ほどじやなくともいい女なんていくらでもいるんだ！好みの女なんかいっぽいいる！」

開き直り？意味わかんないし…

バツカみたい…私 何聞いてんだろう

「…なのに 前じゃなきやだめなんだから困るんだよ

「…はあ？」

「何人女と一緒にいたつて 女ど二こつたつて 何したつて どうも満足しない どうも疲れる」

「…」

「やうなるとどうしてもお前の顔が浮かぶんだよ

・・・それは 結局迷惑な話よねえ

「俺だつて お前以外の女でいいならどうへんてお前なんてほつしてゐよ」

ギシッ

克哉がベッドから起き上がりつて私の顔をじっと見る。

「お前以外の女なんていらねえんだよ　お前しかいらない」

「・・・」

勝手に　私の許可なく

私の目から涙が流れた。

克哉が驚く。

克哉だけじゃない　他の3人もぎょっとしてゐる。

「ゆ　夢乃！？な　なんだよ！俺なんか悪い言つたつけ！？なあ飛  
鳥！え！？え！？夢乃！？」

「・・・バッカじゃないの？」

田代「じー」とこする。

それでも涙は止まらない

「ゆ　夢乃？」

燐も心配そうに私の顔を覗き込む。

「・・・いつか　捨てるんでしょう！？」

「へ？」

「どうせこいつか私のことなんて捨てて 他の女のところに行くに決まってるのに・・・なんでそんな無責任なことこらぬのー?」

「はあ?」

克哉のマヌケな声

「だつて そりゃない!」

「なんで俺がお前のこと捨てるの?」

「男なんて・・・そんなんじゃないのー?」

「夢乃ーーー!」

克哉の怒った声が響く。

驚いて克哉を見るとやつぱり怒った顔してゐる。

「ふーわけんなーーー今まで父親ひきずつてんだよーーー!」

「だ・・・・つて・・・・」

「俺とお前の親父は別の人間なんだよー同じじやねえーあんな奴と同じなわけねえだろーー!」

克哉と お父さんは違う

どこかでわかつてた

だけど 昔の私がそれを拒否した

また 傷つきたくないくて

同じ思いをしたくはなくて

全部 無理矢理遠ざけようとした

「頼むから・・・ひきあんのやめてくれよ・・・」

「・・・ひひ」

「俺とお前の父親は違つ だからと 信じてくれよ」

克哉の手が私の顔をつつむ。

大きな手

あの頃のお父さんも 同じように私を宥めた

だけど違つ

手の感触も 顔にかかる息も 瞳も

全部 お父さんとは違つた

「・・・ごめん・・・なさい・・・」

涙が床に落ちた。

ポタッ

それと同時に、トラウマの氷は溶けてなくなつた。

あの頃から考へると、私は初めて男といつ生き物に対しても『信じよう』と思いついた。

その人に対して、謝つた。

朝私は軽やかな気分で教室のドアを開けた。

一五四

が  
しが

あ・・・あれ?

荒哉はまた教室の隅でいじけてゐる。

それを夢刀達はあきれたよ、は眺めてる

夢刀（あわは）・・・

いや 烘きどけたほんがいいそ」

升鳥丸言二

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

克哉か叫ぶ

うるさいわねえ  
勝手に期待しないでよ氣持ち悪い・・・

「だつて！夢乃が人前で泣いて謝つたんだぞ！？普通期待するだろ

「…」

克哉が新一に同意を求めるとき、新一はシカト。

まあ、確かにあれはなんか…期待させる雰囲気ではあつたし…

「…1ヶ月 頑張りなさいよ」

夢乃がボソリとつぶやくと克哉は嬉しげに笑つた。

夢乃が 克哉への接し方を変えたのは みんな気づいた。

夢乃は夢乃なりに 何かに納得したのかもしないし  
もしかしたら

克哉を信じ始めたのかもしない。

「燐！要と華穂が怪我して保健室にいるんだってさー…」

休み時間 私に大きな声で知らせに来たのは 奈央だつた。

「・・・へ？怪我？」

「なんか要が華穂をかばつたとかで・・・」

私と奈央は保健室へ向かつた。

「失礼します・・・要と華穂・・・いますか？」

保健室の先生はいなくて そこには2人で長いすに座つてゐる華穂と要だつた。

「おーどりしたよ2人して」

要が平然と言つ。

「へ？怪我・・・したつて聞いて来た・・・んだけど・・・？」

「ああ、たいしたことねえよー。」

要が笑いながら立ち上がろうとすると華穂が腕をつかむ。

「つてええ！――？」

要が急に大きな声を出すから私と奈央はビクリとして後ずさり。

「歩いちやだめ…！」

華穂は涙目で要に言ひつ。

要はため息をついてまた椅子に座つた。

「何があつたわけ？」

私が聞くと華穂は急に泣き出した。

「「めんなさい…」

「か・・・華穂が謝ることじやねえよー。」

要が華穂の頭を撫でる。

「え？ 何？ どうしたわけ？」

奈央が聞くと要がこちらを向く。

「いや・・・一緒に教室に戻つてたんだけど・・・途中で華穂が上級生にぶつかつてバランス崩してさ。俺が支えようとしたんだけど・・・それで俺までぶつかつてバランス崩しちゃってさ」

要があははつと大きな声で笑う。

「はあ・・・それで？」

「結局2人して階段から落ちちゃつたつてわけ」

「しかも要バカだから私がばって落ちたんだよね・・・」

「や、あれはたまたまだつて・・・」

つまり話をまとめて箇条書きこすると・・・

華穂が上級生とぶつかる（バランスとくずす）

華穂を支えようとして要が手を伸ばす

その直後要も上級生にぶつかりバランスを崩す

要は女の子の華穂をかばおうと自分が下になり2人でぐるぐる転がりながら落下

2人共打撲・ねんざなどの怪我（要のがひどい）

「要・・・大丈夫なの？」

私が聞くと要は「まかすように笑った。

「あー、まあ・・・右手がちょい怪しいかも・・・後全身打つてさ結構痛い・・・」

「だから!なんでかばつたりするのかつつてんのーバカ!ー?」

「あのなあ 僕だつて咄嗟のことだつたからさあ・・・もつ過ぎたこと言つなよ」

「・・・・・・・・

華穂が「じじ」と皿をこする。

「・・・・こつたモー」

私が要の頬に触れる。

頬はすでに赤くはれ上がつていた。

「あ、ちゅうとうつたみたいだな あんまし痛くねえんだけど・・・

」

ガラツ

保健室の先生が入つてくる。

「要君と・・・一応華穂さんも。病院行きましょう。」

先生が私達なんて見てない みたいな表情で要と華穂をまっすぐ見る。

「え? 先生 大丈夫だつて・・・病院なんて・・・

「貴方のほうが重病なの。保護者には後で電話するから・・・

「電話なんてしないで! !

声を急に荒げたのは 華穂だった。

「華穂・・・?」

要が心配げに華穂を見下ろす。

「あ・・・ち 違・・・ナリジヤなくしてー。ナリシマドおおおナリジヤな  
いっていうか・・・」

あ

違つ

うやつこてる顔。

何か ある顔。

「・・・とにかく 病院に来なさい」

華穂と要は病院へ連れて行かれた。

## 第72話 華穂とレントゲン室（要）

病院のにおい

初めて見る人間の顔

じつと俺の目ばかり見る医者

病院つていうのは 大嫌いだった。

「・・・だから たいしたことねえつてば」

「いいから レントゲン撮るの? な?」

医者が俺を宥めるよ! 云々。

一緒にいた先生と華穂が笑い出す。

つたく 笑い事じやねえし・・・

「じゃあ・・・江田さんからこしましちゃうか」

医者がにっこりと愛想笑いで華穂に云々。

「はーい 」

華穂はにっこりと微笑んでレントゲン室へ向かっていった。

「だからーたいしたことねえからーレントゲンとか金かかんじゃん

「！」

「お金の問題じゃないだろ？？」

「金かけてレントゲン撮つて？なんともなくて？んなの医者の好都合だろ！」

俺は医者というものが嫌いだった

小さい頃から

病院のにおいも 初めて見る人間の顔も 注射で泣き叫ぶやかましいガキも 話しかけてくるじいさんばあさんも

みんな嫌いだつた。

でも 医者が一番嫌いだ。

だつて・・・

「とにかくー華穂のが終わつたら俺は一緒に帰るー。」

「ハハハ 悪あがきはやめなさい」

子供でも宥めるような医者の顔に余計イラだつ。

「つたく わかったよー・レントゲンといこいんだろ？がー。」

「なんだともねえんだー！」

俺はすかずかとレントゲン室へ向かった。

レントゲン室がどこかなんて聞かなくてわかる。

最近の病院つてのは金かかってるところもあればかかる。  
もあって。

この病院は・・・かかってんな そこれい。

で、なんでわかるのかつつたら

頭上には小さな看板。

ここは病院だつづーのにデパートのトイレの場所案内みたいな看板  
がある。

「こりはだいだー！」

俺は買い物しに来たわけでもトイレに行くんでもねえーー！

「めんどくせーーー！」

ぼやぼや言しながらレントゲン室としっかり書かれた部屋を開ける。

ガチャヤツ

「あ」

•  
•  
•  
h?  
.

華穂のにじつた声が耳についた。

顔をあけるとそこには

一か  
・  
・  
・  
なめ?  
「

顔のひきつけた

## 下着姿の 華穂。

「・・・な・・・ひえんういっぺわじよおつせじよかー!?」

バタン！――――――――――――

声にならない悲鳴をあげて俺はレントゲン室のドアを閉めた。

・・・はあ！？

な なんで！？なんで下着！？華穂！？え！？！？！？

頭がこんがらがってそのうち俺は冷えた秋の床に座り込んだ。

それでも心臓だけはやかましく暴れてて

や、心臓だけ じゃなくて

体全体が沸騰したように熱くて 心臓のようにバクバクしてた。

ため息をついてそのまま下を向いた。

しばりくすると 顔を赤くした華穂がレントゲン室から出てきた。

「か 要の番・・・だ だよ・・・」

華穂は俺の顔なんて見ないで床ばかり見つめてた。

「あ・・・ああ・・・」

なんだか俺まで顔が赤くなつてきた。

「そ・・・その・・・・、口メン 華穂がまだき・・・着替え中とは思わなくて・・・」

そうだ レントゲン・・・だし

着替えるのは当たり前なんだつた・・・

バカな」とした・・・!!

「え、あ・・・いや・・・だ 大丈夫だよーべ・・・別に・・・」

「あ・・・ああ ゴメン・・・んじや・・・」

思い切り動搖したまま俺はレントゲン室に入る。

制服のボタンを外しはじめる。

華穂も・・・平氣とか言つてたけど一応傷ついたよなあ・・・

奴も一応女だし・・・

ん?

一応?

一応ってなんだ 一応って。

ずっと一緒にいたし・・・小学生の低学年の頃なんて素っ裸だって見したことあるわけだし・・・

いまさらいつまでもするナビとか・・・

その なんていうか・・・やつぱとほ違つわけなんだよなあ・・・

バカか俺は

何日に焼き付けてんだ 華穂の下着姿なんて！！

かああつとまた体が熱くなつてきて俺はすぐに制服を脱いだ。

## 第73話 公園（要）

「つたく・・・なんだよ 結局たいしたことなかつたじゃねえか・・・」

冬みたいな風が吹く中 華穂の隣で俺がつぶやく。

学校に途中で戻るのもめんどく

『うちやんと帰る』と適当なことを口ひりして保健の先生には先に帰らせた。

俺と華穂は公園のベンチに座ってる。

「あはは いいじゃん! 骨こじりとかあつたら後々めんどいし・・・」

「

「俺はレントゲンって好きじゃねえんだよ・・・病院もだけど。」

「あー、まあ・・・私も男の先生の前で脱いだりすんのはいやだ・・・・・じ・・・・」

言つた後で思い出したらしい。

華穂は顔を赤らめて下を向いた。

「いや・・・その・・・」

「別に 俺は気にしてないからさ」

「…………ううん そーだよねー。」

「…………何 どうかした?」

「え? い いや、なんでもないーー。」

「…………だつたら なんで泣きそうなわけ?」

「…………」

華穂はいつそう顔を赤らめて立ち上がった。

「なんでもないーー!」

華穂は涙目で立ち上がる。

「…………何怒つてんの? 意味わかんないんだけど?」

「べ・・・別に なんでもないつづてんでしょー。」

なんなんだコイツ・・・

意味わかんねえ 何がしたいんだ?

「わ 私! 先に帰るからー!」

華穂はやつぱり走り出さうとする。

その腕を慌ててつかむと華穂は心底いやそうな顔をする。

「・・・走るなよ お前だつて怪我・・・しちゃんだろう?」

「別に 走れないわけじゃない」

「あのなあ!なんだよ急に!可愛くねえな!—」

「な・・・つ 可愛くなくつたっていいよ!—」

「意味わかんねえんだよー急に泣きやうになつて!聞けば逆切れ!  
!意味わかんねえ!—」

「わ わかんなくていい!—」

華穂はそつ怒鳴つてまた下を向く。

見ると華穂の足元がだんだん濡れしていく。

泣いた

それがわかつた瞬間なんだか気がぬけてしまつて 僕はため息をついた。

泣かして しまつた

なぜだかは知らないが

目の前で華穂が泣いてる

「お おい・・・なんなんだよ? おい? どこか痛いのか?」

心配になつて肩に触れようとすると華穂はすぐに後ずさりした。

「もういい……触らないで……じゃあね……」

華穂は結局 走つて学校へ戻つていった。

## 第74話 公園（華穂）

「つたく・・・なんだよ 結局たいしたことなかつたじゃねえか・・・」

冬みたいな風が吹く中 私の隣で要がつぶやいた。

「あははー、いいじゃん 骨とか折れてたら後々めんどこい・・・」

「俺はレントゲンって好きじゃねえんだよ・・・病院もだけビレ。」

「あー、まあ・・・私も男の先生の前で脱いだりすんのはいやだ・・・」

脱いだり・・・?

わざのことを思い出すと急に体温が上がった気がした。

ヤバ 要・・・思に出すじゃん!-

思わずつむぐ。

なんとなく 要の「こと」を意識してしまつてゐる。

階段で かばつてくれた時から。

そうだ 男の子なんだつた みたいな感じ。

失礼かもしれないけど なんとなく やつ想つた。

要は?

私のこと 女の子だつて 思ひしるの?~

「別に 僕は気にしてないからさ」

気をつかつてる ともとれるやつの言葉。

だけど私は

気にしてない?

それ・・・は もうここにこいつら?

別に なんとも想つてないひと?~

それって・・・

「・・・う うん そーだよねー」

わざといひへじへ思ひまつた。

「…何どうかした?」

「え? いや、なんでもない……」

あれ？ 变・・・だなあ・・・

泣いぢやいそづ・・・

「……………だったら なんで泣きそりなわけ?」

11

気づいてほしくないのに

意識してないくせに

氣にしてないくせに

七八二  
元和

なんでもうございませんか？

ね  
え

私が敵のJと意識しないJとJを区別しないでしょ？

なのに

なんで?

ああ 本当に泣いてしまってしきだ

慌てて立ち上がる。

「なんでもない!...」

泣き声

泣き声

もつ少し 我慢・・・

「・・・何怒つてんの?意味わかんないんだけビ?」

「べ・・・別に なんでもないつづこんでしょ!」

「わ 私!先に帰るから!」

気まずくなつて 走り去つた。

すると腕をつかまれた。

「・・・走るなよ 前だつて座我・・・してんだら?」

「別に 走れないわけじゃない」

「あのなあーなんだよ急にー可愛くねえなー!」

「可愛くない・・・!?

「な・・・つ 可愛くなくつたつでーこみーー!」

「意味わかんねえんだよー急に泣きやつになつてー聞けば逆切れ!  
!意味わかんねえ!ー!」

「わ わかんなくていい!ー!」

「わかんなくていいよ

「わかつてほしくない

「わからないで?

「ダメだ

「もつ 泣く・・・

「お おこ・・・なんなんだよ?おこへビコか痛いのか?」

心配やうな煙の声と 肩に近づく匂い

燒いて後ずやつする。

「 もういい……触りないで……じゃあね……。」

そう言つて 私は学校へ向かった。

要から 逃げ出した

なんで泣いてしまったんだろう？

なんで今も すぐ脳が重苦しこんだろう？

体が 全部が 重い

怪我のせい？

違う そんなんじゃない

だって一番痛いのは・・・

しゃりしゃり走つて立ち止まる。

痛む 胸をおさえる。

「は・・・はあ・・・ツ」

痛い 痛い 痛い 痛い

涙がまたあふれだす。

意味わかんねえ

意味なんて 私が1番わかんない

なんであんなこといったのか したのか なんでこんな傷ついてる  
のか わかんないよ

## 第75話 要 異変

次の日 僕が教室に入るのがたまらなく嫌だったのはわかるだろ？

けど アイツが逆ギレすんだってどうなんだって話なわけで・・・

もやもや教室のドアの前で考えてこると後ろから肩をたたかれる。

「要？」

後ろを見ると心配げにこちらを見る燐。

もちろん横には飛鳥がいた。

「・・・お おはよっ・・・」

「何お前 教室の前で立ち止まって・・・怪我とか 大丈夫なのか  
？」

「あ、ああ・・・怪我はなんともない。」

「ふうん？なんともなくってよかつたね」

何も知らない いや、知らなくていいんだけど・・・

燐がにこつと微笑む。

その幼げな顔が華穂とだぶつて なんとなく恥ずかしい。

そんな俺を飛鳥はきょとんとした顔で見てくる。

燐はどこか華穂に似てるもんだから俺は燐を直視できないでいたんだ。

「おはよーーー！」

明るい 小さい子供みたいな声と口調でこちらに来たのは 脳を見ないでもわかる 華穂だった。

俺はふりむくことができなくて 飛鳥の足元ばかり見ていた。

「おはようひ華穂」

燐の声。

「うん！燐と飛鳥と・・・」

華穂の声が止まる。

俺に気がついて 昨日のことを思い出したのか

それとも俺だと気づいていないのか。

「・・・要？」

燐が俺の異変に気づいてやべづき 声をかける。

動くことができなかつた。

華穂の顔を見たら 何かが起る気がした。

それが何かまでは思いつかなかつたけど

今 華穂の顔を見ちゃいけない気がしたから。

ガラツ

教室のドアが開く。

飛鳥が腕を伸ばしてあけたらしい。

燐が俺をぬいて中に入る。

手をつないでいた飛鳥もそれに続く。

「・・・・・」

少し間があつて 俺も重い足を教室へ入れた。

後ろで華穂の ぼてぼてという効果音の似合つ足音が聞こえた。

「あ あのね 要！」

華穂が俺の服をつかむ。

「へ？」

思わず振り向いて 後悔する。

俺を見上げる華穂の顔

田があつた瞬間 頬に血液が集まってきた。

「あ・・・」

慌てて田をそらす。

その様子を新一や飛鳥が見ているのも気つく。

「あ 昨日は急に帰って、ゴメンー。」

「あ・・・うん 別に・・・」

田をそらしたまま適当に相槌。

ヤバイ なんで俺顔赤くしてんだろう?

華穂の顔見れね・・・

「えーと・・・」

華穂もしばらく黙る。

俺はとにかくこの場から逃げ出したくて、なんとななく飛鳥たちのほうへ田をやる。

飛鳥と田があつ。

必死に『助けてくれ』と田で訴えるが飛鳥は気づいていないのか黙つて見てるだけ。

おーおいおいおい・・・

「華穂！話終わつた？トイレ行かない？」

燐がにつこうと微笑みながら華穂に言ひつけ。

ナイス燐！！

俺の異変に気づいてかどつかは知らないが俺は心中で燐に拍手した。

「あ・・・うん」

華穂は燐と教室を出た。

「はあ・・・」

ため息をついてかばんをおひして机に置く。

すると飛鳥がこちらに寄ってきた。

「何 華穂となんかあつたのか？」

「はあ！？な なんで！？」

「様子がおかしい・・・というか・・・」

すると新一がニヤリと笑つて言ひ。

「なんか恋愛がらみっぽいしな」

「な・・・・・」

顔が真っ赤になつたのに気づく。

教室内の数名がこちらをチラチラ見てくるし・・・

「んなわけねえだろ!」

「けど 飛鳥と燐のケースもあるしね。」

新一はまたニヤニヤ笑う。

「べ 別に・・・昨日下着姿見たからちよつと意識しちゃつてるだけ恋愛どういつなんて・・・!?!?!?」

言い終わつてから口を開くやう。

「下着・・・」

「すがたあ!?!?」

2人が目を丸くする。

口がすべった・・・

ガリガリと頭をかいてうつむく。

きっと今俺はみつともない顔をしてるはずだ。

耳まで赤くて たぶん相当カッコ悪い。

「どうこうことだーなんでー? なんで下着ー?」

年頃の女の下着姿

そのキーワードに興奮した新一が俺に質問せめしていく。

「べ 別に好きで見たわけじゃねえー! ただレントゲンの時に間違えて入っちゃって···」

「へええ···」

「華穂の」

「「下着姿」」

2人がわざと声をそろひえて囁く。

「うるせえー! 思い出させるなよー!」

ああもう 最悪だー!

## 第76話 無意識 拒否 夢乃

朝 教室に入ると燐とかはいなくて。

確か明美は今日サボるつて言つてたよ'うな・・・

奈央は結構ギリギリに来るからまだ来るはずない。

キヨロリと見渡すと新一 要 飛鳥が窓際にいた。

「ねえ 燐は？」

飛鳥に聞くと新一と飛鳥はくすくす笑いながら

「トヤレニコニと申ひつよ。」

といつ。

「何があつたわけ？」

「いやーなんでもねえーーー」

明らかに何かあつた といつ態度で要が言つ。

バレバレ・・・

鼻でため息をついて私は女子トイレへ向かつた。

「・・・燐と・・・華穂?」

燐とその横に小さな影。

覗き込むとやつぱり華穂だった。

「要とか？」

私がそういって華穂の肩がピクリと動く。

「・・・華穂と何かあつたわけ?」

華穂は氣まずそうな顔で私を見た。

それから私と燐の腕をつかんで泣きそつた顔で囁いた。

「どうすればいいの?何か変なのーおかしいの・・・違つの・・・」

軽くパニックになつてこむよつて華穂は田をぐるぐる回しながら高い弱弱しい声で言った。

「何?何が?」

私が頭を撫ると華穂はふるふると頭を横にふった。

「こつもと違うの 要・・・違つの・・・」

なんとなく 何が起きてしまったのかがわかった。

過剰反応もここといふだとかすかに思つて田舎をやります。

いつかいつになるとわかつてゐた。

なんの感情もない者達がずっとねばこつて 守りあつて  
そんな都合のいい話 ないだらつて  
わかつていたのに

これいひなると 自分のじとじやなくとも泣きだるくなる。

「華穂 落ち着いて 何かあったの？」

燐が華穂の手を握る。

「き 昨日階段でかばつてくれた時から・・・なんか顔見るの恥ず  
かしくて・・・」なんかもうよくわかんない・・・

身に覚えがあるはずの燐は黙つた。

「・・・保健室行つてくる」

華穂はそう言つて燐の手を離した。

「え・・・『うしたの?』

「おなか痛い」

華穂はぼそぼそ喋つてトイレを出た。

バタン・・・

華穂がいなくなると急にトイレの異臭が気になつた。

「燐 出よ?」

私が言うと燐はコクンと頷いた。

「華穂のこと・・・じつ思ひへ.」

ドアを開けてぼそりと通りへ。

「要の」と・・・好き っぽいね

『要』と『好物』の単語はかなつ小ちかく書ひ。

「・・・まつたぐ」

どんなにつなぎとめておきたいと私一人が思つても しづがなかつた。

「ねえ 燐・・・」

絶対に燐には顔が見えないよつて 背を向けて叫ぶ。

「なんで いつなつちやつたんだる?」

燐の返事はなかつた。

どうしてだらう?

なんでだらう?

わかつていていたことでも やつぱり動搖してしまつ。誰かに問い合わせてしまひたかつた。

答えを私は知つていたし どうするべきなかもわかつてた。

だけど したくなかった。

なんで?どうして?

どうして あのまんま『みんな仲良し』でいられなかつたんだろ  
う?

燐と飛鳥

克哉は私

華穂と要

みんないいやつで離れてく

だナビやっぽり いつからか気がついていたことだつた。

いつかはいいして誰かしら離れていくと

それまでは笑つてこけるだらつと

ビニがでわかつてた。

それでも 無意識のうちにそれをわかりきつてしまつことを反省していた。

第77話 無題（前書き）

すいません……サブタイトル思いつきましたんでした……

## 第77話 無題

夢乃と2人で教室に戻るとクラスの人たちはほとんどやられていて、奈央もいた。

「燐と夢乃 どこ行つてたんだよ？」

「んー トライー」

私が言つと奈央は「ふーん？」とだけ言へ。

すると飛鳥が私の腕を握つて無言でぐいぐいひつぱる。

「へ？ 飛鳥？」

慌ててそちらへ歩きだすと逆の腕を克哉につかまれる。

「まーまー飛鳥 いいじゃん別にー 」

克哉はにっこりと微笑んで飛鳥に向つた。

「え？え？何？何かあつたの？」

「なんでもねえ！燐 来い！」

飛鳥がイラついた声で言つ。

「なんでもない感じじゃないんですけど」

私が言つと克哉は嬉しそうに

「だりー？ホラ燐 ちよつと来て」

克哉はいつも私を窓際へ連れて行こうとする。

「燐 行くなよ。りくでもねえ」とわざわざいれる。

飛鳥は廊下へ連れ出そうとする。

「えーとえーとえーヒー！説明してよー。ビックリがいいのかわかんな  
いし！」

「いいからー来い！」

飛鳥が私の腕をひっぱる。

「うふ・・・待つて……」

ドンッ 「ンンッ……

「・・・へ?」

今の にぶい音は・・・・・・・もじや?

見ると飛鳥が後頭部をドアにぶつけている。

私が思わず突き飛ばしてしまったから。

「ひやあ！…飛鳥！？大丈夫！？」

「つてええ・・・」

「ああ、」りや 大変 燐一 飛鳥を保健室につれてつてやりなよ」

克哉がにっこりと微笑む。

「え・・・「うん」

「テメ・・・克哉・・・」

「ホラホラおとなしくしてー！」

克哉が飛鳥の背中を軽くたたく。

私は飛鳥の腕をつかんで保健室へ連れて行つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9461a/>

---

気持ちのカタチ

2010年10月9日01時40分発行